田原本町文化財調査年報 2011年度 21

田原本町教育委員会

田原本町文化財調査年報 2011年度 21

田原本町教育委員会

例　言

1．本書は、田原本町教育委員会が2011年度（平成23年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。

2．埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。

3．本書は、Ⅰ．1を清水琢哉、Ⅰ．2を清水・奥谷知日朗の各調査担当者、Ⅱを藤田三郎・西岡成晃、Ⅲを西岡、Ⅳを藤田が執筆し、Ⅰ．2の遺物図面は清水・奥本英里・江浦至希子・児玉駿介が実測、Ⅳの遺物図面は江浦が実測・トレースをおこなった。本書は西岡が編集した。

目　　次

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財
1．町内における開発
（1）町内における開発と発掘調査 …… 1
2．埋蔵文化財の調査
（1）発掘調査の概要 …… 2
1．唐古・鍵遺跡 第109次調査 …… 4
2．唐古・鍵遺跡 第110次調査 …… 12
3．唐古・鍵遺跡 第111次調査 …… 16
4．唐古・鍵遺跡 第112次調査 …… 22
5．保津・宮古遺跡 第39次調査 …… 28
6．十六面･薬王寺遺跡 第27・28次調査 …… 35
7．西竹田遺跡 第4次調査 …… 43
8．千代遺跡（勝楽寺跡）第8次調査 …… 50
9．富本遺跡 第2次調査 …… 54
10. 薬王寺南遺跡 試掘調査（S－201101） …… 57
11. 十六面･薬王寺遺跡 試掘調査（S－201102） …… 59
12. 秦庄遺跡 試掘調査（S－201103） …… 68
（2）工事立会の概要 …… 70
1．唐古・鍵遺跡 工事立会（R－201104） …… 73
2．多遺跡 工事立会（R－201142） …… 75

Ⅱ．資料の整理と活用・普及
1．文化財資料の整理・保管
（1）埋蔵文化財の整理・保管 …… 81
（2）図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化 …… 84
（3）図書の受領 …… 85
（4）資料の寄贈 …… 85
2．遺跡・文化財の保護
（1）町指定文化財 …… 86
3．講座 …… 87
4．学校教育等への支援
（1）小学校出前授業・教材貸出 …… 88
（2）中学校職場体験学習 …… 89
（3）大学の学外授業 …… 89

（4）講師の派遣 ……90
（5）技能講習の受入 ……90
5．刊行物一覧 ……91
6．資料の活用
（1）資料の貸出 ……92
（2）写真掲載・撮影 ……94
（3）資料調査 ……98
7．ボランティア組織
（1）ボランティア組織の概要 ……98

Ⅲ．唐古・鍵考古学ミュージアム
1．常設展示
（1）田原本ギャラリー　今回の逸品……103
（2）展示内容の変更……104
2．企画展・ミニ展示
（1）春季企画展「消えた古墳」……105
（2）秋季企画展「弥生エッセンス」……108
（3）特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」……111
3．入館者・ホームページ
（1）入館者数……112
（2）入館者アンケート……115
（3）視察・研修・学校等からの来館……115
（4）ホームページ……116
4．ボランティアガイド
（1）ボランティアガイドの実績……117

Ⅳ．資料の報告
1．唐古・鍵遺跡出土の絵画・記号土器と特殊土器（藤田三郎）……121

Ⅰ．田原本町の埋蔵文化財

1．町内における開発

（1）町内における開発と発掘調査

本町における2011年度（平成23年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第93条）は58件、地方公共団体等による通知（第94条）は35件で、計93件を数える。昨年度までと比較して町事業による94条通知件数がほぼ倍となっているが、これは平成23年度に田原本町の総務課が実施した防災無線設置事業に伴う無線拡声子局設置工事の通知が18件あったためである。

本年度の発掘調査は10件である。内訳は、個人住宅等の建築１件、史跡整備に伴う事前調査２件、公共事業３件、民間開発４件である。

第１表　田原本町における 2011 年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93 条	発掘通知 94 条		発掘調査	工事立会	慎重工事	先行工事
58	35	通知内容	12	44	31	6
		実施分	町 10 県 0	46	－	－

第２表　田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

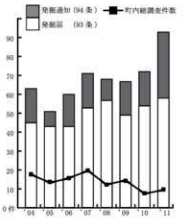
		'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11
発掘届（93 条		45	43	43	53	57	49	54	**58**
発掘通知（94 条		18	8	17	18	11	18	18	**35**
計		**63**	**51**	**60**	**71**	**68**	**67**	**72**	**93**
発掘件数	町	18	14	12	18	11	13	7	**10**
	県	0	0	4	2	1	1	1	**0**
町内総調査件数		**18**	**14**	**16**	**20**	**12**	**14**	**8**	**10**

第３表　町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

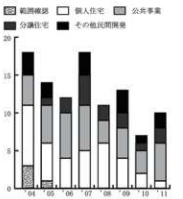
		'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11
範囲確認		3	1	0	0	0	0	0	**0**
個人住宅		8	5	4	5	6	4	2	**1**
公共事業		4	5	6	6	3	4	3	**5**
民間開発	分譲	0	1	2	4	2	2	1	**2**
	その他	3	2	0	3	0	3	1	**2**
計		**18**	**14**	**12**	**18**	**11**	**13**	**7**	**10**

第４表　町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

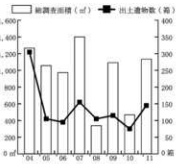
	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11
総調査面積（㎡）	1,235	1,030	986	1,400	341	1,117	457	**1,152**
出土遺物数（箱）	314	104	95	146	103	118	74	**140**



第１図　発掘届・通知と調査件数の推移



第２図　発掘調査原因の推移



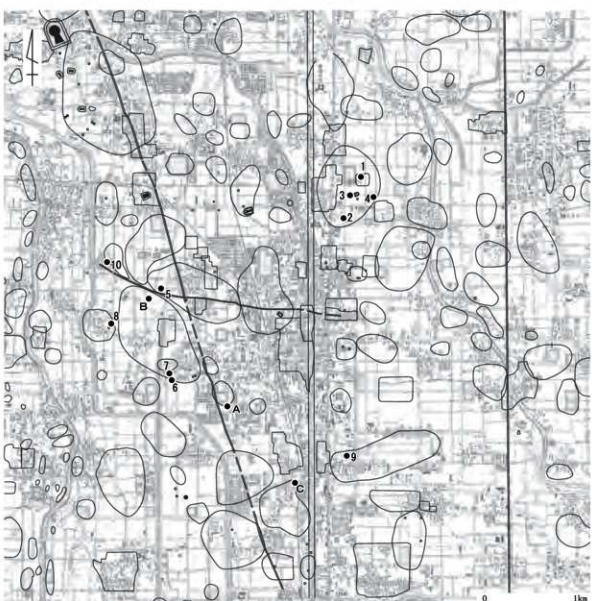
第３図　調査面積と出土遺物数の推移

2．埋蔵文化財の調査

（1）発掘調査の概要

本年度は10件の本調査をおこなった。弥生時代～古墳時代では、十六面・薬王寺遺跡、保津・宮古遺跡で多くの成果が得られた。十六面・薬王寺遺跡では、遺跡南部での宅地分譲に伴う発掘調査2件を実施し、弥生時代中期・古墳時代前期の方形周溝墓と河跡・集落関係の遺構等を検出した。特に十六面・薬王寺遺跡で弥生時代中期の遺構を検出したのは大きな成果であった。また、唐古・鍵遺跡第111次調査では、唐古・鍵4号墳の墳形解明につながる成果が得られた。

古代～中世では、西竹田遺跡と保津・宮古遺跡で平安時代の井戸を検出した。また、唐古・鍵遺跡第109次調査でも平安時代の井戸等を検出した。興福寺雑役免庄田中庄の荘官またはその前身となる在地領主に関わる遺構とみられる。なお、唐古・鍵遺跡第112次調査では、丹波山遺跡に近接する



第4図　田原本町の遺跡と調査地点（S＝1/40,000）

地点で調査を実施した。中世に遡る遺物が多数出土し、丹波山遺跡の中世居館に関わる資料を得ることができた。

近世では、千代遺跡では八条環濠集落の北側環濠と考えられる大溝を検出し、その埋没時期が明らかとなった。また、富本遺跡では環濠の可能性がある近世大溝を確認した。

第５表　2011年度　発掘調査一覧表

	遺跡名	次数	調査地	原因者	原因	期間	面積	担当	備考
			検出遺構			出土遺物			遺物量（箱）
1	唐古・鍵	第109次	田原本町大字唐古小字田中 139、140	田原本町長	史跡公園整備（環境帯復元）に伴う設計資料作成のための確認調査	2011．6．27 ～ 7．22	39㎡	奥谷知士朗 西岡成晃	総合政策課
			弥生時代：濠３条 中　世　：土坑１基 中世～　：土壙１基 現　代　：土坑１基			弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、近世陶磁器等			12箱
2	唐古・鍵	第110次	田原本町大字鍵小字中溝田 142-4他南側道路	田原本町長	下水道工事	2011．6．29 ～ 6．30	10㎡	清水琢哉	下水道課
			弥生時代以前：河跡２条 弥生時代　：落ち込み２条 中　世　：素掘小溝群			弥生土器等			１箱
3	唐古・鍵	第111次	田原本町大字唐古 小字池田 180 北側道路	田原本町長	史跡公園整備のための発掘調査	2011．11．24 ～12．1．6	207㎡	奥谷・西岡	総合政策課
			古　墳　時　代：古墳１基 古代～中世前期：土坑１基、素掘小溝群 中世後期～近世前期：土坑２基、素掘小溝群 近世後期～近代：野井戸１基、溝２条、河跡１条			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、埴輪、石器、金属器・ガラス玉、瓦等			72箱
4	唐古・鍵	第112次	田原本町大字鍵小字堀越 193-1 東側水路他	田原本町長	水路改修	2012．1．9 ～ 1．17	24㎡	清水・奥谷・西岡	建設課
			中世：溝１条			弥生土器、土師器、瓦質土器、近世陶磁器等			１箱
5	保津・宮古	第 39 次	田原本町大字宮古 小字南吉田６－１	個人	賃貸住宅の建築	2011．10．17 ～11．2	109㎡	奥谷・西岡	受託事業
			弥生時代以前　：河跡２条、落ち込み２条 古墳時代～古代：土坑１基、柱穴群 中　世　：土坑２基、溝１条、柱穴３基 近　世　：素掘小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、木製品、石器等			11箱
6	十六面・薬王寺	第27次	田原本町大字薬王寺 小字坊田 374－１	画たけむらハウジング	宅地造成	2011．5．9 ～ 6．3	320㎡	奥谷・西岡	受託事業
			弥生時代中期　：方形周溝墓１基 弥生時代後期～ 古墳時代前期：方形周溝墓１基、土坑２基、溝９条、柱穴群 古墳時代後期　：溝１条 中　近　世　：土坑１基、柱穴２基、素掘小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等			28箱
7	十六面・薬王寺	第28次	田原本町大字薬王寺 小字坊田 377－１－２	画たけむらハウジング	宅地造成	2012．3．12 ～ 3．30	210㎡	奥谷・西岡	受託事業
			弥生時代中期　：溝１条、方形周溝墓１基 弥生時代後期？：土坑２基、溝２条 古墳時代初頃？：河跡１条 古墳時代前期　：溝３条、方形周溝墓１基、円形周溝墓１基、柱穴１基、落ち込み１条 中　近　世：素掘小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、埴輪、石器、木器等			10箱
8	西竹田	第４次	田原本町大字西竹田小字 西浜田 26－１、27－１他	（仮）池田会	特別養護老人ホームの建設	2011．7．14 ～ 7．25	226㎡	清水・西岡	受託事業
			古墳時代：溝３条、柱穴２基 平安時代：井戸１基、柱穴１基 中　近　世：素掘小溝群、土坑１基			土師器、黒色土器、瓦器			１箱
9	千代	第８次	田原本町大字千代 小字下西 1158	田原本町長	屋外拡声子局の設置	2011．12．5	1.5㎡	清水・奥谷	総務課
			中　世　今：素掘小溝３条 近世～現代：大溝１条			土師器、瓦器、近世陶磁器、石器、瓦等			１箱
10	富本	第２次	田原本町大字富本 小字角田 215－１	個人	個人住宅の建築	2012．1．16	５㎡	清水	国庫補助事業
			近世：大溝１条			土師器、瓦質土器、近世陶磁器等			１箱

第６表　2011年度　試掘調査一覧表

	遺跡名	調査地	原因者	原因	期間	面積	担当	備考
		検出遺構			出土遺物			遺物量（箱）
A	薬王寺南遺跡 S-201101	田原本町大字薬王寺 小字梅 189	画たけむらハウジング	宅地造成	2011．4．26	14㎡	清水・奥谷・西岡	直接執行
		中世以前：落ち込み 中・近世：素掘小溝群			なし			０箱
B	十六面・薬王寺遺跡 S-201102	田原本町大字十六面 小字竹原田 55 他	陶オークワ	大型店舗の建築	2011．12．6 ～12．21	614㎡	清水	国庫補助事業
		弥生時代～古墳時代：溝１条、落ち込み２条 古墳～古代？：河跡７条 古　代　：建物跡２棟、溝５条 中　世　：素掘小溝群			弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等			１箱
C	薬庄遺跡 S-201103	田原本町大字宮森 小字北田 333-2、334-1	北晃地建	宅地造成	2012．2．24	８㎡	清水・奥谷・西岡	直接執行
		時期不明：河跡１条			土師器、瓦等			１箱

1．唐古・鍵遺跡　第109次調査

1．遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落遺跡である。

本町では遺跡公園整備事業を進めており、史跡地東側でおこなった第24次調査や第59次調査の成果をもとに、弥生集落の北東側環濠群を復元する計画をもっている。このうち、最も内側の「大環濠」には、一辺約25m四方の土壇が存在しており、この土壇の性格と時期を明らかにするとともに、復元計画が遺構に与える影響について、調査をおこなった。

本地周辺の調査から、唐古池東側には古墳時代の集落の存在が想定されているほか、中世の豪族居館である唐古東氏居館跡推定地とも重複している。唐古東氏は長谷川一党に挙げられており（『大乗院寺社雑事記』「長谷川一党之内丹波・唐古東・小阪・戸嶋」）、本地南側には現在も土地が高い部分が存在する。このため本地の土壇も中世居館との関連が考えられた。

2．調査の成果

一辺約25m、高さ0.8～1m、平面形がほぼ正方形の土壇に対し、その中央から北及び東方向に幅1.5mのL字形の調査区を設定した。南北方向の調査区を第1トレンチ、東西方向の調査区を第2トレンチとする。

調査は人力でおこない、中世遺物包含層の第Ⅵ層上面までを面的、それ以下は排水溝部分の深掘りによって層序と遺構を確認した。

（1）層序

本地は平成16・18年に史跡地として買収される以前は畑地（柿畑）であった。

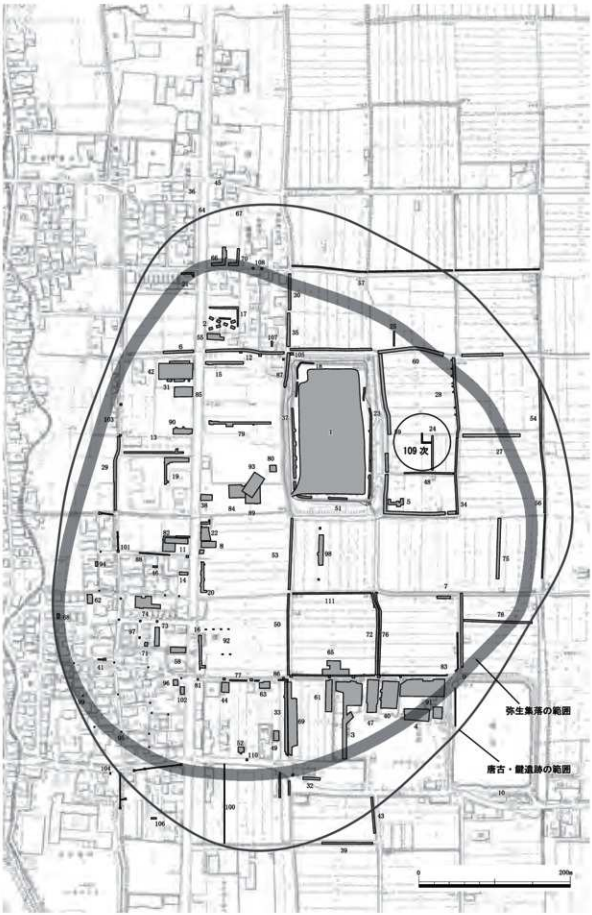
Ⅰ：灰褐色土〔検出標高48.8m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡茶灰色土〔48.5m〕、Ⅲ：茶褐色土〔48.3m〕、Ⅳ：褐灰色土〔48.1m〕、Ⅴ：暗褐色土〔48.0m〕、Ⅵ：黒褐色土〔47.9m〕、Ⅶ：暗褐灰色土〔47.7m〕、Ⅷ：灰黒色土〔47.5m〕、Ⅸ：暗黄灰色砂質土〔47.2m〕、Ⅹ：暗青灰色粘土〔46.5m〕

第Ⅰ層はビニールを含む現代畑土である。第Ⅱ・Ⅲ層は染付茶碗片を含み、近世後期以降の造成土と考えられる。第Ⅳ～Ⅵ層は弥生土器や中世土器の細片を多く含む中世遺物包含層である。第Ⅳ層には瓦質土器が含まれることから室町期に、第Ⅴ・Ⅵ層は鎌倉期に形成されたとみられる。

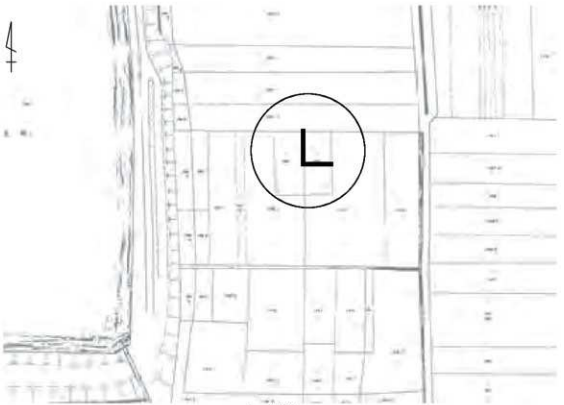
第Ⅶ層からは黒色土器塊片や瓦器塊片が出土しているが、瓦器は発掘調査時の混入品とみられる。第Ⅶ層は10世紀後半～11世紀にかけて形成された遺物包含層と考えられる。この上面が平安時代後期の遺構検出面である。

第Ⅷ層は弥生～古墳時代の遺物包含層である。弥生時代中期～後期の土器片を多く含み、古墳時代後期の須恵器片も混じる。土壇周囲の水田（上面標高47.7～47.9m）では、第Ⅶ層と第Ⅷ層を削って水田耕土と床土が形成される。

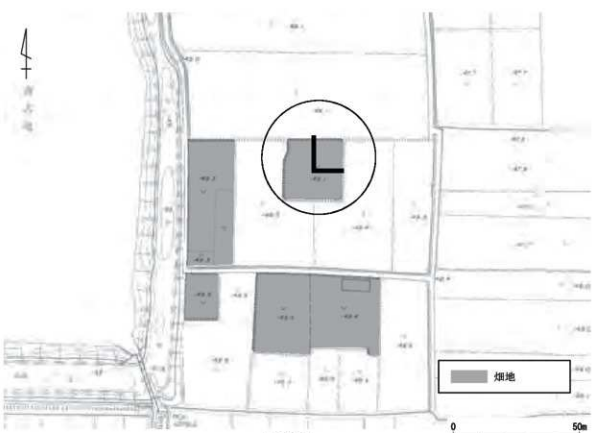
第Ⅸ層上面が弥生時代の遺構検出面である。調査区北端で確認した第Ⅹ層は固くしまっており、地山層の可能性がある。



第５図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）



1．地籍図



2．現況図

第６図　調査区位置図（Ｓ＝1,500）

（２）遺構と遺物

ａ．第１トレンチ

トレンチ西壁に沿って掘削した排水溝内で溝３条を確認した。南東－北西方向にちかい方向に軸をもっているとみられるが、上面のみの検出であるため、深さ等の詳細は不明である。

弥生時代

ＳＤ－1101　第１トレンチ北端で南北幅2.7mにわたって検出した溝である。南肩のみ検出した。

ＳＤ－1102　第１トレンチ中央で南北幅約９mにわたって検出した大溝である。

ＳＤ－1103　第１トレンチ南端で検出した溝である。北東肩のみの検出のため溝幅は不明。南南東－北北西方向に軸をもつ可能性がある。

ｂ．第２トレンチ

第２トレンチでは土坑２基を検出した。いずれの土坑の壁面・底面でも地山層を確認していない。第２トレンチのほぼ全域は、位置関係からＳＤ－1102にあたるとみられる。

中世

ＳＫ－2051　第２トレンチ東端で検出した土坑である。南側排水溝内での検出のため平面形は確認していない。断面の形状は円筒形を呈するとみられる。平面径は約1.0m、深さ約0.9mを測る。第Ⅶ層上面が遺構検出面で、堆積土は上層が暗灰褐色土、中層が暗灰色粘土、下層が灰黒色粘土である。上層から土師器中皿・羽釜片が出土したほか、下層から底を打ち欠いた土師器羽釜１点が出土した。12世紀前半の井戸とみられる。

現代

ＳＫ－2001　第２トレンチ中央で検出した土坑である。平面形が長方形を呈し、北及び南は調査区外に拡がる。東西幅約0.9m、深さ約1.2mを測る。第Ⅱ層上面が検出面で、上層からは束ねた針金が出土したほか、土坑底面からは礎板とみられる厚い板材数点が出土した。

３．まとめ

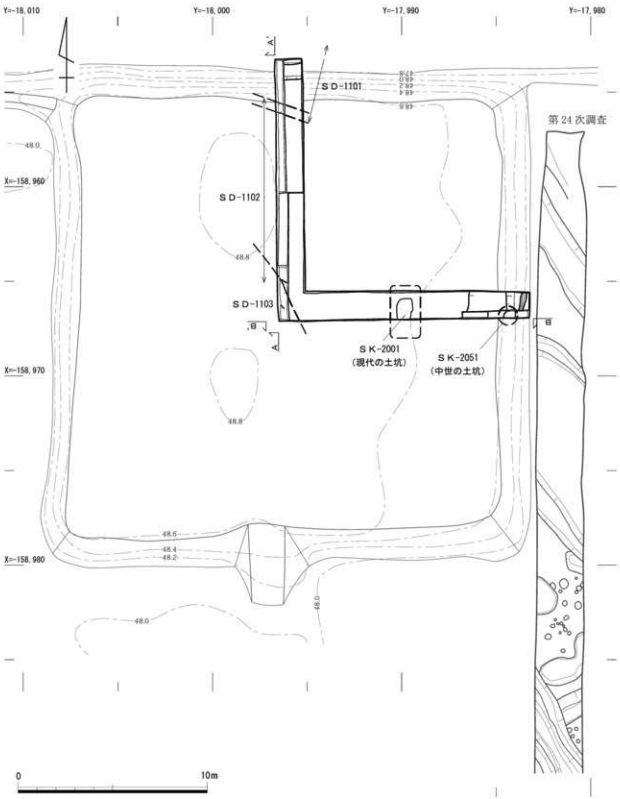
本調査では弥生時代・中世・現代の遺構を検出した。

弥生時代の遺構検出面は標高約47.2mである。弥生時代の遺構として、溝３条を確認した。排水溝内の検出のため不明な点が多いが、これらは第24次調査で検出している遺構に対応し、ＳＤ－1101は第24次ＳＤ－203、ＳＤ－1102は第24次ＳＤ－201、ＳＤ－1103は第24次ＳＤ－107に、それぞれ対応する。ＳＤ－1102は大環濠と考えられる。

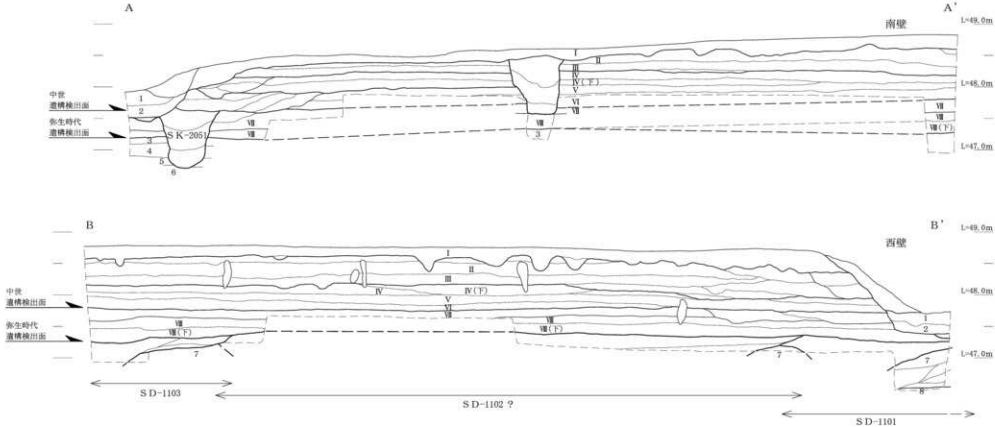
弥生時代の遺構検出面上には、第Ⅷ層：弥生～古墳時代の遺物包含層が形成され、この層からは古墳時代後期の須恵器片等が出土している。唐古・鍵弥生集落の廃絶後、本地周辺に古墳時代集落が営まれた頃に第Ⅷ層が形成されたとみられる。

古代の遺物包含層である第Ⅶ層上面が平安時代後期の遺構検出面で、標高は47.6～47.8mである。12世紀の井戸ＳＫ－2051は、荘園「田中荘」との関連が考えられる。

土壙は、ＳＫ－2051の埋没後の鎌倉時代以降に形成されたと考えられるが、柱穴等の居住遺構は不明であり、本調査ではその性格を判断することはできなかった。今後の調査に期待したい。



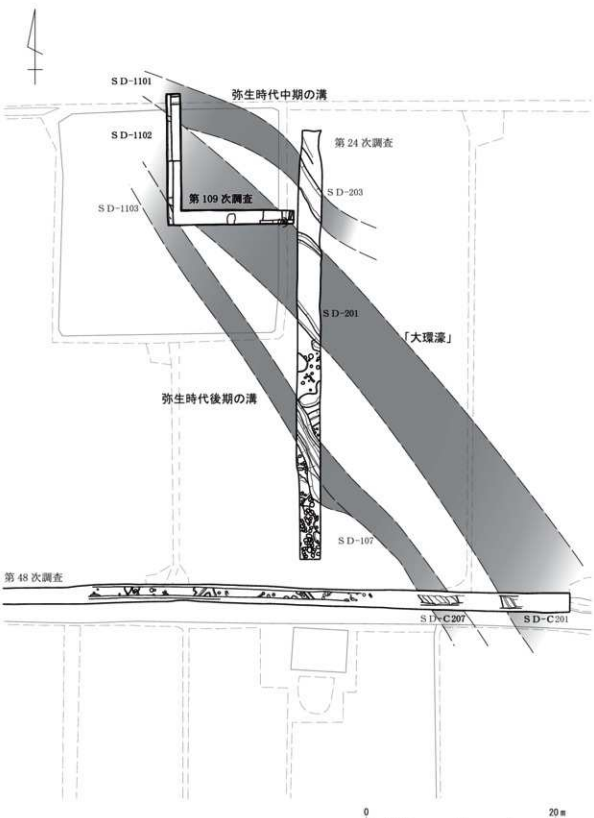
第７図　調査区平面図（S＝1/200）



Ⅰ	灰褐色土	現代					
Ⅱ	淡茶灰色土	近世～近代					
Ⅲ	茶褐色土						
Ⅳ	褐灰色土	中世	1	暗青灰色土	耕土		
Ⅴ	暗褐色土		2	灰褐色土	床土		
Ⅵ	黒褐色土 〔瓦器含む〕		3	暗黄褐色砂質土	遺構堆積土		
Ⅶ	暗褐灰色土〔黒色土器含む〕	古代？	4	暗灰青色砂質土			
Ⅷ	灰黒色土 〔須恵器含む〕	古墳時代	5	緑灰色シルト			
Ⅷ(下)	黒灰色土	弥生後期	6	暗灰褐色土			
						7	暗黄灰色砂質土
						8	暗青灰色粘土 地山？

0 3m

第８図　西壁及び南壁断面図（Ｓ＝1/60）



第9図　環濠・溝復元図（S＝1/400）

1．調査地全景（北東から）

2．調査地全景（南西から）

3．第１トレンチ西壁土層堆積状況（北東から）

4．第２トレンチ南壁土層堆積状況（北東から）

5．SK－2051遺物出土状況（北東から）

6．SK－2051出土土器

2．唐古・鍵遺跡　第110次調査

1．遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。

今回の調査は、遺跡南端の公共下水道工事に伴って実施した。人坑２ヶ所について発掘調査で対応し、それ以外の工事は工事立会で対応した。２ヶ所の人坑は第33・49次調査地点の南側隣接道路上に位置するが、両調査区では集落南端を囲む環濠帯を検出しており、調査区にも環濠がかかる可能性が考えられた。工事掘削はそれぞれ2.2×2.2mの方形で、調査面積は約10㎡である。

2．調査の成果

（１）層序

調査地の現状は道路である。第１トレンチは道路拡幅前まで水田であったとみられる。また、第２トレンチ及び西側の工事立会部分は近世～近代まで水路となっていた可能性が高い。ここでは、第２トレンチの層序を示す。

Ⅰ：アスファルト〔検出標高49.0m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：クラッシャーラン〔48.9m〕、Ⅲ：淡褐色砂礫土（山砂）〔48.6m〕、Ⅳ：暗青灰色土（礫混）〔48.1m〕、Ⅴ：暗青灰色粘土〔47.9m〕、Ⅵ：暗青灰色土〔47.8m〕、Ⅶ：暗褐色土（砂多し）〔47.7m〕、Ⅷ：灰色粗砂（褐色土混）〔47.6m〕、Ⅸ：灰色粗砂〔47.3m〕

第Ⅰ～Ⅲ層は現代道路建設に伴う整地層、第Ⅳ層もこれと一連の水路埋め戻し土とみられる。第Ⅴ・Ⅵ層は近世頃の旧水路堆積土、第Ⅶ層は中世遺物包含層、第Ⅷ層は弥生時代中期頃の河川堆積、第Ⅸ層は弥生時代以前の河川堆積層とみられる。

調査では、第Ⅷ層上面まで重機により掘削し、遺構の検出をおこなった。

（２）遺構と遺物

ａ．第１トレンチ

弥生時代

ＳＲ－1101　調査区全体で検出した河道状の遺構である。弥生時代中期頃の土器を含む黒灰色粘砂で、調査区全体に拡がるため遺構の規模は明らかでない。旧河道上に形成された浅い落ち込み状の堆積層と考えられる。なお、第１トレンチ下層は遺物を含まない微砂～粗砂堆積で、弥生時代以前の河跡となる可能性がある。

中世

素掘小溝群　南北方向の小溝１条、東西方向の小溝１条を検出した。

ｂ．第２トレンチ

弥生時代

ＳＲ－2101　調査区全体が河跡状の遺構である。調査区西半に向かって深くなる灰色粗砂層には弥生時代中期頃の土器が含まれる。調査区が狭小であるため遺構の性格は明らかでないが、河跡の埋没過程で形成された落ち込み状の遺構であ

第10図　ＳＲ-1101 出土土器

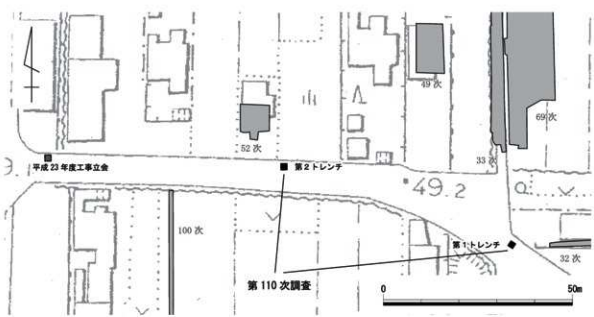
ると考えられる。なお、下層の灰色粗砂層は遺物が出土していないものの、弥生時代中期かそれ以前の河跡堆積とみられる。

中世

素掘小溝群　東西方向の小溝２条を検出した。中世の耕作に関わる遺構とみられる。

３．まとめ

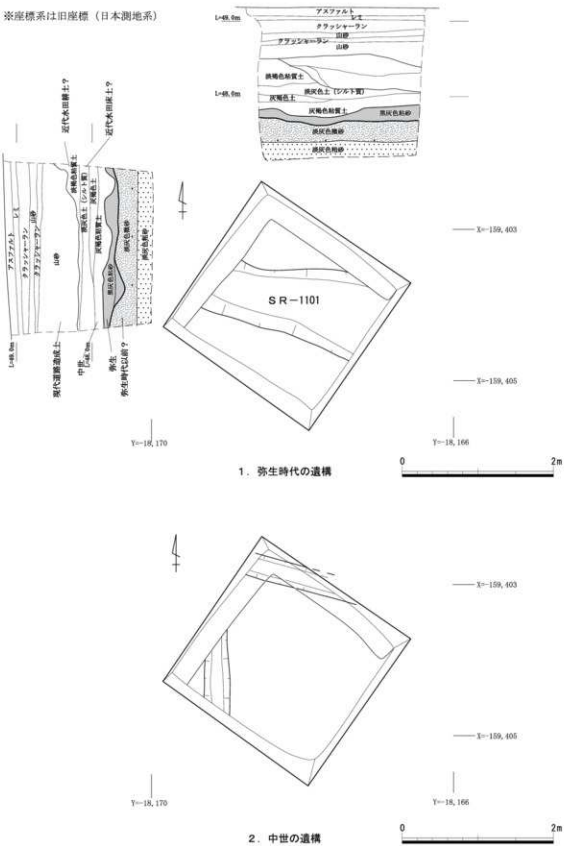
今回の調査では、弥生時代以前とみられる河跡、弥生時代の落ち込み？、中世の素掘小溝等を検出した。当初の想定では、弥生時代の大環濠が第２トレンチ付近を通る可能性が考えられていたが、想定よりも北側を通過している可能性がある。なお、国道との交差点付近で工事立会をおこなったが、この地点では弥生時代後期頃の遺物包含層を検出している。ただし、遺物量が少ないことから、大環濠よりも外側となる可能性がある。いずれにしても、狭小な調査区による調査であるため、今後の周辺の調査により環濠の位置を確認していく必要がある。



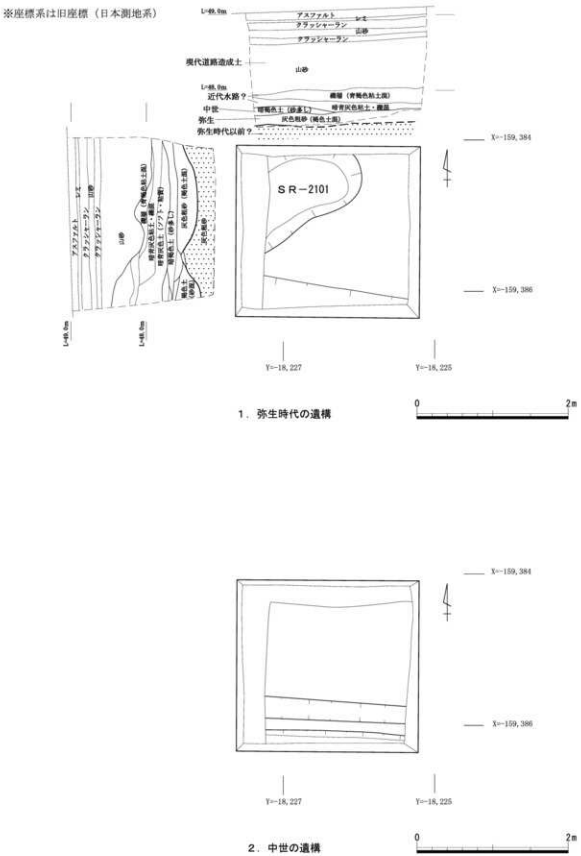
第 11 図　調査地位置図（Ｓ＝1/1,000）

１．第１トレンチ遺構検出状況（南東から）

２．第２トレンチ遺構検出状況（東から）



第12図　第1トレンチ遺構平面図及び断面図（S＝1/50）



第 13 図　第 2 トレンチ遺構平面図及び断面図（S＝1/50）

3．唐古・鍵遺跡　第111次調査

1．遺跡・既調査の概要

今回の調査は遺跡の中央にあたる。周辺では過去に第50・53・72・76・98次調査をおこない、落ち込みや中期～後期の遺構を検出している。本調査地東側の南北道路及び水路に伴って調査した第72・76次調査では古墳３基が確認された。調査区中央では円墳２基を、調査区北端では前方後円墳を検出した。唐古・鍵４号墳と名付けられたこの前方後円墳は、弥生環濠集落の廃絶後に形成された古墳群（唐古・鍵古墳群）の盟主的な存在であったと考えられている。

なお、本調査地の東西道路は、戦中、首相であった東条英機がここを通るため、里道を突貫工事で拡幅した道路で地元では「東条道」と呼ばれている。

2．調査の成果

唐古・鍵遺跡の史跡整備事業の一環として、史跡指定地南端に擁壁が設置されることとなった。今回の調査はこの擁壁工事に起因するものであり、東西長約106ｍの調査区を設定した。調査は、工事深度が中世遺物包含層にとどまり弥生時代の遺構検出面まで達しない設計であったため、標高47.7ｍまでである。

（１）層序

調査地の現況は道路及び水田である。ここでは道路側の層序を示す。

Ⅰ：クラッシャーラン〔検出標高48.5ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：茶灰色土〔48.4ｍ〕、Ⅲ：灰褐色土〔48.2ｍ〕、Ⅳ：褐色土〔48.0ｍ〕、Ⅴ：黒褐色土〔48.9ｍ〕、Ⅵ：暗灰褐色砂質土〔47.8ｍ〕、Ⅶ：黒褐色土（砂混）〔47.6～47.7ｍ〕

第Ⅰ・Ⅱ層は現代造成土、第Ⅲ層は近代造成土で、東条道の敷設時に造成した土層とみられる。第Ⅳ～Ⅵ層までは中世遺物包含層、第Ⅶ層以下が弥生時代の遺物包含層となる。調査区東端では、唐古・鍵４号墳の墳丘部分が残っており、その上層にうすく中世遺物包含層が堆積する。

（２）遺構と遺物

古墳時代

唐古・鍵４号墳　調査区東端で検出した古墳である。東端より約12ｍが墳丘にあたり、高さ約0.4ｍの黒褐色土が残存していた。墳丘西側の約10ｍが周濠部分にあたるとみられる。本調査では周濠の掘り下げをおこなっておらず、部分的な確認にとどまるため詳細は不明である。

中世前期

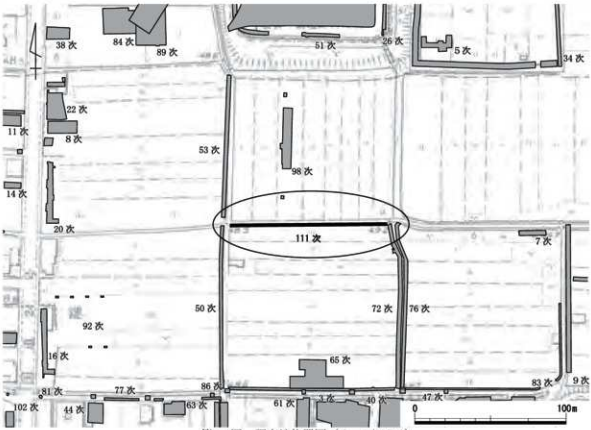
第Ⅶ層上面で検出した遺構である。掘削をおこなっていないため詳細不明。

素掘小溝群　調査区西半から中央では東西方向、東側では西南西－東南東方向の小溝を検出している。斜行する小溝は唐古・鍵４号墳の影響をうけていたと考えられる。古墳周濠上でも小溝を検出していることから、周濠が埋まってから掘削されたものである。

中世後期～近世前期

第Ⅵ層上面で検出した遺構である。

ＳＫ－51　調査区西半中央で検出した土坑である。掘削をおこなっていないため詳細は不明。



第14図　調査地位置図（S＝1/2,500）

平面形は円形で約2.2mを測る。井戸であろうか。

ＳＫ－52　調査区中央で検出した土坑である。一部掘削をおこなったが、湧水が激しく完掘していない。平面形は長楕円形で短辺は約1.8m、深さは1.1m以上を測る。中世の井戸か。

素掘小溝群　調査区全域で検出した小溝群である。土層より、２時期の小溝群がある。新しい小溝群は、黒褐色土を埋土とする。埋土が前述の唐古・鍵４号墳の墳丘土に似ており、墳丘を切り崩して小溝を埋めた可能性が考えられる。

近世後期～近代

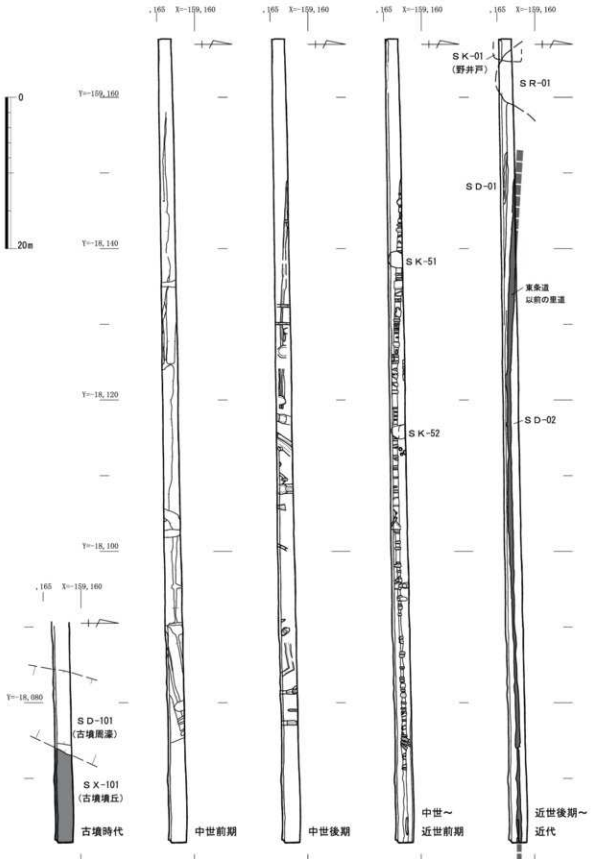
ＳＫ－01　調査区西端、約2.8mにわたって検出した野井戸である。調査区外にひろがっており、その東端を検出した。

ＳＤ－01　調査区北端に沿って検出した東西方向の溝である。溝の北肩は調査区外となるため溝幅は不明。深さは約0.4mである。

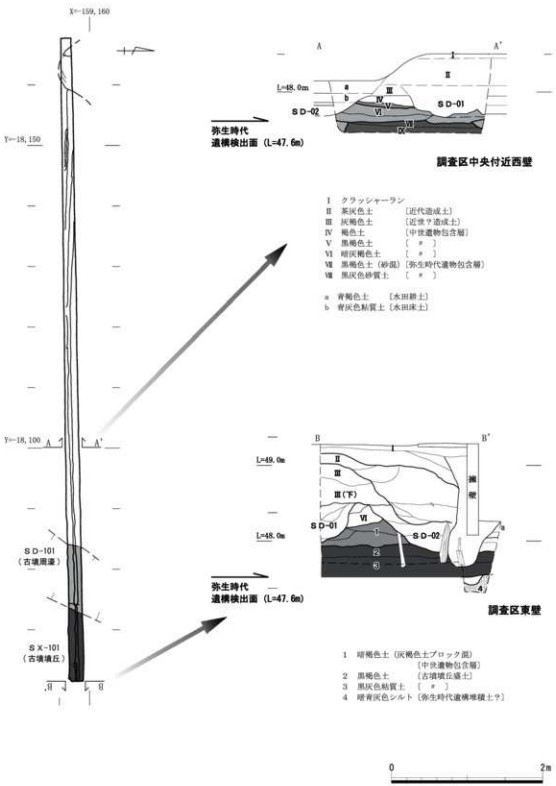
ＳＤ－02　調査区南端に沿って検出した東西方向の溝である。溝の南肩は調査区外となるため溝幅は不明。深さは約0.2～0.5mである。

ＳＤ－01とＳＤ－02は平行しており、前述の「東条道」以前にあった里道の両脇に設置された溝であろう。東条道が布設される際に一気に埋め戻されたとみられる。里道幅は0.6m前後を測る。

ＳＲ－01　調査区西端で検出した河跡堆積である。北東－南西方向から南東－北西方向へ蛇行していくとみられる。幅は不明、深さは0.8mを測る。堆積土は上層が灰褐色シルトや淡灰褐色細砂等、下層が灰色砂や暗青灰色粘土の互層、黒色土等である。遺構の切り合いからＳＤ－01よりも新しくＳＫ－01より古い。



第 15 図　遺構平面図（S＝1/500）

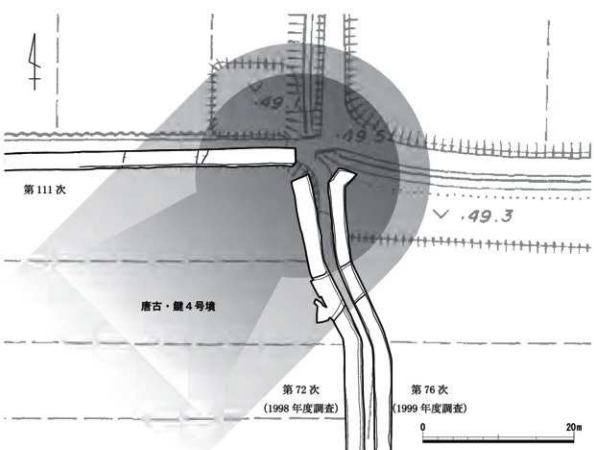


第 16 図　調査区平面部分拡大図及び断面図（S＝1/50）

3．まとめ

今回の調査は擁壁工事床面までの調査であり、弥生時代の遺構については調査をおこなっておらず不明である。古墳時代の遺構として、調査区東端で唐古・鍵４号墳の墳丘を検出した。第72・76次調査の成果も総合すると、本古墳は前方部が南西にとりついた６世紀代の前方後円墳で、後円部径は約40m前後、周濠を含めると全長50m前後であったと推定される。第72・76次調査では円筒埴輪をはじめ、巫女・馬・蓋形等の形象埴輪や、鳥・笠・盾形等の木製品が出土している。

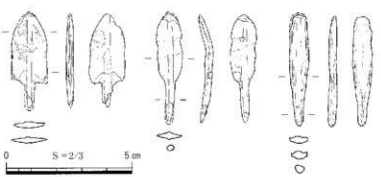
周濠上で中世前期の素掘小溝群を検出したことから、平安～鎌倉期には周濠が埋没していたとみられる。墳丘は徐々に切り崩されながらも、後円部のみは現在もみられるような一段高い畑地として利用されてきたのであろう。



第17図　唐古・鍵４号墳復元図（S＝1/500）

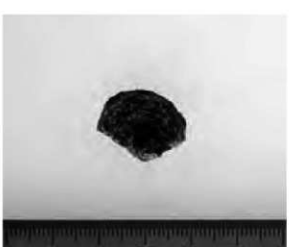
1．調査区全景（東から）

2．東壁土層堆積状況（西から）



第18図　出土銅鏃実測図

3．銅鏃



4．不明青銅製品

5．環状石斧

4．唐古・鍵遺跡　第112次調査

1．遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。弥生時代前期～古墳時代前期の集落、古墳時代中期～後期の古墳群が重複し、また唐古氏・唐古東氏・唐古南氏の居館跡推定地が遺跡北部・東部・南部に拡がる。さらに、遺跡の南東に隣接して丹波氏の屋敷地と推定される丹波山遺跡が所在する。

今回の調査は、唐古・鍵遺跡南東部及び丹波山遺跡西端での水路改修工事に伴って実施した。これまでの調査成果から、工事による掘削は弥生時代の遺構面に及ばないと考えられるものの、中世以降の遺構に影響がある可能性があり、部分的な発掘調査で対応することにした。

調査区は、東西水路部分及び南北水路部分に等間隔にそれぞれ４ヶ所ずつ設定し、重機または人力による表土掘削、人力による遺構掘削をおこなった。

2．調査の成果

（１）層序

各調査区とも現状は水路である。工区が延長250mに及ぶため、堆積状況には若干の相違がある。また現状水路部分での工事であるため、近世以降繰り返された水路浚渫により基本層序が提示できる箇所は少ない。ここでは、工区北東端に位置する第１トレンチ南壁の層序を代表として挙げる。Ⅰ：暗茶灰色土（砂混）〔検出標高49.75m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：茶灰色土〔49.55m〕、Ⅲ：茶灰色粘質土〔49.1m〕、Ⅳ：淡茶灰色粘質土（砂混）〔48.9m〕、Ⅴ：淡茶灰色粘質土〔48.6m〕、Ⅵ：茶灰色土〔48.4m〕、Ⅶ：灰褐色粘質土〔48.2m〕、Ⅷ：茶灰色粘質土〔48.0m〕

第Ⅰ・Ⅱ層は現状畑となっている部分の造成土及び耕土で、第Ⅲ層は近代頃の水路堆積、第Ⅳ・Ⅴ層は中・近世頃の包含層、第Ⅵ層以下は中世以前の落ち込み状の堆積と考えられる。第１トレンチのみ第Ⅵ層上面で中世後期の溝状遺構を確認している。また、第２トレンチでは第Ⅶ層に相当する深さで暗灰色粗砂層を検出している。中世以前の河跡の可能性がある。なお、工事による影響は第Ⅴ層までであり、今回の調査では第Ⅶ層以下について掘削をおこなっていない。

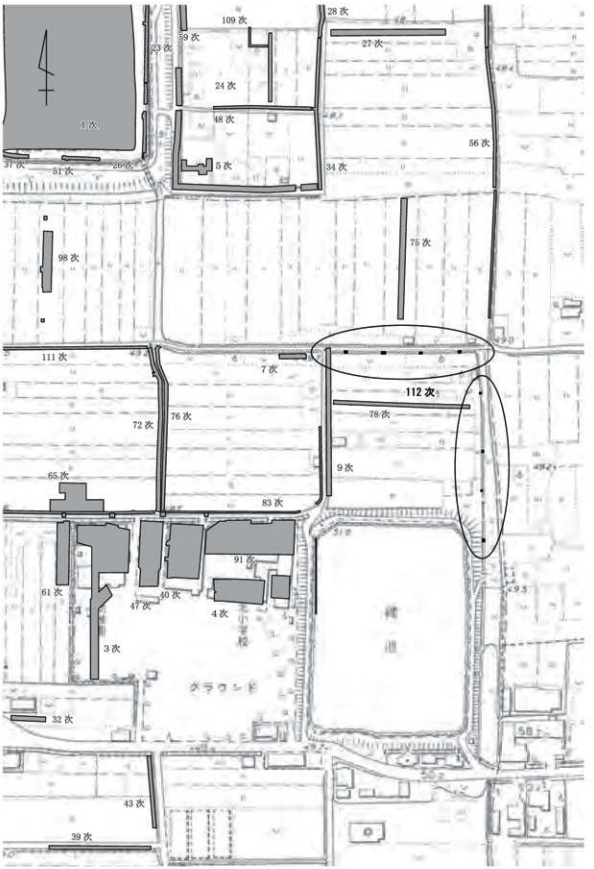
（２）遺構と遺物

中世

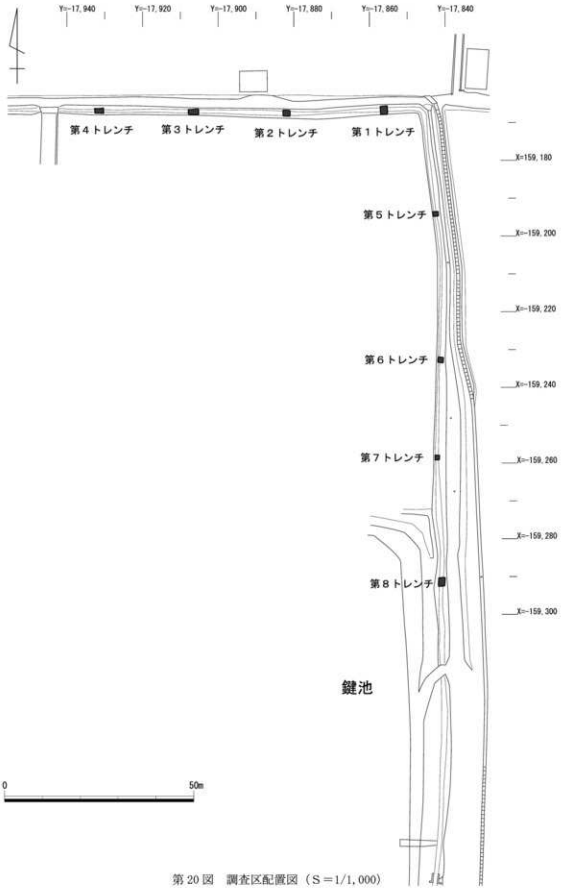
ＳＤ－1051　第１トレンチでは、近世溝の下層で東西方向の中世溝を検出した。瓦質土器・土師器等の遺物が出土した。出土遺物はこの第１トレンチに偏っており、他の調査区では遺物は僅少であった。丹波山遺跡に近接することから、中世屋敷地に関連する遺構・遺物の可能性も考えられる。

近世

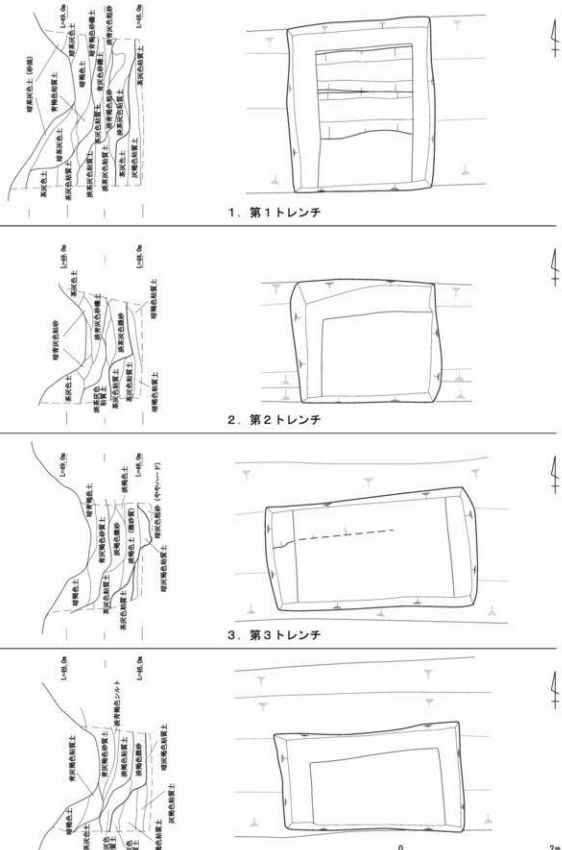
ＳＤ－1001他　第１トレンチから第８トレンチまでの調査区全体で検出した現水路である。現状では幅1.2m、深さ0.7m前後である。現水路底より深さ0.5m前後が近世段階の溝底になる。各調査区とも南肩または西肩を検出したのみであり、当初の溝幅を明らかにすることはできなかった。土師皿や陶磁器等、近世の遺物が出土した。また、若干だが弥生時代の遺物も出土している。



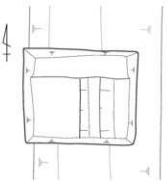
第 19 図　調査地位置図（S＝1/2, 500）



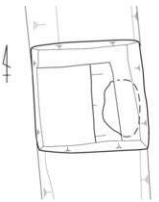
第 20 図　調査区配置図（S＝1/1,000）



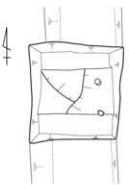
第 21 図　第１～４トレンチ遺構平面図及び西壁断面図（Ｓ＝1/50）



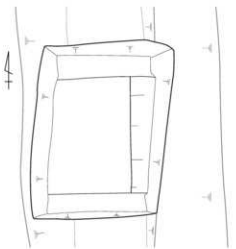
1．第５トレンチ



2．第６トレンチ



3．第７トレンチ



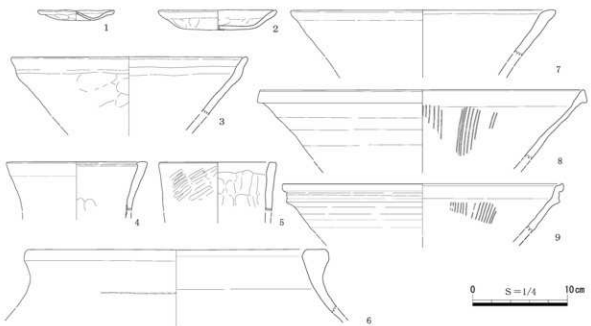
4．第８トレンチ

0　2m

第 22 図　第５～８トレンチ遺構平面図及び北壁断面図（S＝1/50）

3．まとめ

今回の調査では、現状の水路とその前身遺構についての層序確認を中心とした調査を実施した。北東隅に設置した第１トレンチでは中世後期の遺物がまとまって出土しており、東側隣接地に想定される法貴寺丹波氏の屋敷跡に関わる遺物である可能性が考えられる。ただし、狭小な面積による断片的な調査であったため、具体的な遺構の性格等については明らかにすることができなかった。



1・2：土師質小皿　6：瓦質甕？　2・4～6：SD-1001 出土土器
3：瓦質鉢　7：陶器鉢　3・7：SD-5001 出土土器
4・5：瓦質土管　8・9：陶器擂鉢　1：第３トレンチ 暗褐色土
8・9：第１トレンチ表土

第 23 図　出土した土器

１．第１トレンチ全景（東から）

３．第５トレンチ全景（南から）

5．保津・宮古遺跡　第39次調査

1．遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は田原本町西部の大字保津と宮古にまたがる遺跡で、標高約46m前後の沖積地に立地する。これまでの調査では縄文～古墳時代、古代、中近世の遺構が検出され、地域と範囲を変えながら変遷していることが判明している。遺跡の中央を古代道路跡である筋違道（太子道）と保津・阪手道が縦横断し、現保津集落は中近世の集落である保津環濠遺跡と、現宮古集落東側は中世の寺院跡である常楽寺推定地と重複する。

今回の調査地は遺跡の西部にあたる。本地南側の斜行する東西道路は保津・阪手道にあたり、この影響から本地周辺は正方位から斜行した地割りとなっている。周辺の調査では、弥生時代の集落遺構（第29次）や、古墳時代～古代の集落遺構（第10・22次）を検出している。北側に隣接する第22次調査では古墳時代の多量の滑石製品や木製斎串が出土しており、特筆される。これらの成果から、本地も高い遺構密度が予想された。

2．調査の成果

本調査は賃貸住宅の建築に伴う事前調査である。住宅２棟それぞれに付属する合併浄化槽を中心に２つのトレンチを設定した。また敷地南端に設置する橋部分においてもトレンチを設け、計３ヶ所のトレンチを設定し、調査をおこなった。北側から第１～３トレンチと呼称する。

（１）層序

ここでは第１トレンチの基本層序を示す。

Ⅰ：青灰色土〔検出標高45.8m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：灰褐色土〔45.6m〕、Ⅲ：淡茶灰色土〔45.5m〕、Ⅳ：暗灰褐色粘質土〔45.4m〕、Ⅴ：黒褐色土〔45.3m〕、Ⅵ：黄灰色粘土（シルト質）〔45.1m〕、Ⅶ：緑灰色シルト〔45.0m〕

調査地の現状は水田で、第Ⅰ～Ⅲ層は現代の水田耕土及び床土層である。中世遺物包含層の第Ⅳ層上面が近世の遺構検出面、第Ⅴ層上面が弥生時代～中世の遺構検出面である。第Ⅴ層は、周辺の調査成果から縄文時代頃に堆積した層とみられるが、本調査では遺物は確認されなかった。

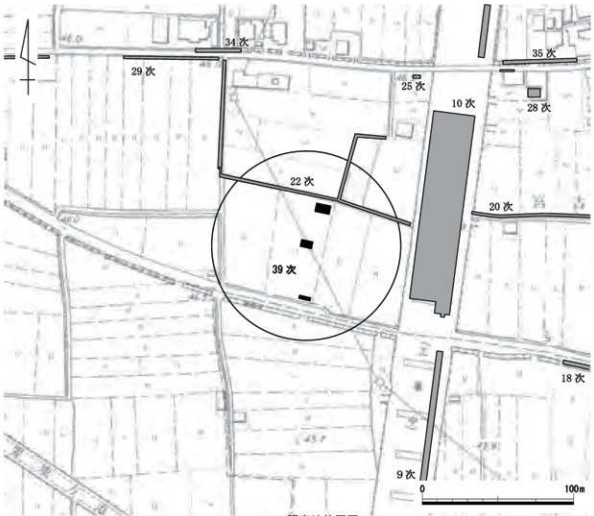
第Ⅵ層以下は確実な地山層である。第２・３トレンチでは第Ⅴ層以下で安定した地山層がみられず、粗砂堆積層が拡がる。この粗砂堆積層は弥生時代以前の河跡とみられる。

（２）遺構と遺物

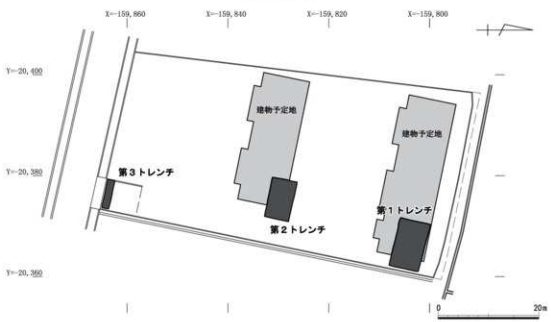
ａ．第１トレンチ

古代以前

ＳＫ－1101　トレンチ中央で検出した土坑である。平面形が不正楕円形の筒形を呈し、長軸は約1.4m、短軸約0.9mを測る。土坑壁面（第Ⅶ層）からの湧水と崩落が激しかったため底面を確認しておらず、深さは1.4m以上である。土坑の堆積は大きく３分層され、上層が黒褐色土や暗褐色土等、中層が暗緑灰色粘砂や暗青灰色粘質土、下層が暗青灰色粘土や暗緑灰色粘土である。中層から下層にかけて、完形・半完形の壺や甕、高坏等の土器群や棒、原材（長60cm・幅27cm）が出土している。本土坑は古墳時代中期の井戸とみられる。

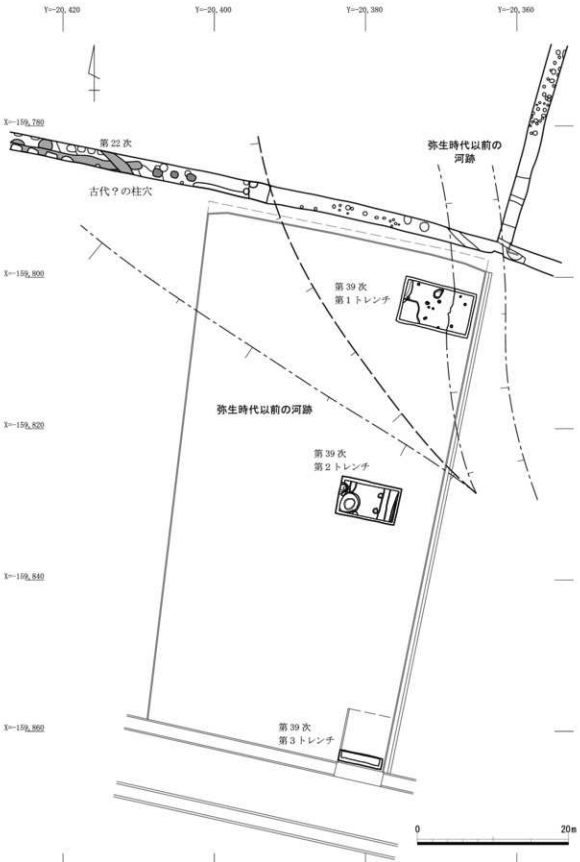


1．調査地位置図



2．調査区配置図

第24図　調査地位置図及び調査区配置図（上：S＝1/2,500、下：1/750）



第25図　第22・39次調査遺構平面図（S＝1/500）

ＳＲ－1101　トレンチ東半で検出した南北あるいは南南西－北北東方向に走行する河跡である。その西肩を検出したことで、幅は３ｍ以上、深さは0.5ｍ以上となる。固くしまった黒褐色粗砂や灰褐色粗砂が堆積する。遺物は出土しておらず、また上面で柱穴群を検出したことから、弥生時代以前の河跡であろう。本地北側で実施した第22次調査でも同様の粗砂堆積を確認しており、一連のものとみられる。

柱穴群　14基の柱穴を検出した。それぞれ平面径0.2～0.4ｍ、深さは0.1～0.2ｍ程度である。これら柱穴には暗灰色砂質土が堆積する。中世素掘小溝に切られることからそれ以前の遺構であるが、土師器や須恵器の小片が僅かに出土したのみであり、詳細な時期は把握できない。また柱穴の配列から建物を復元するまでには至らなかった。

ＳＸ－1101・1102　トレンチ西端で検出した落ち込みである。ＳＸ－1101はトレンチ南西端に位置する。深さは0.1ｍを測り、暗灰色粘質土が堆積する。ＳＸ－1102は北西端に位置する。深さは0.3ｍを測り、暗褐灰色土及び黒褐色土等が堆積する。切り合いから、ＳＸ－1101よりＳＸ－1102の方が新しい。弥生時代後期の土器片が少量出土している。本トレンチの地形はやや西側へ落ち込んでおり、その落ち込みの最上層がＳＸ－1101・1102とみられる。

中世

素掘小溝群　トレンチ西半で小溝群を検出した。小溝群のほとんどが北北東－南南西に走行しており、現在の地割りを反映している。幅0.3～0.4ｍ、深さは0.1ｍを測り、暗灰色粘質土が堆積土する。トレンチ東半で中世素掘小溝が検出されなかったのは、そこに固くしまったＳＲ－1101が存在しており、深く掘削することができなかったためであろう。また本小溝群が全体的に浅いことからも、中近世以降の削平を大きく受けたことが予想される。

近世

素掘小溝群　トレンチ全域で小溝群を検出した。小溝群のほとんどが北北東－南南西に走行する。幅0.3～0.4ｍ、深さは0.2ｍを測り、灰色粘質土が堆積する。

中世から現代に至るまで耕作地として土地利用され、地割りが変更されることはなかったようである。

ｂ．第２トレンチ

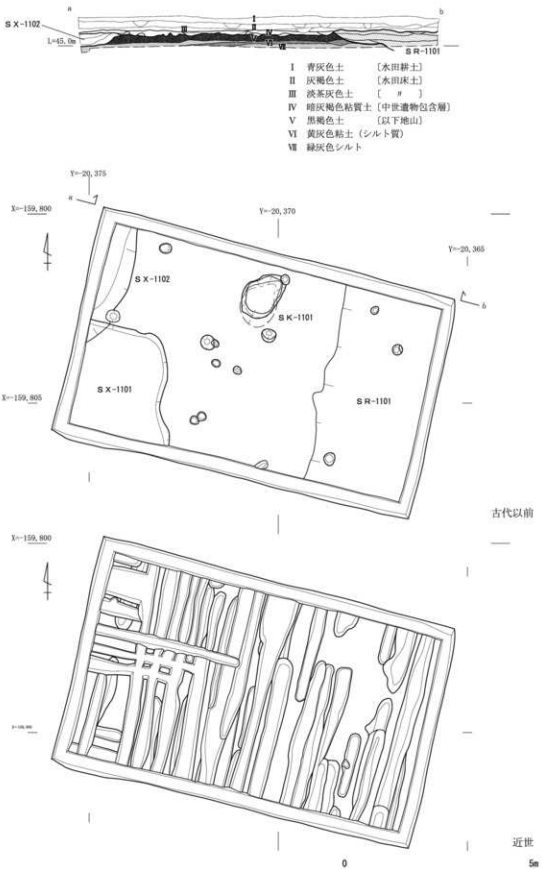
中世

ＳＫ－2051　トレンチ西端で検出した井戸で、土坑西半はトレンチ外に拡がる。平面形は楕円形を呈していたとみられ、土坑の東端に井戸枠を据える。深さは1.2ｍを測る。

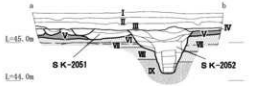
井戸枠は木製曲物の底をぬいたもので、４段が残存していた。枠の径は30～40㎝、１段の高さが10～20㎝を測り、径が大きいものほど上へ積み上げている。枠間に土器片（土師器羽釜片）をかませて固定している箇所もある。

井戸廃棄時には最上層に石製臼と半完形の瓦器埦・土師器小皿１点ずつを廃棄し埋め立てたとみられる。時期は11世紀後半とみられる。

ＳＫ－2052　トレンチ南西で検出した土坑である。平面形は円形で、擂り鉢状を呈する。平面径は2.7ｍ、深さは0.8ｍを測る。土坑は、上層が褐色粘質土や灰色砂、下層が青灰色粘土や暗青灰色シルト等で、地山層のブロック土の様相を呈しているため、これらは井戸を意識的に埋めた土層と考

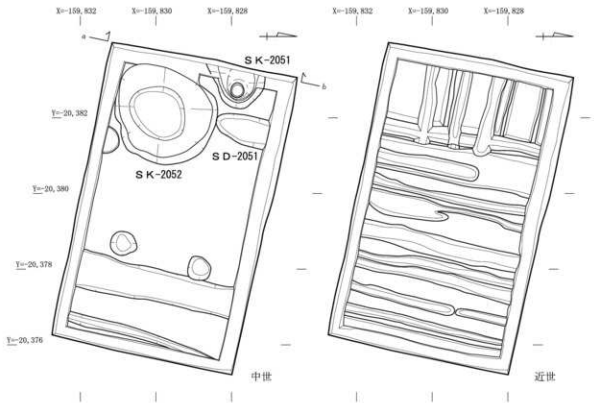


第 26 図　第 1 トレンチ遺構平面図及び北壁断面図（S＝1/100）



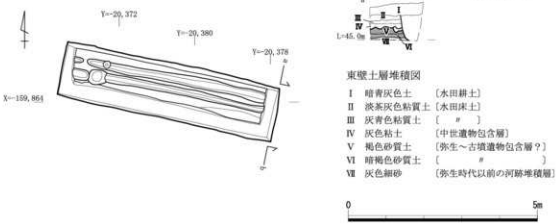
西壁土層堆積図

Ⅰ	青灰色土	〔水田耕土〕
Ⅱ	灰褐色土	〔水田床土〕
Ⅲ	淡茶灰色土	〔　〃　〕
Ⅳ	暗灰褐色粘質土	〔中世遺物包含層〕
Ⅴ	暗褐色砂質土	〔弥生～古墳遺物包含層？〕
Ⅵ	灰色細砂	〔以下、弥生時代以前の河跡堆積層〕
Ⅶ	明灰褐色粗砂	
Ⅷ	灰白色細砂	
Ⅸ	灰色シルト	



第２トレンチ

第３トレンチ



東壁土層堆積図

Ⅰ	暗青灰色土	〔水田耕土〕
Ⅱ	淡茶灰色粘質土	〔水田床土〕
Ⅲ	灰青色粘質土	〔　〃　〕
Ⅳ	灰色粘土	〔中世遺物包含層〕
Ⅴ	褐色砂質土	〔弥生～古墳遺物包含層？〕
Ⅵ	暗褐色砂質土	〔　〃　〕
Ⅶ	灰色細砂	〔弥生時代以前の河跡堆積層〕

第 27 図　第２・３トレンチ遺構平面図及び断面図（S＝1/100）

えられる。遺物は土師器や瓦器小片などしか出土しておらず、時期決定できない。本土坑の性格は不明であるが、枠を抜き取られた井戸であった可能性もある。

ＳＤ－2051　ＳＫ－2051の東で検出した、北北東－南南西方向の溝である。溝幅0.8m、深さは0.2mを測り、土層は暗褐灰色土である。遺物も少なく、時期は不明。

ＳＤ－2051の他、トレンチ東端でも浅い溝を２条検出している。また円形の凹みを３基検出している（径約0.6m、深さ0.1m）。これらからは遺物は出土しておらず、時期不明。

近世

素掘小溝群　トレンチ全域で、第１トレンチと同様の小溝群を検出した。

ｃ．第３トレンチ

第３トレンチは古代の道路跡である保津・阪手道に接しているが、道路側溝等の関連遺構は検出されなかった。側溝はトレンチ南側、現代水路にあたる位置に存在していた可能性が考えられる。

近世

素掘小溝群　第１・２トレンチと同様の小溝２条を検出した。東南東－西北西方向に走行する。

３．まとめ

第１トレンチと第２トレンチにおいて顕著な遺構を検出した。

第２・３トレンチは弥生時代以前の河跡にあたる。第１トレンチからその北側にあたる第22次調査地東半は微高地の南西部にあたり、この微高地上に弥生～古墳時代の集落遺構が分布する。第１トレンチで検出した古墳時代の土坑や柱穴は、その様相を呈していると思われる。

また、第２トレンチでは平安時代の井戸を検出した。周辺での当時期の遺構分布は少なく、短期的で小規模な集落が存在したとみられる。

１．第１トレンチ全景（東から）

２．第２トレンチ全景（東から）

6．十六面・薬王寺遺跡　第27・28次調査

1．遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、標高約47m前後の沖積地に立地する、弥生時代～古墳時代の集落や古代の水田等が検出されている複合遺跡である。遺跡内には中世居館跡の保津氏居館跡推定地や、寺院跡の薬王寺推定地が重複する。

今回の調査地は遺跡南部にあたり、周辺では第６・11・12・20・24次の各調査をおこなっている。本地から約80m北側でおこなった第６次調査では布留期の方形周溝墓を検出している。本地東側には弥生時代後期～古墳時代中期の河跡が北流し、河跡の対岸にあたる第11・24次調査では庄内～古墳時代後期の土器棺墓や円形周溝墓、古墳（第24次、薬王寺井坪１・２号墳）等を検出している。

第27・28次調査は宅地造成に伴うものである。道路布設予定地内において、第27次調査では東西約80m、第28次調査では東西約70mの調査区を設定した。

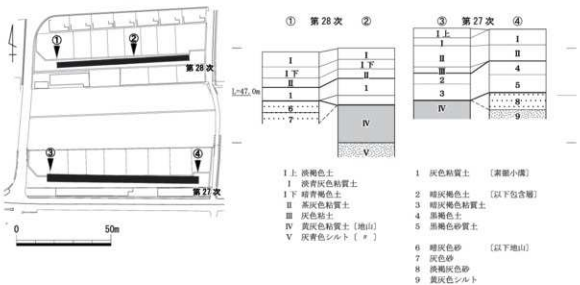
2．調査の成果

（１）層序

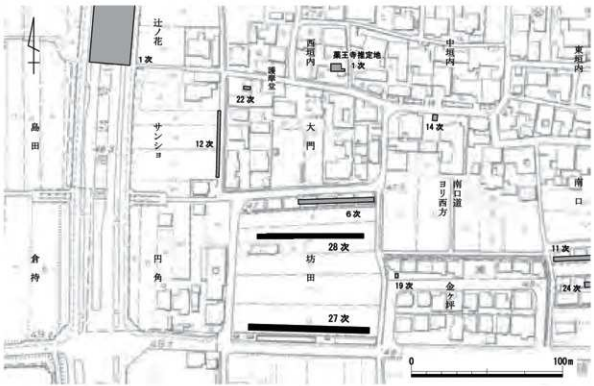
第27・28次調査ともにほぼ同様の層序であるが、第27次調査地の方がやや高く、中世及び弥生～古墳時代の遺物包含層がみられる。

Ⅰ：淡青灰色粘質土〔第27次調査 検出標高47.7m・第28次調査 検出標高47.5m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：茶灰色粘質土〔47.5m・47.2m〕、Ⅲ：灰色粘土〔47.3m〕、Ⅳ：黄灰色粘質土〔47.0m・46.9m〕、Ⅴ：灰青色シルト〔46.5m〕

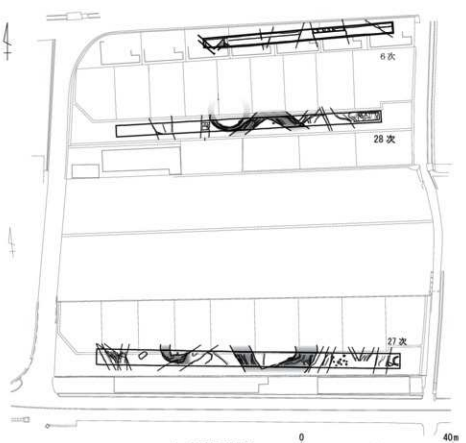
第Ⅰ層と第Ⅱ層は現代水田耕土及び床土層である。第Ⅲ層は第27次調査地に薄く堆積する中世遺物包含層である。第27次調査地では、第Ⅲ層下に黒褐色土や暗灰褐色土といった弥生～古墳時代の遺物包含層が拡がるが、第28次調査地にはみられない。第Ⅳ層以下は地山層で、その上面が弥生～古墳時代の遺構検出面である。



第28図　第27・28次調査土層柱状図（左：S＝1/2,000）



1．調査地位置図



2．調査区位置図

第 29 図　調査地位置図及び調査区位置図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/1,000）

（２）遺構と遺物

ａ．第27次調査

弥生時代中期

方形周溝墓（ＳＤ－114）　ＳＤ－114は調査区西半で検出した溝で、東西方向に走行し北に屈曲する。後世の遺構ＳＤ－109に切られる。溝幅は２～2.5m、深さは約0.3mを測る。本遺構は、一辺８ｍ前後の方形周溝墓の周溝と考えられる。南側周溝で供献土器とみられる半完形の広口壺１点が出土している。時期は大和第Ⅲ－２様式である。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭

ＳＫ－101　調査区東半中央で検出した土坑である。円筒状を呈し、平面径は約0.7m、深さ約0.5ｍを測る。遺物量は少ない。

ＳＫ－102　調査区西半中央で検出した土坑である。平面形は不整方形で、断面形は浅い皿形を呈する。平面の長辺は約2.5m、短辺は約1.3mを測り、深さは約0.1mである。遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

ＳＤ－103　調査区東半中央で検出した北北東－南南西方向の溝で、幅2.2m、深さ約0.7mを測る。中層上面より、壺、甕、高坏などの土器群が出土している。

ＳＤ－104　調査区東半中央で検出した北北西－南南東方向の溝で、幅約1.2m、深さ約0.4mを測る。

ＳＤ－105　調査区東半中央で検出した北北東－南南西方向の溝である。東肩にテラスをもつ。溝幅約2.1m、深さ約0.6mを測る。

ＳＤ－106　調査区東端で検出した北北東－南南西方向の溝である。幅約3.6m、深さは約0.6mである。中層からの出土遺物量がやや多く、完形の長頸壺をはじめ弥生時代後期後半～庄内期の土器が出土している。

ＳＤ－107　調査区東端で検出した小溝である。弧を描くように湾曲し、調査区外に拡がる。弧の直径は約２m、幅0.4～0.6m、深さは約0.2～0.3mを測る。庄内期の土器小片が出土している。本溝の上位にあたる古墳時代後期の遺物包含層中より、完形の滑石製勾玉が１点出土している。

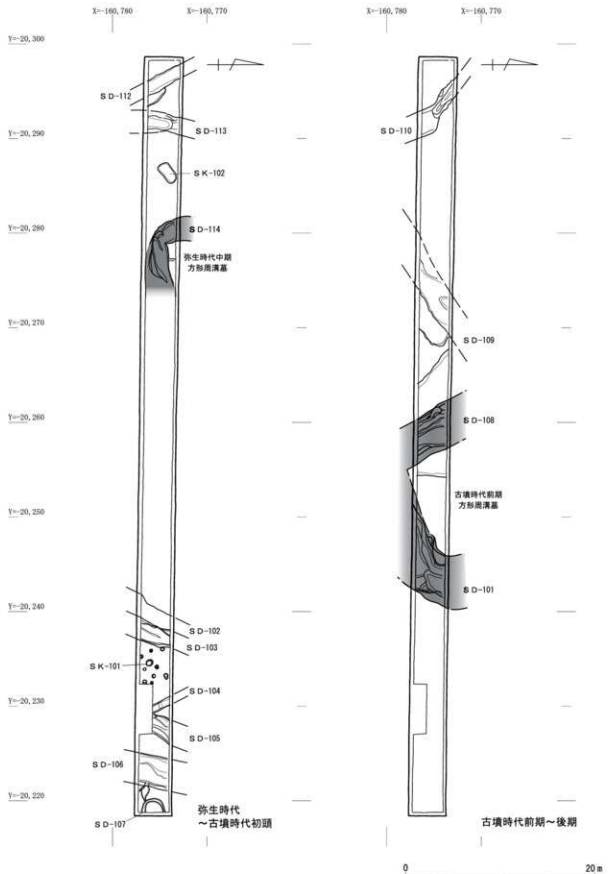
柱穴群　調査区東半中央付近で11基の柱穴を検出した。それぞれ径約0.4m前後、深さ約0.2m前後を測る。

古墳時代前期～後期

方形周溝墓（ＳＤ－101・108）　ＳＤ－101は調査区東半で検出した大溝である。西南西－東北東方向に軸をもち、緩やかに北へ屈曲する。溝幅は約4.9m、深さは約0.9mを測る。上層から中層上位にかけて遺物箱９箱に及ぶ遺物が出土し、上層から布留期、中層以下から弥生時代後半～庄内期の土器が出土している。なお、ＳＤ－101の西端で、弥生時代中期後半の土器が出土する一角があった。ここに当時期の遺構が存在した可能性がある。

ＳＤ－108は調査区中央で検出した北北西－南南東方向の大溝である。溝幅は約4.3m、深さは約0.9mを測る。遺物では弥生時代後半～庄内式の土器小片が出土したが、遺物量はＳＤ－101に比べ少なく、遺物箱１箱に満たない。

ＳＤ－101とＳＤ－108は遺構規模・時期ともに似ており、方形周溝墓の周濠である可能性が考えられる。その一辺は約10m前後を測る。



第 30 図　第 27 次調査遺構平面図（S＝1/400）

ＳＤ－109　調査区中央で検出した北東－南西方向の溝である。前述の周溝ＳＤ－114を切る。断面形は浅い皿状で、溝幅約2.7m、深さは約0.4mである。布留甕の破片が少量出土している。

ＳＤ－110　調査区西端で検出した西北西－東南東方向の溝である。前述のＳＤ－113を切る。西側では深くなり、断面形がＶ字形を呈する。溝幅約1.4m、最深部で約0.6mを測る。出土遺物に須恵器が含まれており、古墳時代後期とみられる。

中世以降

ＳＫ－01　調査区東半で検出した土坑である。土坑南半は調査区外に拡がる。平面形は方形を呈し、一辺約4.5mを測る。完掘しておらず深さは不明。近世以降の野井戸とみられる。

素掘小溝群　調査区全域で検出した東西方向を基軸とする小溝群である。溝幅0.3m前後、深さは0.2m前後。中近世の耕作に伴う小溝であろう。

ｂ．第28次調査

弥生時代中期～古墳時代初頭

ＳＫ－101　調査区中央で検出した平面が長楕円形の浅い土坑である。平面の長軸は1.3m、短軸は0.5m、深さは約0.3mを測る。ＳＤ－102・103に切られる。長さ１m、幅0.2mの板材が出土した。本土坑の詳細な時期や性格は不明である。

ＳＤ－101　調査区西半中央で検出した南北方向の溝である。幅約2.6m、深さは約0.4mを測る。弥生土器小片が出土したのみで詳細不明。

ＳＤ－104Ｃ　後述する。

ＳＤ－106　調査区中央で検出した北西－南東方向に軸をもつ浅い溝である。幅は約２m、深さは0.3mを測る。ＳＤ－113に切られる。弥生時代後期の土器小片を含む。

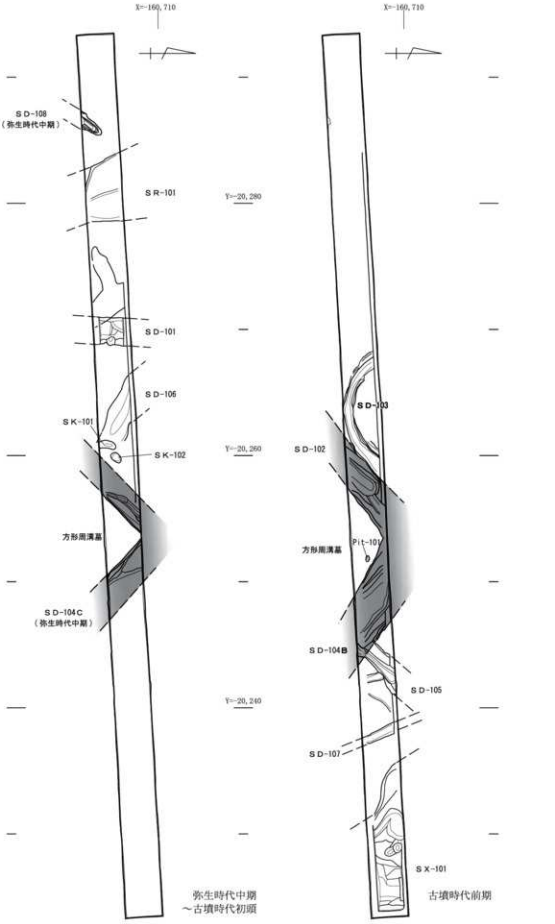
ＳＤ－108　調査区西半で検出した北東－南西方向の溝である。幅は約0.8m、深さは約１mを測る。中層より完形の壺１点、甕２点が出土した。大和第Ⅲ－２様式である。

ＳＲ－101　調査区西半で検出した南南東－北北西方向の河跡である。幅は約4.5mを測る。粗砂堆積であり、湧水が激しく掘削をおこなわなかったため深さは不明。上層からは庄内期の土器片が出土している。

古墳時代前期

方形周溝墓（ＳＤ－102・104Ｂ）　調査区中央で１基の方形周溝墓を検出した。北西辺の周溝をＳＤ－102、北東辺の周溝をＳＤ－104Ｂとする。ＳＤ－102は北東－南西方向に軸をもち、溝幅約2.5m、深さ0.6～0.7mを測る。布留期の土器片の他、上層のみ須恵器片が混じる。ＳＤ－104Ｂは北西－南東方向に軸をもち、溝幅約3.5m、深さ約0.8mを測る。布留期の土器片や埴輪片が出土している。溝上面では同方向の小溝ＳＤ－104を検出しており、５世紀代に埋没したとみられる。

ＳＤ－102の南東肩部やＳＤ－104Ｂの南西肩部では、地山のブロック土がみられた。ＳＤ－104Ｂのブロック土内（ＳＤ－104Ｃ）からは完形の広口壺が１点出土し、胴部下半には穿孔がなされていた。溝底面よりやや浮いた位置から出土しているが、この広口壺は方形周溝墓の供献土器の可能性がある。このことから、弥生時代中期（大和第Ⅲ－２様式）に方形周溝墓が築造され、古墳時代前期にはやや規模を拡大するように周溝の最掘削がなされ、古墳時代中期に埋没したとも考えられる。



第 31 図　第 28 次調査遺構平面図（S＝1/300）

ＳＤ－103　調査区中央で検出した弧を描くように湾曲する溝である。弧の直径は推定12m、溝幅は約１m、深さは約0.3mを測る。出土遺物は少なく、布留期とみられる土器小片や朝顔形埴輪片が出土した。本遺構の性格は不明。

ＳＤ－105　調査区東半中央で検出した北東－南西方向の溝である。幅1.4m、深さは0.6mを測る。少量の土器の他、埴輪片が出土した。古墳時代前期末とみられる。

ＳＤ－107　調査区東半中央で検出した北北西－南南東方向の浅い溝である。幅0.7m、深さ0.3mを測る。古墳時代前期末とみられる。

ＳＸ－101　調査区東端から12mにわたって検出した堆積層である。深さは1.2mを測る。出土遺物量は多く、下層は弥生時代後期～庄内期、中層は布留期、上層には須恵器が含まれる。調査区の東端では地山の立ち上がりを確認していることから、本遺構は大溝であった可能性も考えられる。

中世以降

素掘小溝群　調査区全域で検出した東西・南北方向の小溝群である。中近世の耕作に伴う小溝であろう。

３．まとめ

今回の２つの調査では、弥生から中近世の各時期の遺構を検出した。

弥生時代中期中頃の遺構として方形周溝墓を２基確認した。２基とも同時期であり、本地周辺に墓域が展開するようである。３個体の完形土器が出土した第28次調査ＳＤ－108も、墓に伴う遺構である可能性がある。第27次調査では遺構は確認されなかったものの、中期後半（大和第Ⅳ－２様式）の土器が出土しており、周辺に当時期の遺構が拡がる可能性が高い。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭では、第27次調査区の東半において土坑、溝、柱穴等の居住遺構を多数検出した。第28次調査では当時期の顕著な遺構遺物を検出していない。本地より東約40m付近でおこなった第19次調査では、弥生時代末～古墳時代の遺物を含む遺物包含層を確認しており、ここに集落が拡がっていたのであろう。ただし、この集落も短期的に廃絶したとみられる。

古墳時代前期には再び墓域となる。第27次調査では方形周溝墓を検出した他、滑石製勾玉や埴輪も出土している。周辺の調査でも方形周溝墓や方墳等が確認されていることから、この墓域は古墳時代後期まで存続するようである。

なお、中世寺院「薬王寺」に関わる遺構は検出されず、中世の遺物出土量も非常に少なかった。寺院は本地よりも北側、薬王寺集落の西半に拡がるのであろう。

1．第27次 調査区全景（東から）

2．第27次 弥生時代中期方形周溝墓（南西から）

3．第27次 古墳時代前期方形周溝墓（東から）

4．第28次 調査区全景（東から）

5．第28次 ＳＤ－108（北から）

6．第28次 弥生時代中期方形周溝墓（西から）

7．西竹田遺跡　第4次調査

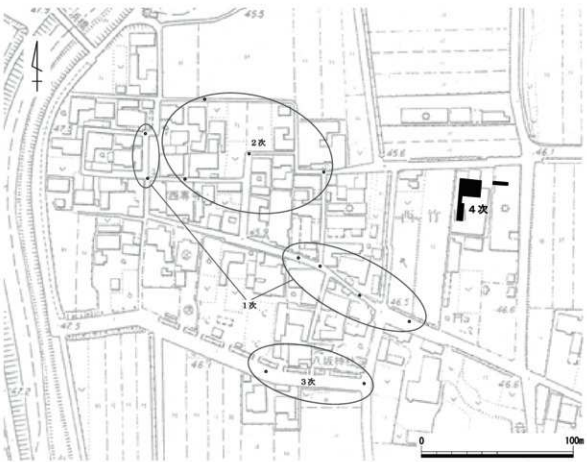
1．遺跡・既調査の概要

西竹田遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。西竹田遺跡の立地する田原本町南西部は、国道24号線バイパス（京奈和自動車道）建設に伴う発掘調査で古墳時代中・後期の集落遺構、古代頃の水田遺構、中世居館跡等を検出した十六面・薬王寺遺跡、古墳時代前期の竪穴住居と中世～近世の屋敷地を検出した金剛寺遺跡、弥生時代の集落とみられる佐味遺跡等が分布する。しかし、過去の開発が少ないこともあり、この地域の歴史については未解明な点が多い。

西竹田遺跡は、飛鳥川の東に隣接する現西竹田集落周辺に位置する。この西竹田集落は環濠集落の痕跡を残す近世以来の集落で、中世に遡る可能性も考えられる。

これまでの調査は現西竹田集落内を中心に実施してきた。1997年度の試掘調査では、鎌倉時代・室町時代・江戸時代の集落遺構を検出した。また、2005年度からは下水道工事に伴う発掘調査をおこない、西竹田集落の中世から近世にかけての状況がある程度明らかとなった。

今回、西竹田遺跡北東端で特別養護老人ホームの建設が計画された。位置的には遺跡周縁部であるため、試掘調査により遺構の分布状況を確認し、遺構が検出された部分について本調査を実施することにした。



第32図　調査地位置図（S＝1/2,500）

2．調査の成果

調査では、まず建築予定範囲の北辺と西辺で幅２ｍの調査区を設定し、遺構有無の確認をおこなった。その結果、顕著な遺構を確認できなかった東半は本調査の対象外とし、建物西半のうち遺構を検出した北半及び西南部で拡張をおこない、本調査区を設定した。

（１）層序

調査地の現状は宅地である。数十年前に水田を造成して工場が建築されたが、今回の調査前に解体された。

Ⅰ：クラッシャーラン〔検出標高46.2ｍ、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：暗青褐色土（瓦礫混）〔46.05ｍ〕、Ⅲ：青褐色土（粘質）〔45.35ｍ〕、Ⅳ：淡褐灰色土〔45.15ｍ〕、Ⅴ：淡灰褐色粘質土〔44.95ｍ〕、Ⅵ：淡橙褐色土〔44.9ｍ〕、Ⅶ：黒褐色土〔44.85ｍ〕、Ⅷ：淡黄褐色シルト〔44.7ｍ〕

第Ⅰ・Ⅱ層は現代の造成土、第Ⅲ・Ⅳ層は旧水田耕土及び床土、第Ⅴ層は中世包含層、第Ⅵ層は古代頃とみられる包含層、第Ⅶ層は弥生時代以前の堆積層とみられる。第Ⅷ層は地山となる。調査では、第Ⅶ層上面まで重機により掘削し、遺構の検出をおこなった。

第 33 図　調査区配置図（Ｓ＝1/1,000）

（２）遺構と遺物

古墳時代

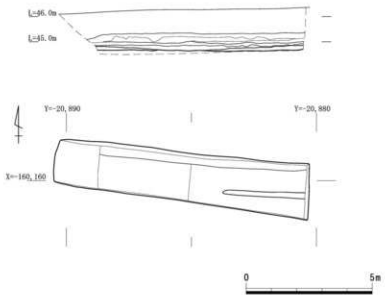
ＳＤ－101　第２トレンチ北端で検出した、西北西－東南東方向の溝である。幅１ｍ前後、深さ0.1ｍ前後を測る。幅東端が北へ屈曲し、西端も北へ緩やかに曲がることから、方墳となる可能性も考えられる。溝中より、５世紀頃の土師器が出土した。

ＳＤ－102　第２トレンチ西側中央で検出した、東西方向の溝状遺構である。幅１ｍ、深さ0.05ｍ。遺物は出土していない。遺構の時期と性格は不明である。

ＳＤ－103　第２トレンチ南西部で検出した、北北西－南南東方向の溝である。幅0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。顕著な遺物は出土していない。堆積土から古墳時代頃の遺構と考えられる。水田域に掘削された用水路のような性格の遺構であった可能性が高い。

古代

ＳＫ－51　第２トレンチ北西部で検出した直径0.9ｍ、深さ0.5ｍの井戸である。直径32㎝、高さ16㎝の曲物容器を井戸枠下段として使用していた。また、上段も井戸枠として直径36㎝前後の曲物容器が使用されていたと考えられるが、完全に腐朽していたため断面で痕跡のみを確認した。井戸枠内下層から、黒色土器塊２点と土師皿１点が出土した。遺物から、平安時代の遺構とみられる。



第34図　第１トレンチ遺構平面図及び北壁断面図（Ｓ＝1/150）

中世

素掘小溝群　第２トレンチ全体で東西方向の素掘小溝群を検出した。幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mを測る。顕著な遺物は出土していないが、中世の遺構とみられる。

近世

ＳＫ－01　第２トレンチ北半中央で検出した長方形の土坑である。南北2.7m、東西1.3m、深さ0.6mを測る。顕著な遺物は出土していないが、中世素掘小溝群を切ることから、近世以降の土坑とみられる。ブロック土で埋没していることから粘土採掘坑の可能性もあるが、調査地は粗砂質の地山であるため良好な粘土が採集できなかった可能性が高い。このため、遺構の性格は不明である。

（３）出土した遺物

井戸ＳＫ－51からは、黒色土器及び土師器皿が出土した。第38図－１は黒色土器塊である。ほぼ完形で出土した。外面は暗灰色、内面は黒色を呈する。２は黒色土器塊の高台部分である。３は土師器小皿である。ほぼ完形に復元できるが、割れた状態での出土であった。

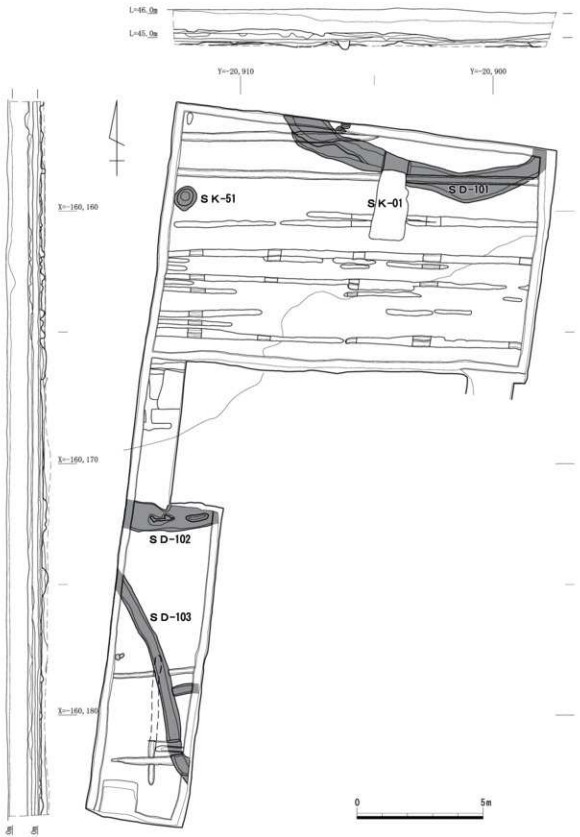
３．まとめ

今回の調査では、西竹田遺跡北東端の状況について確認することができた。

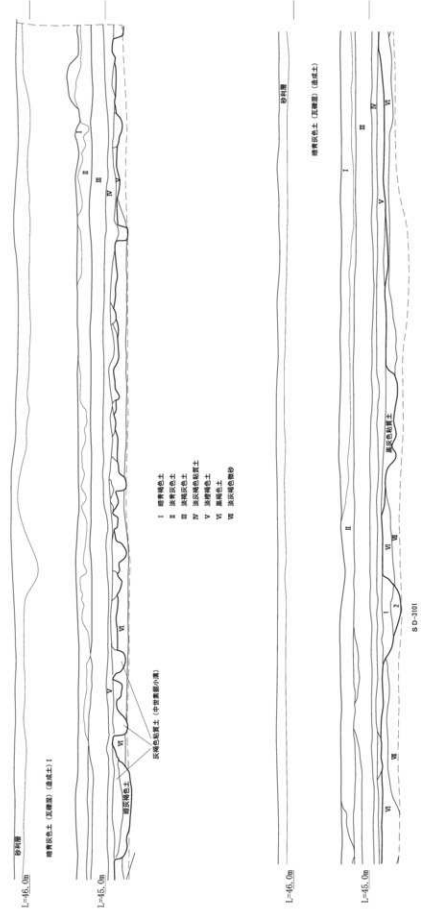
古墳時代中期の遺構として、方墳とみられる溝、耕作関連とみられる溝をそれぞれ検出した。西竹田遺跡の東側に位置する十六面・薬王寺遺跡では古墳時代中期～後期の集落遺構がみつかっているが、この遺跡の周辺部として墓域や水田域としての土地利用がなされていた可能性が考えられる。

今回の調査では、平安時代の井戸１基を検出した。西竹田遺跡では鎌倉時代の集落遺構は検出していたものの、平安時代に遡る集落遺構を検出したのは今回が初めてとなる。西竹田集落の形成過程を考える上で重要な成果の一つとなった。

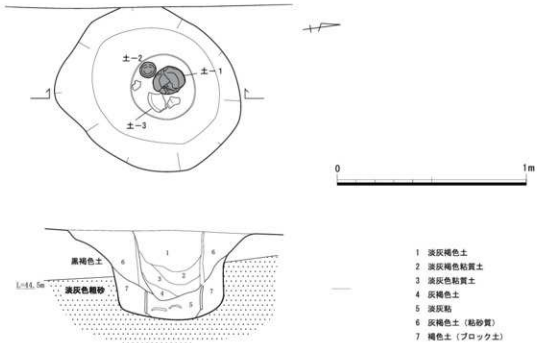
中世以降の調査地は耕地として利用されていたようである。これ以降、現代に至るまで長く水田としての土地利用が続いていたとみられる。



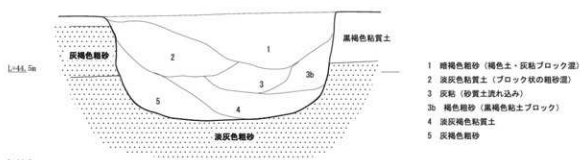
第35図　第2トレンチ遺構平面図及び断面図（S＝1/150）



第36図　第2トレンチ西壁断面図（S＝1/50）

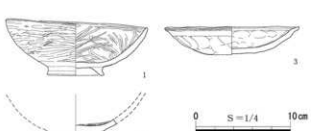


1．ＳＫ-51 遺構平面図及び断面図



2．ＳＫ-01 断面図

第 37 図　ＳＫ-51 遺構平面図及び断面図及びＳＫ-01 断面図（Ｓ＝1/20）

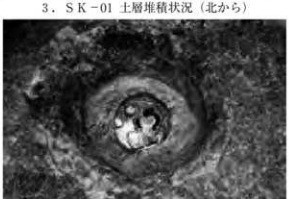


第 38 図　ＳＫ-51 出土土器

1．第２トレンチ北半全景（東から）

2．第２トレンチ南半完掘状況（北から）

3．ＳＫ－01 土層堆積状況（北から）



4．ＳＫ－51 出土状況（東から）

8．千代遺跡（勝楽寺跡） 第8次調査

1．遺跡・既調査の概要

千代遺跡は標高約53m前後の沖積地に立地する。田原本町南部、大字千代の八条集落と阿部田集落にまたがる遺跡である。もとの遺跡範囲は寺川東岸まで隣接していたが、これまでの調査成果と小字から、遺跡の西端部分が中世寺院「日光寺推定地」として分離・独立した遺跡となった。

本調査地は遺跡西部の八条集落内の北にあたる。本光明寺の東側隣接地、春日神社の境内である。春日神社の詳しい由来は不明であるが、本光明寺は「勝楽寺」跡に誇致された寺院である。勝楽寺は天長8年（831）に弘法大師による開基と伝わる古刹だが、明治の廃仏毀釈により廃寺となった。しかし地元（八条）の再興の要望により、明治31年（1898）、勝楽寺跡地に檪本町森本（現・天理市森本町）から本光明寺が移転した。昭和59年（1984）には本堂と庫裏が改装された（田原本町史編さん委員会　1986『田原本町史』本文編）。

本尊の弘法大師坐像は勝楽寺伝来のもので、室町時代前期の作である。脇侍の十一面観音立像は檪本町本光明寺に伝来していた。平安時代中期の作で、国の重要文化財に指定されている。

2．調査の成果

（1）層序

調査地は春日神社とコンクリート水路との間にあたり、自治会の駐車場として利用されている。水路を挟んで北側にある水田面の標高は約52.0mで、現状では本地の方が1m以上高い。

Ⅰ：暗茶灰色土〔検出標高53.1m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：黄褐色砂礫〔53.0m〕、Ⅲ：暗灰青色土〔52.9m〕、Ⅳ：暗灰褐色土〔52.8m〕、Ⅴ：暗黄灰色粘質土〔51.7m〕、Ⅵ：灰褐色粘質土〔51.6m〕、Ⅶ：褐灰色粘質土〔約51.5m〕、Ⅷ：黒色粘土〔51.2m〕

第Ⅰ～Ⅳ層は現代造成土である。第Ⅳ層の下は近世～現代の大溝ＳＤ－01の堆積土（深さ0.9m）が続き、その下には中世後期とみられる水田耕土層（第Ⅴ層）・床土層（第Ⅵ層）・遺物包含層（第Ⅶ層）が続く。第Ⅷ層は固くしまっており地山層と考えられ、その上面で中世素掘小溝群を検出した。

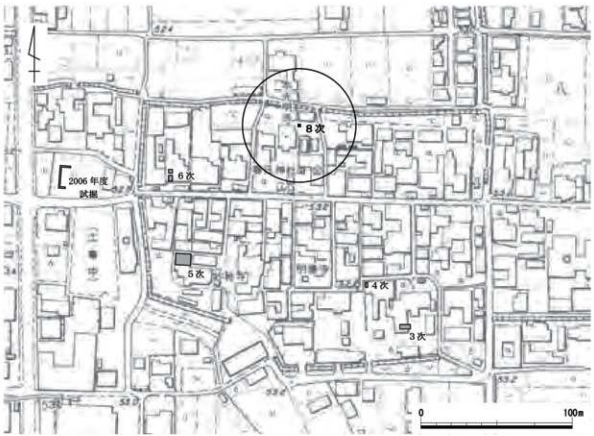
（2）遺構と遺物

中世

素掘小溝群　第Ⅷ層上面で検出した小溝群である。南北方向2条、東西方向1条を確認した。深さは0.1mを測り、褐灰色粘質土が堆積する。時期を判別できる遺物が出土していないが、平安～鎌倉期頃か。

近世～現代

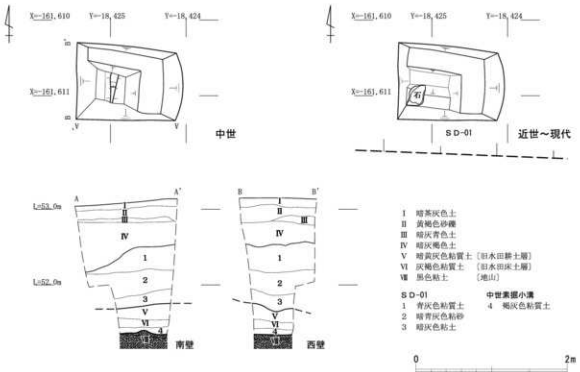
ＳＤ－01　調査区全域で検出した、東西方向に走行する大溝である。溝の最深部は調査区北側に、溝の西肩部は調査区南側にあたる。深さ0.9m以上を測る。土層は大きく3分され、上層は青灰色粘質土、中層は暗青灰色粘砂、下層は暗灰色粘土である。下層から人頭大の礎石が出土した他、出土遺物には近世土師器小皿や中世瓦質土器、瓦器塊が含まれていた。本溝が中世まで遡るかは判別できなかった。



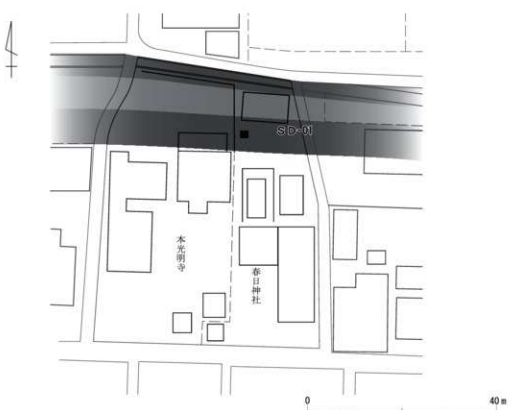
1．調査地位置図

2．調査区位置図

第 39 図　調査地位置図及び調査区位置図（上：S＝1/2,500，下：S＝1/800）



1．調査区平面図及び南壁・西壁断面図



2．近世～現代水路（ＳＤ-01）の推定位置

第 40 図　遺構平面図及び南壁・西壁断面図・水路復元図（上：Ｓ＝1/50、下：Ｓ＝1/800）

3．まとめ

調査の結果、中世と近世～現代の２時期の遺構を確認した。

八条集落南側でおこなった第３～５次調査では室町期の遺構を確認しており、この頃より集落が形成されたと考えられている。その遺構検出面は約52.5mで、それと比べて本地（約51.2m）は１m以上低い。勝楽寺は微高地の端部、地形の落ち込み際に建立されたとみられる。今回の調査では勝楽寺に直接関わる遺構・土層を確認できなかったが、創建時には盛土造成し、南側の微高地と平坦面を形成した可能性もある。なお、近世～現代大溝ＳＤ－01内から出土した平安期の瓦器塊や平瓦片は、勝楽寺に関連する遺物であろう。12世紀代には寺院が存在した可能性が高い。

下層遺構面で検出した中世素掘小溝の詳細な時期は分からないが、平安～鎌倉期の可能性があり、その頃本地は耕作地であったことが判明した。寺院と耕作地の位置関係や、その実体、建立時期などの問題は、今後の調査成果を待ちたい。

上層遺構面では近世～現代の大溝ＳＤ－01を検出した。地元住民によれば、本地は「集落を囲む幅広い大溝があった場所で、本光明寺の本堂を増設する頃には埋まっていた」という。この話により、検出したＳＤ－01は八条集落を囲む環濠と考えられる。環濠幅を推定すると16m前後と幅広いことから、二重の環濠であった可能性もある。

本光明寺は1984年に本堂を改築しており、それまでに環濠ＳＤ－01は北側のコンクリート張り水路に付け替えられたのであろう。環濠ＳＤ－01を埋め立てた後に0.6mの盛土造成をおこない、本光明寺本堂北側には増設部分を取り付けたとみられる。

第41図　ＳＤ-01　第１層出土土器

１．調査前（北東から）

２．調査区全景（東から）

9．富本遺跡　第２次調査

１．遺跡・既調査の概要

富本遺跡は、奈良盆地の中央、標高44m前後の沖積地に立地する。遺跡中央には式内社富都神社が鎮座する。この神社は近世まで牛頭天王を祀る社であったが、明治期に式内社に比定された。神社南で実施した第１次調査では、中世の素掘小溝群や粘土採掘坑の可能性がある土坑を検出しているが、集落関係の遺構は確認していない。また、神社西側で平成23年度に実施した工事立会では、近世の南北溝を検出し、鎌倉時代～近世の遺物を確認している。

遺跡西端に重複する現富本集落は、飛鳥川東岸沿いに位置する。かつては環濠集落の形態をとっていたとみられるが、現在一部にその痕跡の地割りが残る。

今回の調査は、遺跡の北西端、現富本集落北東部に位置する。個人住宅の建築に伴う調査で、敷地北東端に設置される浄化槽地部分に2.5×1.8mの調査区を設定した。調査により、富本集落の成立過程についての情報を得られることが期待された。

２．調査の成果

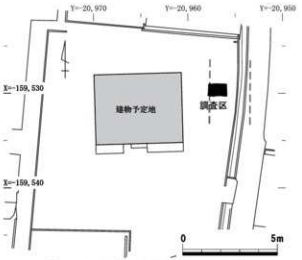
（１）層序

調査地の現状は宅地である。結果的には調査区全体が近世溝内であったため、基本層序として最も地山層が残存していた調査地西端部分の層序を示す。

Ⅰ：暗褐色土〔検出標高44.6m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：茶灰色土〔44.4m〕、Ⅲ：茶灰色土（砂混）〔44.2m〕、Ⅳ：茶灰色粘質土〔44.0m〕、Ⅴ：褐灰色粗砂〔43.7m〕、Ⅵ：灰色粘砂〔43.3m〕、Ⅶ：褐灰色粗砂（青灰色シルトの間層含む）〔43.2m〕、Ⅷ：黒色粘土〔42.8m〕

第 42 図　調査地位置図（S＝1/2,500）

第Ⅰ～Ⅱ層は、近代～現代の整地層である。第Ⅲ層は、近世大溝上層部分の人為的な溝の埋め立て土とみられ、幕末～明治時代頃の遺物を含むことから、幕末以降に環濠を埋めて屋敷地を拡張した可能性が考えられる。第Ⅳ層は、近世後期頃の大溝堆積土である。なお、溝の掘削面は本来第Ⅲ層上面に相当する位置になるとみられる。第Ⅴ～Ⅶ層は、近世に集落が形成される以前の河川堆積である。遺物は出土していないが、鎌倉時代以前の堆積となる可能性がある。



第 43 図　調査区位置図（S＝1/200）

（2）遺構と遺物

近世

ＳＤ－1001　調査区全体が南北方向の近世大溝内であった。調査区が狭小であるため、溝幅は確認していない。表土からの深さ２ｍで溝底となる。上層より18～19世紀の陶磁器・瓦等が出土した。下層からは17世紀代とみられる陶器・土師質土器等が出土した。

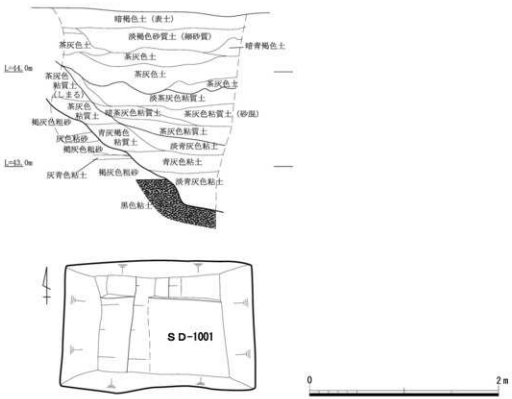
３．まとめ

調査の結果、調査区全体が近世の南北大溝内であることが判明した。この溝は富本集落の東側を区画する環濠であった可能性が高い。溝の掘削時期は、下層遺物が僅少であったため断定は難しいが、国産磁器が出土していないことから近世前半に遡る可能性も考えられる。また、中層は近世後期の再掘削で、上層は幕末頃に人為的な埋め立てにより埋没した可能性が高い。

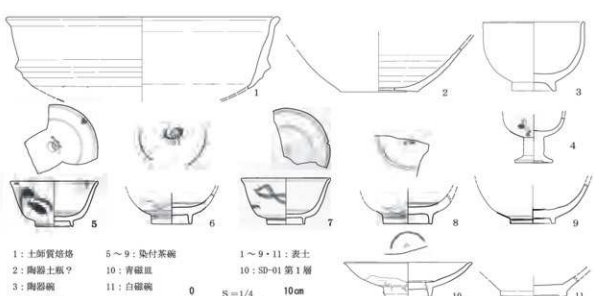
なお、出土遺物には鎌倉時代頃の瓦器片もみられた。富都神社西側の工事立会でも同時期の遺物が一定量出土しており、鎌倉時代頃に富本集落の集村化が始まっている可能性が考えられる。また、今回までの調査では大和の集落の多くが環濠集落化したとされる15・16世紀の状況については不明のままであり、今後の課題としたい。

１．調査前（西から）

２．ＳＤ－1001完掘状況（南から）



第 44 図　遺構平面及び北壁断面図（S＝1/40）



第 45 図　出土した土器

10．薬王寺南遺跡　試掘調査（S－201101）

1．遺跡の概要

薬王寺南遺跡は、寺川と飛鳥川に挟まれた標高50m前後の沖積地に位置する。およそ１町四方の農業用溜池である薬王寺南池は、その西辺が北北西－南南東方向に傾斜しており、古代道路の筋違道の地割りが遺存するものと考えられている。

薬王寺南遺跡では、薬王寺南池の南側で宅地分譲に伴う試掘調査・立会調査が数次にわたりおこなわれているが、奈良時代頃の河川跡以外には顕著な遺構を確認していない。今回、遺跡南東端で宅地分譲開発が計画され、遺構の分布状況について試掘により確認することにした。

2．調査の成果

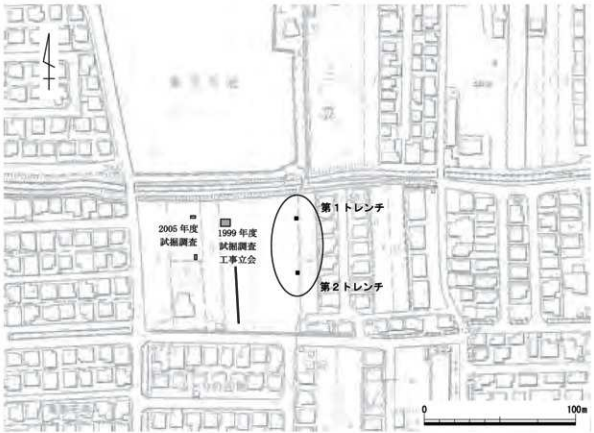
今回の試掘調査では、共用道路予定部分に2.5m四方の試掘トレンチを２ヶ所設定した。調査の結果、中近世の素掘小溝群、中世以前の落ち込み堆積を確認したが、遺物は出土せず、遺跡周縁部であることが明らかとなった。

3．まとめ

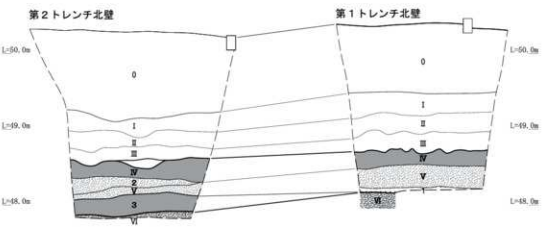
調査の結果、中近世の素掘小溝群以外に顕著な遺構を確認することはできなかった。また、遺物も希薄であり、遺跡の周縁部であることが明らかとなった。本試掘調査後、工事着手。

１．第２トレンチ全景（南から）

２．第１トレンチ北壁土層堆積状況（南から）



1．調査地位置図



0　淡茶褐色砂礫土　〔現代盛土〕
I　暗青褐色土　〔旧水田耕土〕
II　緑灰色粘質土（シルト質）〔旧水田床土〕
III　灰色粘土　〔中世遺物包含層？〕
IV　暗褐灰色粘質土　〔上面中世？遺構検出面〕
V　淡灰黄色砂質土　〔時期不明落ち込み堆積層〕
VI　黄灰色粘土（シルト質）〔地山〕

1　黄褐色粗砂　〔時期不明落ち込み堆積層〕
2　暗灰褐色砂質土〔　〃　〕
3　暗褐色粘質土　〔　地山？　〕

2．北壁断面図

第 46 図　調査地位置図及び北壁断面図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/50）

11．十六面・薬王寺遺跡　試掘調査（S－201102）

1．遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する、中世の居館跡・古代の水田・古墳時代の集落・弥生時代の集落等から成る複合遺跡である。1981年の国道24号線バイパス（京奈和自動車道）の建設に伴う第１次調査以降、現在まで28次にわたる調査を実施しており、遺跡の内容が徐々に明らかとなりつつある。

今回、十六面・薬王寺遺跡北西部で東西300m、南北150mの敷地を対象とした大型店舗出店計画があり、設計及び本調査範囲の決定に必要な情報を得るために試掘調査を実施することとなった。

十六面・薬王寺遺跡北西部では、第１・３・８次調査で古代の水田遺構を確認していることから、当時の水田域が拡がる可能性が考えられた。ただし、開発予定地東側隣接地で実施したバイパス建設に伴う試掘調査（保津・宮古遺跡第９次調査）では河跡等を確認したのみであり、遺構密度の低い箇所となる可能性もあった。一方、北側に隣接する保津・宮古遺跡では、古代の建物群・古墳時代の集落等が濃密に分布することが発掘調査により明らかとなっている。特に、今回の開発計画地北東側で実施した保津・宮古遺跡第10・22次調査では弥生時代～古代の遺構を多数検出し、古代における官衙的な施設が設置された重要な地区である可能性が考えられている。また、今回の開発計画地の北西で実施した宮古北遺跡第13次調査や保津・宮古遺跡第29次調査等でも古墳時代の集落関連遺構及び古墳とみられる遺構を確認している。

以上の状況から、今回開発が計画された広大な敷地について、過去の周辺での調査データのみでは予想できない部分が多くあり、どのような遺構がどの範囲に分布しているのかを試掘調査により把握する必要があった。

2．調査の成果

調査地の現状は休耕田及び水田である。東西約310m、南北約130mの開発予定地のうち、店舗建設予定部分（東西250m、南北70m）の遺構分布状況を確認するため、南北70m、幅2.5mの調査区を100m間隔で３ヶ所設定し調査をおこなった。なお、遺構分布が濃密に確認された西側調査区（第３トレンチ）等では、遺構分布の範囲を確定するために拡張区を設定して補足調査を実施した。

（１）　層序・遺構と遺物

ａ．第１トレンチ

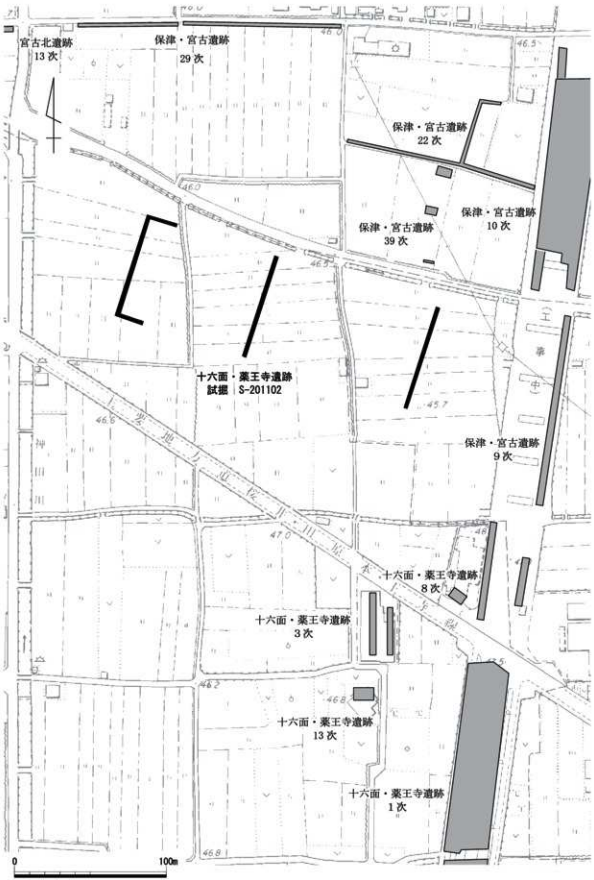
建物予定範囲西端より東へ200mの部分で設定した試掘調査区を第１トレンチとする。基本となる層序は以下のとおりである。

Ⅰ：暗青褐色土〔検出標高45.9m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡灰褐色土〔45.7m〕、Ⅲ：黒褐色土〔45.4m〕、Ⅳ：黒褐色粘質土〔45.3 m〕、Ⅴ：黄褐色土〔45.1m〕

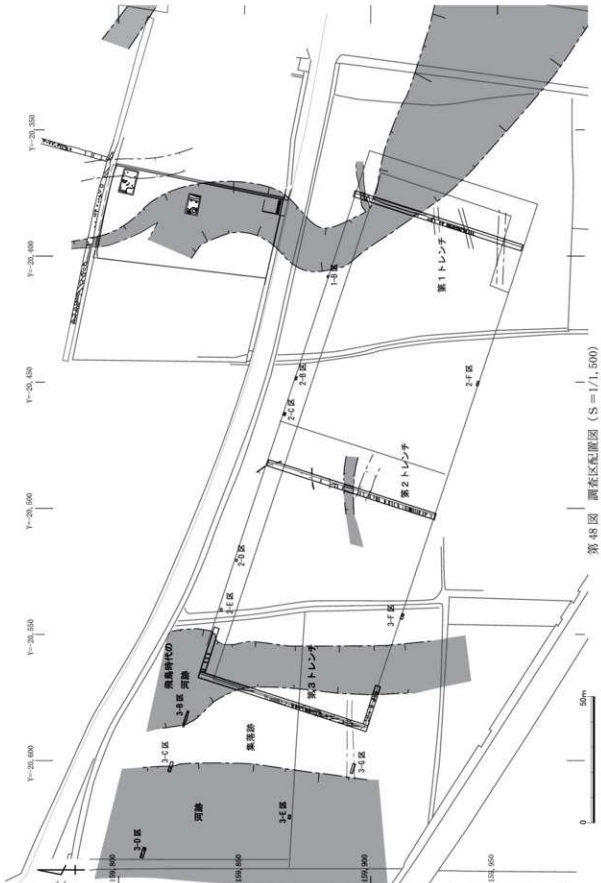
第Ⅰ・Ⅱ層は現代水田耕土及び床土層、第Ⅲ層は古墳時代頃の包含層、第Ⅳ層は弥生時代頃の遺物包含層、第Ⅴ層は地山となる。

縄文時代

ＳＸ－1201　　調査区北端で検出した浅い黒褐色土堆積である。ＳＲ－1101等に切られるため、遺



第47図　調査地位置図（S＝1/2,500）


Y=-20,350
Y=-20,400
Y=-20,450
Y=-20,500
Y=-20,550
Y=-20,600
X=-159,650
X=-159,700
X=-159,750
X=-159,800
X=-159,850
X=-159,900
X=-159,950
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
1-B区
1-C区
1-D区
1-E区
2-C区
2-D区
2-E区
2-F区
3-E区
3-F区
3-G区
3-H区
3-I区
3-J区
3-K区
3-L区
3-M区
3-N区
3-O区
3-P区
3-Q区
3-R区
3-S区
3-T区
3-U区
3-V区
3-W区
3-X区
3-Y区
3-Z区
4-A区
4-B区
4-C区
4-D区
4-E区
4-F区
4-G区
4-H区
4-I区
4-J区
4-K区
4-L区
4-M区
4-N区
4-O区
4-P区
4-Q区
4-R区
4-S区
4-T区
4-U区
4-V区
4-W区
4-X区
4-Y区
4-Z区
5-A区
5-B区
5-C区
5-D区
5-E区
5-F区
5-G区
5-H区
5-I区
5-J区
5-K区
5-L区
5-M区
5-N区
5-O区
5-P区
5-Q区
5-R区
5-S区
5-T区
5-U区
5-V区
5-W区
5-X区
5-Y区
5-Z区
6-A区
6-B区
6-C区
6-D区

構の性格は明らかでない。縄文時代後期の遺物が出土した。

弥生～古墳時代

ＳＤ－1101　調査区中央南で検出した北東－南西方向の溝である。幅約1.4m、掘削をおこなっていないため、深さは不明。堆積土が黒色粘質土であることから、弥生時代～古墳時代頃の遺構と考えられる。

古代

ＳＲ－1101　調査区北側で検出した幅約20mの河跡である。南東－北西方向に流れるとみられるが、調査区内のみでは確定できない。掘削をおこなっていないため、深さは不明。第１トレンチ北端より西側50mで設定した試掘坑（１×0.6m）では河跡が拡がらないことを確認したこと、北側隣接地で本年度10月に実施した保津・宮古遺跡第39次調査で河跡を確認していること、東側隣接地で1993年度に実施した保津・宮古遺跡第９次調査（バイパス試掘調査）で東西方向の河跡を確認していることを総合すると、第１トレンチの西側付近で北北西方向へと屈曲している可能性がある。なお、遺物が出土していないため遺構の時期は明らかでないが、弥生時代～古墳時代の遺物包含層を切って流れることから古代の河跡である可能性が考えられる。

ＳＲ－1102　調査区北端で検出した細い河跡である。ＳＲ－1101の枝流の１つであろう。幅1.6m、深さ0.4m。蛇行してＳＲ－1101に合流するものとみられる。

ＳＲ－1103　調査区南側で検出した河跡である。遺物が出土していないため時期は明らかでないが、弥生時代～古墳時代頃の堆積とみられる黒褐色粘質土上に形成された遺構であることから、古代前後の遺構とみられる。幅６m前後、深さ0.4mを測る。この河跡以南では全体に厚さ0.3m前後の砂質土堆積が拡がる。洪水堆積により全体が削られている可能性があり、水田面が遺存する可能性は低いとみられる。

ＳＤ－1102　調査区中央で検出した東西方向の溝状遺構である。幅1.8m、深さ0.4m以上を測る。上層の堆積土は砂質土で、下層は灰褐色粘質土である。古代頃の遺構と考えられる。

ｂ．第２トレンチ

建設予定地西端より88.2mの箇所（建設予定の２店舗の境界部分）に設定した調査区を第２トレンチとする。基本となる層序は以下のとおりである。

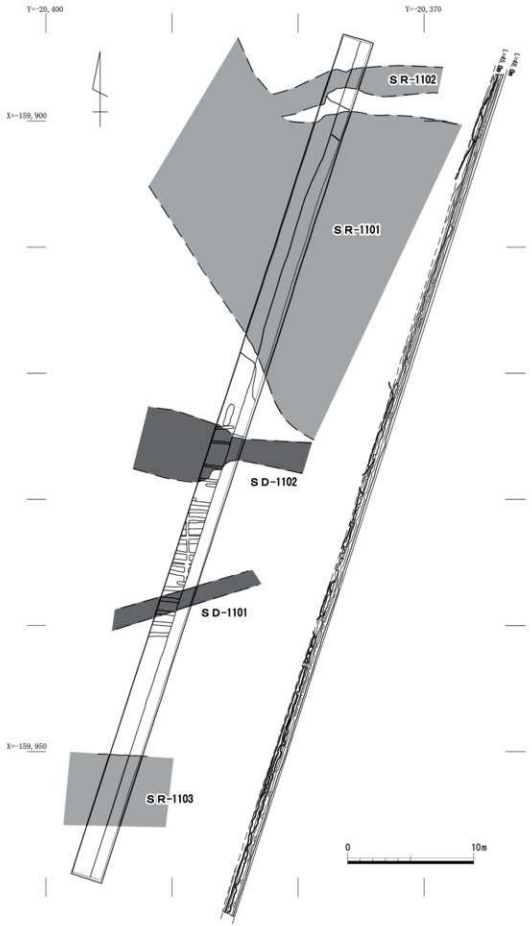
Ⅰ：暗青褐色土〔検出標高45.7m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡褐色年粘質土〔45.5m〕、Ⅲ：灰色粘質土〔45.3m〕、Ⅳ：灰色粗砂〔45.2m〕、Ⅴ：暗褐色土〔45.1m〕、Ⅵ：黒褐色土〔45.0m〕、Ⅶ：灰色粗砂〔44.9m〕

第Ⅰ・Ⅱ層は現代水田耕土及び床土層、第Ⅲ層は中世遺物包含層、第Ⅳ層は古代頃の洪水層、第Ⅴ層は古墳時代頃の遺物包含層、第Ⅵ層は弥生時代頃の遺物包含層、第Ⅶ層は地山である。

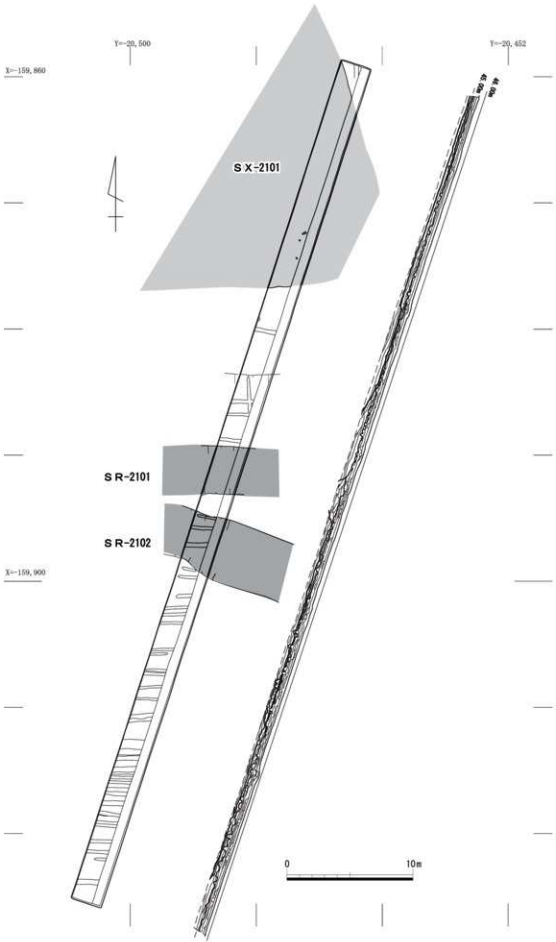
古代

ＳＸ－2101　調査区北端より南へ18mまでの範囲で、薄い暗灰褐色粘質土の堆積層を確認した。部分的に上面を灰色粗砂が覆うため、洪水により埋没した古代の水田遺構が遺存する可能性がある。ただし、中世以降の耕作による影響のため上面を覆う粗砂層は部分的な遺存に留まり、面的に水田遺構を確認できる範囲は限られるとみられる。

ＳＲ－2101　調査区中央で確認した河跡である。幅3.8m。掘削をおこなっていないため深さは



第 49 図　第 1 トレンチ遺構平面図及び東壁断面図（S＝1/300）



第 50 図　第 2 トレンチ遺構平面図及び東壁断面図（S＝1/300）

不明だが、少なくとも0.7m以上となる。東西方向にちかい流れで堆積土は明褐色粗砂である。上層から土師器が出土しているが詳細な時期は不明。古墳時代包含層の黒褐色土を切ることから古代頃となる可能性がある。第１トレンチＳＲ－1101から分岐した流れの一部となる可能性がある。

ＳＲ－2102　ＳＲ－2101の南側に隣接する浅い河跡である。幅約４m、深さ0.2m。遺物を確認していないため時期は明らかでない。

ｃ．第３トレンチ

建設予定地西端に設定した調査区を第３トレンチとする。本調査区は検出した遺構の規模と分布範囲を確定するために拡張をおこなっている。北東拡張区は、後述するＳＲ－3101の幅を確認するために調査区北端より東側へ延長22m、幅２mの拡張をおこなったものである。また南東拡張区は、ＳＲ－3101の延長ラインを確定するために調査区南端から東へ延長18m、幅２mの拡張をおこなったものである。このほか、店舗北端ラインの西側延長沿いに３ヶ所のサブトレンチを設け、遺構分布範囲の西端及びＳＲ－3101の延長ラインの確認をおこなった。基本層序は以下のとおりである。Ⅰ：暗青褐色土〔検出標高45.6m、以下数値のみ記す〕、Ⅱ：淡灰褐色土〔45.4m〕、Ⅲ：灰色粘質土〔45.2m〕、Ⅳ：黒褐色土〔45.1m〕、Ⅴ：黒灰色粘質土〔44.8m〕、Ⅵ：淡黄灰色シルト〔44.7m〕

第Ⅰ～Ⅱ層は現代水田耕土及び床土、第Ⅲ層は中世遺物包含層、第Ⅳ・Ⅴ層は古墳時代の包含層、第Ⅵ層は地山である。なお、本調査区には第Ⅳ層上面の飛鳥時代～中世の遺構面（第１遺構面）と第Ⅵ層上面の弥生時代後期～古墳時代の遺構面（第２遺構面）がある。

古墳時代

ＳＸ－3201　調査区中央付近で検出した方形プランの竪穴住居となる可能性のある遺構である。検出したのは一部であり、その規模と時期については明らかでない。上面に炭が薄く堆積する。

ＳＸ－3202　ＳＸ－3201の北側で検出した遺構である。調査では南肩を確認したのみであり、全体の規模等は不明である。ＳＸ－3201と同様の遺構となる可能性がある。

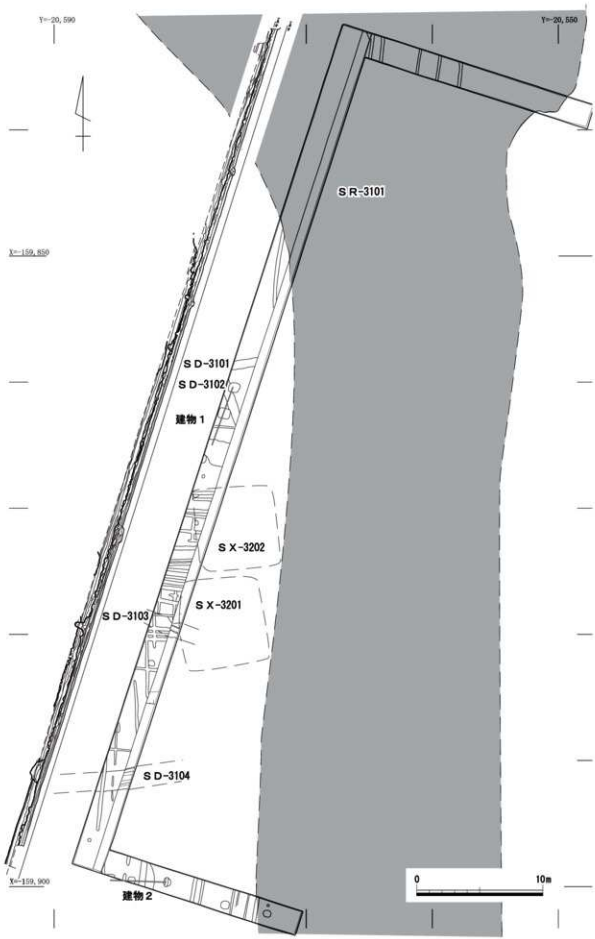
古代

ＳＲ－3101　調査区北側で検出した北北西－南南東方向の河跡である。上面で須恵器坏蓋等の飛鳥時代の土器片が多数出土したことから、河の埋没時期は飛鳥時代と考えられる。河の幅は若干蛇行している可能性があるため明らかでないが、20～30mとなる可能性がある。深さは確認していないが、少なくとも１m以上となる。

ＳＲ－3102　調査区北端の西側延長ラインで設定した３－Ｃ区で検出した時期不明の河跡である。遺物をほとんど含まないため、所属時期等は明らかでない。第３トレンチで確認した遺構群の西限となる可能性が高い。なお、今回の開発予定範囲の西端に設定した３－Ｄ区でも一連の河跡を確認した。このことから、河跡の範囲は少なくとも幅40m以上となる可能性が高い。

ＳＤ－3101　調査区中央で確認した幅0.6m、深さ0.4mの溝である。北東－南西方向で、堆積土は暗褐色粘質土と淡褐色砂質土のブロック土である。遺物は確認していないが、飛鳥時代頃の遺構であろう。

ＳＤ－3102　調査区中央で確認した幅0.7m、深さ0.2mの溝である。北西－南東方向で、堆積土は淡褐色微砂である。遺物は確認していないが、飛鳥時代頃の遺構であろう。



第51図　第3トレンチ遺構平面図及び東壁断面図（S＝1/300）

ＳＤ－3103　調査区中央南で確認した、幅0.5m、深さ１mの溝である。東西方向で、堆積土は上層が褐色土、下層が灰褐色粘質土である。遺物は僅少であり、時期を明らかにすることはできなかった。奈良時代前後の遺構であろう。

ＳＤ－3104　調査区南側で検出した西南西－東北東方向の溝である。幅1.6m、深さ0.8mを測る。堆積土は上層が暗褐色粗砂、下層が淡青灰色粘質土である。遺物をほとんど含まないため時期は明らかでない。なお、建物南端ラインの西側延長で設定した３－Ｇ区でもこの遺構の延長を検出している。

建物１　ＳＤ－3102周辺で、0.8m四方の掘り肩を有する柱穴を２基検出した。主軸は南北にちかい。ＳＤ－3102の埋没後に掘削された遺構であり、建物の主軸からみて奈良時代頃の遺構となる可能性がある。柱穴の規模から、比較的規模の大きな建物に伴う遺構であろう。

建物２　南東拡張区で柱穴を４基検出した。建物１同様の柱穴規模であり、西北西－東南東方向に並ぶ。これも奈良時代前後の比較的規模の大きな建物に伴う遺構であるとみられる。

３．まとめ

今回の試掘調査により、店舗建設予定範囲の西端周辺で濃密な遺構分布を確認した。一方、店舗の中央及び東側については若干の遺構を確認しているものの、比較的遺構密度は低いと考えられた。ただし、第２トレンチ北端とその周辺に水田跡が遺存する可能性があるほか、第１トレンチ中央でも弥生時代または古墳時代の溝等人為的な遺構が分布する可能性がある。

第３トレンチでは、奈良時代前後となる可能性がある建物跡を確認した。北側の保津・宮古遺跡で確認している飛鳥～奈良時代の官衙的な建物群とも関連する遺構が拡がる可能性があり、遺跡としての重要性は極めて高い。さらに弥生時代後期～古墳時代中期にかけての集落遺跡が下層遺構として存在することも確認した。出土した土器の量も比較的多く、部分的に確認した遺構には竪穴住居の可能性があるものも含まれる。

１．第３トレンチ遺構検出状況（南から）

２．ＳＤ－3102・建物１検出状況（西から）

12. 秦庄遺跡　試掘調査（S－201103）

1．遺跡の概要

秦庄遺跡は、田原本町南部、標高52m前後の寺川左岸の沖積地に位置する。これまでの調査で、古墳時代前期末～中・後期の集落遺構を検出している。また、北側に隣接する秦楽寺遺跡では、古墳時代中・後期の玉製作に関わる遺物がまとまって出土しているほか、中世末頃の城館関連遺構等も検出している。

今回、遺跡北端で宅地分譲の計画があり、試掘調査により遺構の有無を確認することとなった。

2．調査の成果

今回の試掘調査では、道路予定部分に２×１mの試掘坑４ヶ所を設定して調査をおこなった。調査の結果、敷地全体が時期不明の河跡にあたることが判明した。河跡は南東－北西方向である可能性が考えられるが、小規模な試掘調査であるため詳細は明らかでない。遺物包含層等から少量の土師器・瓦等が出土した。

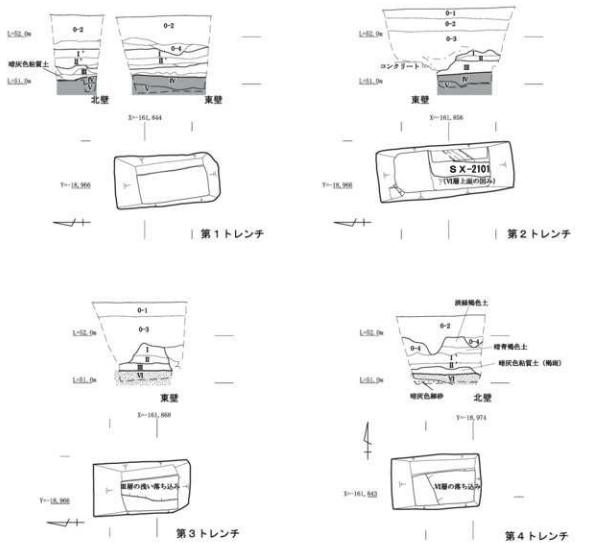
3．まとめ

調査の結果、今回の開発地は顕著な遺構が存在しない遺跡端部に相当することが判明した。本試掘調査後、工事着手。

1．調査地全景（南から）

2．第２トレンチ東壁土層堆積状況（西から）

1．調査地位置図



現代造成土
0-1 クラッシャーラン
0-2 暗褐色砂礫土
0-3 淡灰色砂礫土（瓦礫多）
0-4 褐色土

旧水田耕土・床土層
Ⅰ 青灰色粘質土
Ⅱ 淡青褐色粘質土
Ⅲ 淡褐色粘質土（暗褐色斑）

時期不明河跡堆積層
Ⅳ 暗褐色粘質土
Ⅴ 暗褐色土（ハード・砂質）
Ⅵ 暗灰青色シルト

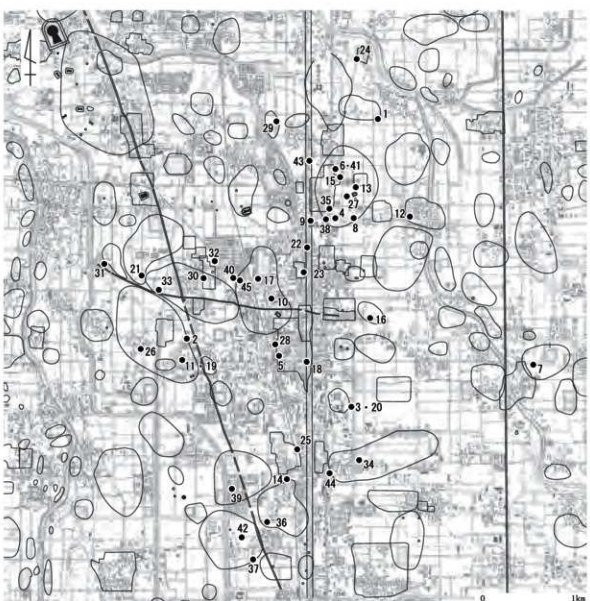
Ⅰ' 青灰色粘質土（やや暗・砂混）
Ⅱ' 青灰色粘質土

2．第１～４トレンチ遺構平面図及び断面図

第 52 図　調査地位置図及び第１～４トレンチ遺構平面図・断面図（上：S＝1/2,500、下：S＝1/80）

（２）工事立会の概要

2011年度に実施した工事立会は45件である（第７表）。唐古・鍵遺跡の下水道工事に伴う工事立会、多遺跡の暗渠排水設置工事に伴う工事立会については後述する。防災無線関連の工事が町内各所であったが、これに伴う立会調査も各地区の地下の状況を知る上で大きな成果となった。なお、個人住宅等の建築については、近年の工法が柱状改良を主体とするため施工状況を確認する程度となっている。



第53図　田原本町の遺跡と工事立会地点（Ｓ＝1/40,000）

第7表　2011年度　工事立会一覧

	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内　容
1	八田 (R-201101)	田原本町大字八田85-1	㈱サトウプロダクト	青空駐車場 資材置き場	奥谷	2011．4．14 ・4．19	東擁壁の基礎掘削時に立会。深さ0.5m。掘削は水田床土にとどまる。顕著な遺物なし。
2	十六面・薬王寺 (R-201102)	田原本町大字保津218-1の一部	個人	店舗兼住宅の建築	奥谷	2011．6．6 ～　8．1	敷地北側の擁壁工事時に立会。深さ1.3m以上の掘削で、下層は時期不明の河跡堆積層が拡がる。
3	阪手 (R-201103)	田原本町大字千代399-7	個人	個人住宅の建築	奥谷	2011．6.22	ベタ基礎掘削時に立会。立会時、柱状改良済み。掘削は-0.3mで造成土内に留まる。
4	唐古・鍵 (R-201104)	田原本町大字鍵地内	田原本町長 （下水道課）	下水道工事	清水	2011．7．2 ～10.29	人坑試掘時及び下水管埋設時に立会。集落南部を囲む環濠となる可能性のある弥生時代後期の溝等を検出。また、工区東側では時期不明の河跡検出。遺跡外となるか。
5	寺内町 (R-201105)	田原本町557	個人	ガレージの建築及び外構工事	清水	2011．7.20	外構工事時に立会。埋戻し済みのため遺構・遺物は不明。掘削は-0.6m程度とのこと。
6	唐古・鍵 (R-201106)	田原本町大字唐古地内	田原本町長 （総合政策課）	史跡景観美化のためのコスモス栽培	奥谷	2011．8．4	耕耘機による耕作時に立会。現地表より-0.2m前後の耕作で、現耕土層にとどまる。
7	為川南方 (R-201107)	田原本町大字為川南方22-2	個人	農業用倉庫の建築	西岡	2011．8．6	擁壁掘削時に立会。掘削は水田面-0.4mで床土内に留まる。古代頃の須恵器・土師器数片が出土。
8	唐古・鍵 (R-201108)	田原本町大字鍵155	田原本町長 （総務課）	屋外拡声子局の設置	奥谷	2011．8.17	北小校庭南西隅でのスピーカー用鉄柱基礎工事。掘削は1.5m四方。-1.6mまでが校庭造成土、-2.3～2.7mは時期不明の河跡堆積層か。-2.7m以下は地山層。
9	下ツ道 (R-201109)	田原本町大字鍵71	田原本町長 （総務課）	屋外拡声子局の設置	清水	2011．8.18	北中学校北門付近での基礎工事。-1.3mまで攪乱。以下は古い河跡の堆積とみられるが、遺物がみられず時期不明。
10	羽子田 (R-201110)	田原本町大字新町48	田原本町長 （総務課）	屋外拡声子局の設置	奥谷	2011．8.23	田原本小学校敷地北西隅での基礎工事。-1.8mまで盛土、下に旧耕土層。-2.1～2.4mは粗砂、以下は黒粘の地山層。
11	十六面・薬王寺 (R-201111)	田原本町大字薬王寺491-1・-2、492-3	成平開発	宅地分譲	奥谷	2011．8.24 ・9．1	ブロック壁の基礎掘削時に立会。北辺は-0.8m、西辺は-0.4m。現代水路、届出地北辺に沿う東西溝を検出。
12	法貴寺 (R-201112)	田原本町大字法貴寺1568	（宗）蓮光寺	離れ及び山門の建築	奥谷	2011．9．9	敷地南辺の擁壁工事。掘削0.8m。-0.3mまで現代攪乱。それ以下は近世造成土。顕著な遺構なし。
13	唐古・鍵 (R-201113)	田原本町大字唐古50-2他、鍵222-1他	田原本町長 （総合政策課）	遺跡公園整備に伴う造成工事	奥谷	2011．9.12 ・9.13	唐古池南東1町分の進入路の造成工事時に立会。厚さ0.6m前後の盛土造成、地下遺構に影響なし。
14	秦庄 (R-201114)	田原本町大字宮森343、343-1の各一部	個人	個人住宅の建築	奥谷	2011．9.13	柱状改良時に立会。-0.6mまで現代造成（攪乱）土。その下は不明。上げ土では地山とみられる青灰色粘砂あり。遺構・遺物不明。
15	唐古・鍵 (R-201115)	田原本町大字唐古103	田原本町教育委員会 （文化財保存課）	水道メーター設置工事	清水	2011．9.27	メーター設置のための掘削時に立会。掘削は改良された造成土内に留まる。
16	阪手東 (R-201116)	田原本町大字阪手233	田原本町長 （総務課）	屋外拡声子局の設置	奥谷	2011.10．3	図書館敷地南東での基礎掘削時に立会。-1.3mで旧水田面。-1.6m以下は河跡堆積層（弥生遺構検出面か）。-1.8m以下は地山層。遺構・遺物なし。
17	羽子田 (R-201117)	田原本町大字八尾674-5	UQコミュニケーションズ㈱	インターネット無線基地局の設置	奥谷	2011.10．7	鉄塔基礎掘削時に立会。-1.5～1.6mに暗褐色土の遺物包含層、以下は地山。顕著な遺構なし。
18	寺内町・下ツ道 (R-201118)	田原本町445-2の一部	三輪町 自治会長	不燃物置き場の建築	奥谷	2011.10．7	ゴミ置き場の改修工事時に立会。-0.35mまで攪乱。それ以下は寺川堤防の土か。顕著な遺構なし。
19	十六面・薬王寺 (R-201119)	田原本町大字薬王寺491-1他	ファースト住建㈱	分譲住宅の建築	奥谷	2011.10.12	ベタ基礎掘削時に立会。届出では柱状改良なしとされていたが、改良工事が完了していた。
20	阪手 (R-201120)	田原本町大字千代399-6	個人	個人住宅の建築	清水	2011.10.18	柱状改良後のベタ基礎掘削時に立会。-0.2mの掘削で造成土内に留まる。
21	宮古北 (R-201121)	田原本町大字宮古198・199合併1西側道路他	田原本町長 （下水道課）	下水道工事	清水・奥谷	2011.10.27	人坑3ヶ所の試掘時に立会。北2ヶ所では、-1.1mが地山で顕著な遺構なし。古代平瓦片出土。南端では、GL-1mまで道路工事による攪乱。以下は古墳時代前後とみられる落ち込み状堆積。
22	下ツ道 (R-201122)	田原本町大字八尾778	個人	倉庫の建築	清水	2011.10.28	基礎掘削時に立会。掘削は深さ0.3m前後。-0.2mまで現代攪乱土、以下は近世造成土とみられるブロック状の暗灰褐色粘質土層。顕著な遺構なし。
23	鏡作神社 (R-201123)	田原本町大字八尾807-1	個人	賃貸住宅の建築	清水	2011.10.28	柱状改良時に立会。厚さ0.2mの盛土（整地土）の上から柱状改良工事。層序等は不明。遺物の散布も現代の瓦礫のみ。
24	常宝寺 (R-201124)	田原本町大字八田477東側道路他	田原本町長 （下水道課）	下水道工事	清水	2011.10.30 ～11．3	西八田集落西部での人坑4ヶ所の設置時に立会。集落西端の南北道路での2ヶ所は近世水路跡及び中世以前の河跡。集落内西部の2ヶ所は中世の落ち込みまたは溝。室町期の土師器出土。
25	秦楽寺 (R-201125)	田原本町大字秦庄326-3東側隣接地	田原本町長 （総務課）	屋外拡声子局の設置	奥谷	2011.11.21	九品寺公民館西の水路脇での設置工事時に立会。-1.7mまで現代擁壁の攪乱。-2mまで水路・河川の堆積層。それ以下は地山層。
26	十六面・薬王寺 (R-201126)	田原本町大字十六面277	田原本町長 （総務課）	屋外拡声子局の設置	奥谷	2011.11.22	十六面公民館南東隅での基礎工事時に立会。大半は防火水槽の攪乱。-0.8mまで公民館盛土、-1.4mまで旧水田耕土・床土、それ以下は包含層か。

	遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内　容
27	唐古・鍵 (R-201127)	田原本町大字鍵	田原本町長 (総合政策課)	史跡整備 (用排水路の敷設)	奥谷	2011. 11. 22	東西道路北辺のU字溝撤去工事時に立会。新たな掘削はないため、包含層等は不明。
28	寺内町 (R-201128)	田原本町 228-3	田原本町長 (総務課)	屋外拡声子局の設置	清水	2011. 11. 24	公園内での基礎工事。-0.8mまで盛土層。以下は深さ0.8mの近世～近代大溝の堆積層。浄照寺西側を囲む大溝であった可能性が高い。
29	西代西 (R-201129)	田原本町大字西代 94	田原本町長 (総務課)	屋外拡声子局の設置	奥谷	2011. 11. 29	公園内での基礎工事。-1.1mまで公園造成土。-1.7mまで畑土。以下は地山層。
30	保津・宮古 (R-201130)	田原本町大字宮古 257・258 合併の 1 南側隣接地	田原本町長 (総務課)	屋外拡声子局の設置	清水	2011. 11. 29	宮古池堤防上での基礎工事。深さ -2.7m。-1 mは近世造成土、-1.3mまでは東西方向の近世溝。遺物をほとんど含まない。
31	富本 (R-201131)	田原本町大字富本 194	田原本町長 (総務課)	屋外拡声子局の設置	清水	2011. 11. 30	富都神社西側での基礎工事。-0.5mまでが近代以降の造成土、-0.9mまでが近世包含層。以下は近世南北溝とみられる厚さ 0.5mの堆積層を確認。近世及び鎌倉期の遺物が出土。
32	常楽寺推定地 (R-201132)	田原本町大字宮古 281	田原本町長 (下水道課)	公共下水道工事	清水	2011. 12. 2	人坑試掘時に立会。-1.2m前後が地山とみられ、直上が耕土及び床土、-0.8mまでが昨年度までの道路工事による造成土。遺構・遺物なし。
33	保津・宮古 (R-201133)	田原本町大字宮古 6-1	個人	賃貸住宅の建築	清水	2011. 12. 5	敷地南端での水路・擁壁工事。水田面 -1.5mの掘削。-0.5mまでが耕土・床土、以下掘削床まで粗砂堆積。東端で粗砂堆積の肩を確認。南南西－北北東に流れる可能性がある。遺物はみられず。
34	千代 (R-201134)	田原本町大字千代 1011-1、-2	個人	青空駐車場	奥谷	2011. 12. 12	擁壁工事時に立会。-0.3mの掘削で、一部 -1 mとなる。-0.7mまで畑耕土層。それ以下は時期不明の河跡堆積層か。顕著な遺構・遺物なし。
35	唐古・鍵 (R-201135)	田原本町大字鍵 254 西側里道		水道管修理	藤田・奥谷	2011. 12. 12	里道内の水道管破裂に伴う修理時に立会。掘削は耕土層内に留まる。弥生土器出土。
36	秦庄 (R-201136)	田原本町大字宮森 34-1	田原本町長 (総務課)	屋外拡声子局の設置	清水	2012. 1. 6	県立高等養護学校敷地内での基礎工事。-1.2mまでが造成土、-1.9mまでが旧水田耕土・床土、それ以下は地山。遺構・遺物は確認していない。
37	多 (R-201137)	田原本町大字多 293-1 他 南側道路	田原本町長 (建設課)	農山漁村活性化プロジェクト交付金事業（水路改修）	清水	2012. 1. 6	H21 年度に試掘済みの道路工事が着手されていたので確認。掘削は -0.4mで、上層 0.2mは水田耕土、下層は床土。遺構面まで及ばない。
38	唐古・鍵 (R-201138)	田原本町大字鍵 123-1 他	㈱セブン－イレブン・ジャパン	店舗（コンビニ）新築	奥谷・清水	2012. 1. 6 ～ 1. 10	敷地北側の造成土内を GL-0.1 ～ 0.6m掘削。遺構・遺物なし。
39	宮森 (R-201139)	田原本町大字新木 1-33	田原本町長 (総務課)	屋外拡声子局の設置	清水	2012. 1. 12	公園内での基礎工事。-1.5mまで客土、その下に中世頃とみられる暗灰色粘質土が厚さ 0.3m堆積する。その下は地山。遺構・遺物は確認せず。
40	羽子田 (R-201140)	田原本町大字八尾 524-1 他 南側道路	田原本町長 (建設課)	踏切道の歩道設置	奥谷	2012. 1. 13	踏切西側歩道の水路改修工事時に立会。現代水路や踏切等の攪乱を強く受けている。一部地山層を確認できる場所あり。遺構・遺物なし。
41	唐古・鍵 (R-101141)	田原本町大字唐古 99-2、-3、100	田原本町長 (総合政策課)	史跡整備工事 (平板載荷試験)	奥谷	2012. 1. 30	表土より 10 ～ 15 cmを掘削（加圧計測）したが、耕土層に留まる。
42	多 (R-201142)	田原本町大字多 557 他	田原本町長 (建設課)	水田暗渠設置	清水・奥谷	2012. 2. 13 ～ 3. 27	観音道西側周辺で暗渠工事の掘削がおこなわれている旨の通報あり。町事業課の工事で、無届けのため至急発掘通知の提出を求める。立会の結果、多神社周辺の遺物包含層の拡がりを確認。また、遺跡東端の状況も確認した。県から遺憾文書の通知あり。遺物は弥生土器・古代瓦等遺物箱 2 箱相当が出土。
43	下ツ道 (R-201143)	田原本町大字今里 233-7	個人	個人住宅の建築	清水	2012. 2. 22	柱状改良時に立会。ドリルの穴で層序を確認。-1.3m程度で近世包含層・堆積土が終わり以下は河川堆積とみられる堆積シルト。遺構・遺物なし。
44	千代 (R-201144)	田原本町大字千代 1107-1 他	個人	店舗の建築	清水	2012. 3. 21	鋼管杭打設時に立会。ドリルであがった土は -3 m程度まで青灰色粘質土、下位は淡青灰色シルト。河跡に相当するか。
45	羽子田 (R-201145)	田原本町大字八尾 685-1	個人	駐車場の造成	清水	2012. 3. 29	擁壁工事時に立会。現状 GL-25 cmの掘削で、客土下の旧水田耕土層上面までの掘削に留まる。遺構・遺物なし。

１．唐古・鍵遺跡　工事立会（R－201104）

１．はじめに

2011年度の鍵地区における下水道工事では、立坑２ヶ所の設置に伴う発掘調査を唐古・鍵遺跡第110次調査として実施した。また、各戸への取り付け工事時等、本調査対応が不可能と判断された工事箇所については掘削工事時に立会をおこなった。ここでは工事立会の成果について報告する。

２．工事立会の成果

工事立会は、６戸への取り付け工事に伴う掘削、及び国道沿いで発掘調査対応が困難であった立坑１ヶ所について実施した。工事立会の結果、弥生時代の環濠とみられる大溝３条を確認したほか、自然河道状の堆積を確認した。なお、工事立会は７月２日～10月29日の延べ10日に及び、遺物箱１箱相当の遺物が出土した。

弥生時代

ＳＤ－101　鍵129－２北側隣接地で検出した東西方向の大溝である。溝の南肩は近世の東西溝に切られる。また、北肩は掘削時に確認していなかったため溝幅を明らかにすることができなかった。推定幅３～４m。深さ１m以上あるとみられるが、掘削が溝底まで達しないため不明。上層より弥生時代後期後半頃の土器片が出土している。

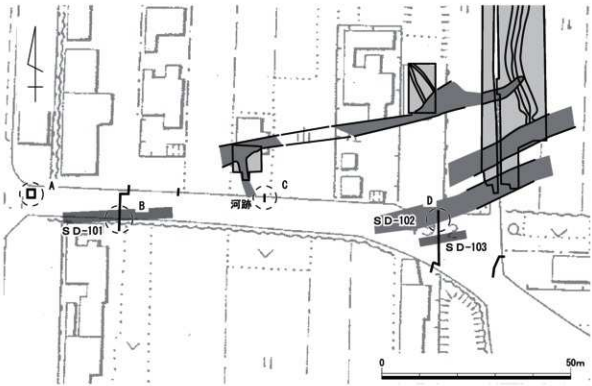
ＳＤ－102　鍵263－３南側隣接地で弥生時代中期の大溝を確認した。掘削範囲よりも北側に拡がるとみられるため、溝幅は明らかでない。また、掘削が溝中層程度に留まったため、深さは明らかでない。掘削範囲が狭小であるため溝の方向も明らかでないが、ほぼ東西方向にちかい遺構となるであろう。第69次調査南端等で検出している大溝と一連の遺構となるであろう。弥生時代中期～後期初頭の土器片が出土した。

ＳＤ－103　ＳＤ－102の南側に隣接して検出した東西方向の溝である。幅3.5m前後、深さ0.4m前後を測る。遺物は確認していない。

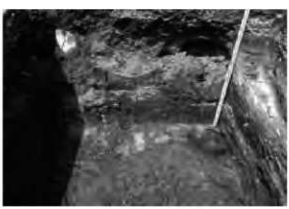
自然河道　鍵268－３等では、厚い粗砂堆積を確認している。上記の環濠掘削以前に形成されたものとなる可能性があるが、遺物が出土していないため詳細は明らかでない。

３．まとめ

工事立会の結果、唐古・鍵遺跡の南東部の状況についての情報を断片的ながら得ることができた。この地区については調査事例が乏しく不明な点が多かったこともあり、今回得られた成果は遺跡全体像の復元をおこなう上で重要である。



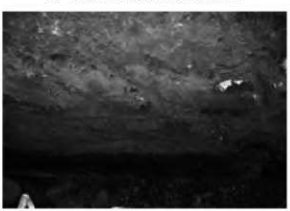
第 54 図　唐古・鍵遺跡（鍵地区）工事立会の成果（S＝1/1,000）



1．A地点工事立会状況（東から）

2．B地点工事立会状況（北東から）

3．C地点工事立会状況（北から）



4．D地点工事立会状況（西から）

2．多遺跡　工事立会（R－201142）

1．はじめに

多遺跡は、田原本町南部の標高52m前後の沖積地に所在する。これまで24次にわたる発掘調査がおこなわれており、弥生時代前期から古墳時代後期にかけての集落遺構、中世の溝等を検出している。

2009年度より多地区では農業用水路及び暗渠排水の整備事業がおこなわれており、多遺跡東部での水路工事に伴って実施した第22次調査（2009年度）・第24次調査（2010年度）では弥生時代前期～近世の各種遺構を検出し、多くの遺物が出土した。2011年度は多遺跡東部での暗渠設置工事がおこなわれたが、事業課から文化財保護部局への事前協議のないまま無届けで着手され、地元からの通報により急遽文化財保護法第94条に基づく発掘通知の提出を求めた。

工事は各水田に幅0.3m、深さ0.7m前後の溝を掘削し、そこに暗渠用の管を埋設するものである。工事延長は約3,500mに及んだ。掘削規模から発掘調査での対応は困難であるため、工事立会で対応することとなった。工事立会は平成24年２月13日から３月27日にかけて実施した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦等遺物箱２箱が出土した。工事立会の結果、多遺跡東限の状況について把握することができた。

2．工事立会の成果

今回の工事立会では、一部を除き明確な遺構を断面で確認することはできなかったが、廃土の土質や出土した遺物等である程度の情報を得ることができた。ここでは、地区ごとに土質と遺物の分布状況を報告する。なお、地区名は便宜的に北東よりＡ～Ｉ区とする。

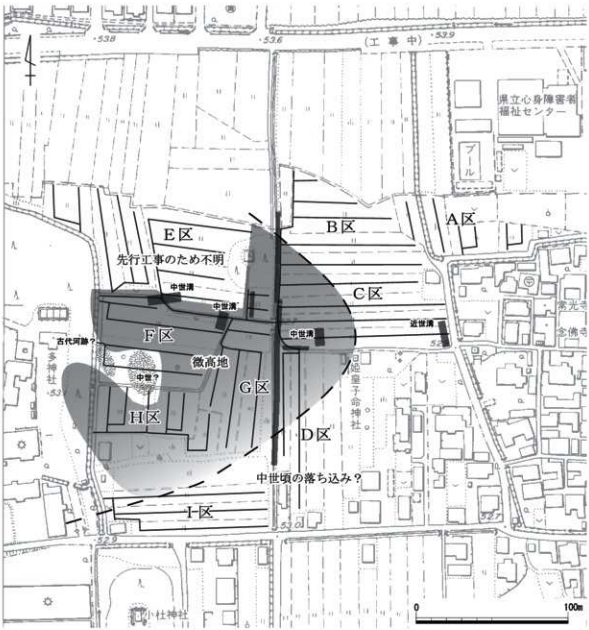
Ａ区　現多集落の北西、筋違道東側に位置する本区は、掘削床が暗褐色土層で微低地の状況である。ただし、筋違道東側側溝が想定される位置で耕土床土層が若干深くなる傾向がみられた。下層遺構による地形的な影響とみられる。遺物は出土していない。

Ｂ区　現多集落の西側北、筋違道西側の北半に位置する本区は、掘削床が暗褐色粘質土で微低地の状況である。遺物も僅少であった。ただし、多観音堂東側付近では西端で黒褐色土の弥生～古代遺物包含層がみられた。

Ｃ区　Ｂ区の南側に位置する本区では、南端での東西開削時に西半で黒褐色土がみられた。２反北側での掘削では西側1/3程度が黒褐色土の範囲となっていた。多集落の微高地北東限となる可能性が考えられる。なお、筋違道沿いの工区東端では、近世頃の砂質土堆積を確認している。筋違道の西側側溝を踏襲した遺構となる可能性がある。

Ｄ区　多遺跡南西端に位置する本区では、掘削床が褐色土であり、落ち込み状の地形となっていた可能性が考えられる。遺物は北端で少量みられた程度である。

Ｅ区　多神社の北東、観音堂の西側に位置する本区は、先行工事により工事立会ができなかった。このため、遺跡範囲に関する情報を得ることはできなかった。廃土に弥生土器が多数みられることから、全体が多遺跡の集落内部となる可能性が高い。



第 55 図　多遺跡工事立会位置図（S＝1/2, 500）

F区　多神社東側隣接地の北西にあたる本区では、全体で弥生時代の遺物を包蔵する黒褐色土を確認した。弥生時代中・後期の土器が多数出土しており、大溝等が存在する可能性がある。本区北端の里道は排水管設置のため他の工区より掘削が深く、1.3mに及ぶため、弥生時代の包含層下の地山まで掘削が及んだ。包含層の厚さ0.5m。ただし、狭小で湧水も多いため、弥生遺構を明確に確認することはできなかった。

本区西端では、古代の瓦等を含む砂質土を確認した。多神社東側隣接地を流れる現水路の前身となる可能性もあるが、詳細は不明。

本区北端の里道では、第24次調査で東西方向とみられる中世大溝を確認しており、本立会調査でもこの遺構の断面を確認した。また、本区中央の一部で瓦質土器片を含む砂質土を確認しており、別の中世大溝が存在する可能性も考えられる。

G区　F区の東側、D区の西側に位置する本区は全体が黒褐色土であり、集落の居住区に相当するとみられる。ただし、遺物はやや少ない。包含層の上面を削った程度とみられる。

H区　多神社東側隣接地南半、F区の南側に隣接する本区では、黒褐色土の弥生時代包含層が全体に拡がることを確認した。本区南西部で特に遺物が多くみられた。

Ⅰ区　工事範囲の南西端となる本区では、今回の工事掘削では遺物包含層まで掘削が及ばない。地形的に落ち込んでいるか、集落外となっている可能性が考えられる。

3．まとめ

今回の工事立会により、多遺跡東部の遺物包含層の拡がりを確認することができた。狭小な工事掘削であるため個別の遺構を確認することはできなかったが、多遺跡の範囲を考える上で重要な成果を得ることができた。

1．D区工事立会状況（南東から）

2．C区工事立会状況（南東から）

Ⅱ．資料の整理と活用・普及

１．文化財資料の整理・保管

（１）埋蔵文化財の整理・保管

平成23年度の発掘調査と工事立会に伴い保管した埋蔵文化財は、遺物コンテナ約109箱他である。遺物量は前年度より約65箱多い。これは、前年にはなかった唐古・鍵遺跡の調査があったためで、第109～112次調査をおこない、弥生土器を初めとする多量の弥生系遺物を保管した。このほか、十六面・薬王寺遺跡第27・28次調査で出土した遺物も弥生土器・古式土師器等で量的に多く占めることになった。それ以外では保津・宮古遺跡第39次調査の中世遺物がみられるが、それを除くとほとんど１箱程度になる。

平成23年度においては、３ヶ年目を迎えた緊急雇用創出事業として唐古・鍵遺跡の再整理事業をおこなった。唐古・鍵遺跡の再整理は、第23～33次調査で出土した土器類を中心に約700箱の遺物のみなおしと再収納を実施した。これによって最終的に約550箱に再収納・保管することになった。また、絵画土器や搬入土器、異形土器など新たに見つかった重要土器、各時代を示す典型的な土器、土器片円板や土器片紡錘車、焼土塊等の土製品をピックアップするとともに登録作業も並行しておこなった。これら重要遺物の一部については、第Ⅳ部・資料の報告として紹介する。

【埋蔵文化財保管数】

調査番号	遺跡名	調査次数	遺物明細	遺物量	
				現場後	洗浄後（土器・瓦）
H23-01	十六面・薬王寺遺跡	第27次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等	28箱	21箱
H23-02	唐古・鍵遺跡	第109次調査	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・近世陶磁器等	12箱	11箱
H23-03	唐古・鍵遺跡	第110次調査	弥生土器等	１箱	１箱
H23-04	西竹田遺跡	第４次調査	土師器・黒色土器・瓦器等	１箱	１箱
H23-05	保津・宮古遺跡	第39次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・木製品・石器等	11箱	５箱
H23-06	唐古・鍵遺跡	第111次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・近世陶磁器・埴輪・石器・金属器・ガラス玉・瓦等	72箱	52箱
H23-07	千代遺跡	第８次調査	土師器・瓦器・近世陶磁器・石器・瓦等	１箱	ナ小３・中２
H23-08	唐古・鍵遺跡	第112次調査	弥生土器・土師器・瓦質土器・近世陶磁器等	１箱	１箱
H23-09	宮本遺跡	第２次調査	土師器・瓦質土器・近世陶磁器等	１箱	ナ小３・中２
H23-10	十六面・薬王寺遺跡	第28次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・埴輪・石器・木製品等	10箱	７箱
S-201102	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等	１箱	１箱
S-201103	秦庄遺跡	試掘調査	土師器・瓦等	１箱	ナ小３

※遺物量の表記の箱とは、長さ56cm・幅36cm・深さ15cmの容量を標準として換算している。また、ナ（小・中・大）は、ナイロン袋の小・中・大の大きさを表している。

また、唐古・鍵遺跡出土木製品15点について、吉田生物研究所に委託し保存処理をおこなった。また、直営で保津環濠遺跡の板材等についても処理をおこなった（右表）。

【埋蔵文化財保管数２】

調査番号	遺跡名	調査次数	遺物明細	遺物量	
				現場後	洗浄後（土器・瓦）
R-201104	唐古・鍵遺跡 唐古氏居館推定地	立会調査	弥生土器・瓦等	１箱	７箱
R-201107	為川南方遺跡	立会調査	土師器・須恵器	ナ小１	ナ小１（４点）
R-201124	常宝寺遺跡	立会調査	土師器	ナ小１	ナ小１（９点）
R-201127	唐古・鍵遺跡	立会調査	弥生土器・土師器等	１箱	ナ小３
R-201131	富本遺跡	立会調査	土師器・瓦質土器・近世陶磁器等	ナ中１	ナ中１（８点）
R-201135	唐古・鍵遺跡	工事立会	弥生土器	ナ小１	ナ小１（２点）
R-201142	多遺跡	立会調査	弥生土器・土師器・瓦等	３箱	２箱

※遺物量の表記の箱とは、長さ56cm・幅36cm・深さ15cmの容量を標準として換算している。また、ナ（小・中・大）は、ナイロン袋の小・中・大の大きさを表している。

【保管遺物種と数量】

調査番号	遺跡名	調査次数	土製品	焼土塊	木製品	石製品	骨製品	金属器	銭貨	ガラス	木	石	獣骨・貝	種子	炭化米
H23-01	十六面・薬王寺遺跡	第27次調査	1	4	3	13	－	－	－	－	1	9	－	－	－
H23-02	唐古・鍵遺跡	第109次調査	－	1	3	150	－	1	1	－	－	10	2	11	－
H23-03	唐古・鍵遺跡	第110次調査	－	－	－	5	－	－	－	－	－	－	－	－	－
H23-04	西竹田遺跡	第４次調査	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
H23-05	保津・宮古遺跡	第39次調査	－	2	26	7	－	1	－	－	3	5	－	50	－
H23-06	唐古・鍵遺跡	第111次調査	8	12	2	2,997	－	11	－	2	4	51	102	1	7
H23-07	千代遺跡	第８次調査	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
H23-08	唐古・鍵遺跡	第112次調査	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－
H23-09	富本遺跡	第２次調査	1	－	1	－	－	－	－	－	1	3	－	－	－
H23-10	十六面・薬王寺遺跡	第28次調査	－	－	2	6	－	－	－	－	3	－	－	2	－
S-201102	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	1	2	－	5	－	－	－	－	1	3	－	－	－
R-201127	唐古・鍵遺跡	立会調査	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
R-201142	多遺跡	立会調査	－	3	－	50	－	－	－	－	－	－	7	－	－

※少量遺物は、複数次数あるいは複数遺跡をまとめて分別収納しているため、コンテナ量で表すことができないので、有（○）無（－）で示した。また、数量は点数である。

【Pickupした土器・形象埴輪類の数量（該当次数のみ）】

調査番号	遺跡名	調査次数	編年土器	搬入土器	絵画土器	記号土器	文様土器	特殊土器	縄文土器	古墳時代土器	古代土器	中世土器	近世土器	形象埴輪
H23-01	十六面・薬王寺遺跡	第27次調査	－	2	－	1	1	3	－	－	－	－	－	－
H23-02	唐古・鍵遺跡	第109次調査	－	1	1	－	－	13	－	－	－	－	－	－
H23-05	保津・宮古遺跡	第39次調査	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	1
H23-06	唐古・鍵遺跡	第111次調査	－	15	3	－	6	9	－	－	－	－	－	9
H23-10	十六面・薬王寺遺跡	第28次調査	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－
S-20110 2	十六面・薬王寺遺跡	試掘調査	－	－	－	－	－	－	7	－	－	－	－	－

【再整理事業に伴いPickupした遺物数量（該当次数のみ）】

遺跡名	調査次数	編年土器	搬入土器	絵画土器	記号土器	文様土器	特殊土器	縄文土器	古墳時代土器	古代土器	中世土器	近世土器	形象埴輪	土製品	焼土塊
唐古・鍵遺跡	第23次調査	9	76	8	8	28	82	－	－	－	－	－	－	60	15
	第24次調査	1	34	5	9	18	41	－	－	1	－	－	1	18	9
	第25次調査	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－
	第26次調査	6	41	4	3	37	89	3	－	－	12	－	1	29	77
	第27次調査	4	4	－	－	1	4	－	2	3	－	－	－	1	－
	第28次調査	－	2	－	－	4	1	－	－	－	－	－	－	－	－
	第29次調査	1	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	3	1
	第30次調査	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	第32次調査	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－
	第33次調査	30	179	13	44	49	116	2	－	－	－	－	－	80	259

【保存処理をおこなった木製品】

遺跡名	調査次数	製品コード	製品名	樹種	保存処理機関	保存処理方法
唐古・鍵遺跡	第58次	KRK－058－00020W	柱	不明	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00001W	膨柄横斧柄	サカキ	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00009W	木錘	コナラ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00010W	木錘	広葉樹	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00013W	木錘	広葉樹	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00014W	木錘	コナラ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00016W	木錘	コナラ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00018W	木錘	広葉樹	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00019W	木錘	広葉樹	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00020W	木錘	コナラ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00021W	木錘	コナラ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00043W	蓋未成品	エノキ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第74次	KRK－074－00044W	蓋未成品	ケヤキ	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第91次	KRK－091－00033W	高杯	ケヤキ	吉田生物研究所	高級アルコール法
唐古・鍵遺跡	第96次	KRK－096－00003W	不明建築材	コナラ属	吉田生物研究所	高級アルコール法
保津環濠遺跡	第２次	HTK－002－10001W	板A		町直営	ラクチトール含浸法
大網遺跡	立会	OAM－R－201027－00001W	鍬手		町直営	ラクチトール含浸法

（2）図面・写真の保管と資料撮影、写真のデジタル化

発掘調査に伴う現場写真と図面については、下表のとおりである。また、写真撮影とデジタル化は唐古・鍵考古学ミュージアムの企画展と町指定文化財に伴うものが大半を占めた。

【図面・写真の保管数量】

調査番号	遺跡名	調査次数	図面		35mm			
					カラーポジ		モノクロネガ	
			現場	遺物	シート数	コマ数	シート数	コマ数
H23-01	十六面・薬王寺遺跡	第27次調査	22	0	8	157	5	157
H23-02	唐古・鍵遺跡	第109次調査	9	0	9	179	5	169
H23-03	唐古・鍵遺跡	第110次調査	3	0	2	36	1	37
H23-04	西竹田遺跡	第４次調査	13	1	5	93	3	93
H23-05	保津・宮古遺跡	第39次調査	17	0	11	213	7	218
H23-06	唐古・鍵遺跡	第111次調査	19	0	13	260	8	260
H23-07	千代遺跡	第８次調査	3	0	2	28	1	28
H23-08	唐古・鍵遺跡	第112次調査	6	0	4	70	2	70
H23-09	富本遺跡	第２次調査	3	0	1	12	1	14
H23-10	十六面・薬王寺遺跡	第28次調査	16	0	10	183	5	181
計			95	1	65	1,231	38	1,227

【写真撮影一覧】

種類	資料名・内容	フィルム（４×５）	カット数	備考
考古遺物	唐古・鍵遺跡ほか　銅鐸形土製品	カラーポジ	34	秋季企画展「弥生エッセンス」
	唐古・鍵遺跡　絵画土器ほか	カラーポジ	18	春季企画展「村を守る」
	唐古・鍵遺跡　木製品	モノクロネガ	9	保存処理用
古文書	小林家文書　文禄検地帳ほか	カラーポジ	71	町指定文化財
計		カラーポジ モノクロネガ	123 9	

（３）図書の受領

平成23年度は、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムに関係諸機関・個人（280機関等）から1,046冊の図書の寄贈を受けた。また、図書の購入は12冊である。

【受領図書】

分　類	報告書	概　報	現説資料	年　報	館　報	図　録	パンフレット	紀　要	会　報
冊　数	482（2）	67	5	60	18	56	48	53	1

分　類	論文集	たより	発表資料	単行本	雑　誌	目　録	その他	合　計
冊　数	6	69	7	7	9	3	45（5）	936

※上記冊数には、２部以上の寄贈110冊を含んでいない。※（　）の数字は、CD-ROM３枚、DVD４枚の枚数である。

（４）資料の寄贈

平成23年度は、下記資料453件について寄贈の申込があり、受贈した。

【受贈資料】

資料名	登録番号	点数	寄贈者	備考
軒端飾瓦	AAA-000-00001FE ～00019FE	19点	福岡 洋介	
土師器小皿		２点	高取 正博	唐古池より採集
弥生土器・土師器・須恵器・泥塔・石器・軒丸瓦		432点	廣川 文人	県内各所より採集

福岡洋介氏より、主に旧田原本町内の建造物に使われていた軒端飾瓦の寄贈を受けた。その内訳は、鬼瓦14点・鳥衾瓦３点・軒丸瓦２点の計19点である。時期はいずれも近世とみられる。うち４点については、19世紀中頃の瓦職人「富吉」の作である可能性が考えられる。

高取正博氏からは、土師器小皿２点の寄贈を受けた。時期はいずれも江戸時代とみられる。

廣川文人氏からは、弥生土器をはじめ多数の寄贈を受けた。その内訳は、弥生土器11点・古墳時代土師器５点・同須恵器６点・古代須恵器２点・中世土師器５点・同泥塔５点・弥生時代石器370点・近世石器27点・古代軒丸瓦１点の計432点である。唐古・鍵遺跡のものと推定される資料が多いが、本町大字宮古の常楽寺跡より出土したとみられる泥塔は特筆される。

これら寄贈品については文化財保存課において管理し、保存・活用していく予定である。

福岡 洋介 氏　寄贈　軒端飾瓦

廣川 文人氏　寄贈　泥塔

2．遺跡・文化財の保護

（1）町指定文化財

平成23年度において、前年度に新規指定した寶陀山補巌禅寺納帳を、春季企画展において一般公開した。また、指定候補の小林家文書について撮影と目録作成をおこなった。

【田原本町文化財保護審議会　委員】

分　野	氏　名	備　考
建　築	林 清三郎	委員長
考古学	石野 博信	

分　野	氏　名	備　考
考古学	寺澤　薫	
歴　史	和田　萃	

分　野	氏　名	備　考
歴　史	谷山 正道	
彫　刻	鈴木 喜博	

【町指定文化財一覧】

台帳番号	種　別	名称及び員数	所有者	時　代	指定年月日
1	有形文化財（考古資料）	「楼閣」が描かれた土器片　3点 唐古・鍵遺跡第47・77次調査出土	田原本町	弥生時代（中期）	平成20年3月24日
2	有形文化財（考古資料）	翡翠製勾玉と鳴石容器（蓋付）一式 唐古・鍵遺跡第80次調査出土 1．翡翠製勾玉　2点 1．鳴石容器　1点 1．容器蓋（土器甕片）1点	田原本町	弥生時代（中期）	
3	有形文化財（彫刻）	木造十一面観音立像　一軀	法貴寺自治会	室町時代 （天文10年／1541年）	
4	有形文化財（古文書）	平野権平（長泰）宛豊臣秀吉感状 1．平野権平宛羽柴秀吉判物 （天正十一年六月五日）折紙1通 2．平野権平宛豊臣秀吉朱印状 （文禄四年八月十七日）折紙1通 附　収納箱 内箱・外箱　包紙（2は2枚有り）	福岡洋介	1．安土桃山時代 （天正11年／1583年） 2．安土桃山時代 （文禄4年／1595年）	平成20年12月17日
5	有形文化財（古文書）	寶陀山補巌禅寺納帳 1．寶陀山補巌禅寺納帳 その1 2．寶陀山補巌禅寺納帳 その2 3．寶陀山補巌禅寺納帳 その3 4．寶陀山補巌禅寺納帳 その4 附　補巌禅寺開山支派	補巌寺	1．室町時代 （明応7年／1498年） 2．室町時代 （大永末年頃） 3．室町時代 （永禄末年頃） 4．室町時代 （元亀3年／1572年） 附　江戸時代	平成22年12月22日

3．講座

成人向けの講座として、考古学実践講座の講演を２回開催した。また、小中学生向けの体験講座を夏に開催した。

考古学実践講座では大和の弥生集落研究最前線と題し、県内の弥生時代に営まれた遺跡に関連する最新情報や新知見について、各講師を招いて講演をおこなった。チャレンジ子ども弥生探検隊では、高麗石をサンドペーパーで加工する勾玉づくり体験を実施した。

【考古学実践講座】

実施日	内容		講師	受講者数
10月15日（土）	大和の弥生集落研究最前線	ヤマト周縁の弥生文化 ―吉野川流域―	五條市教育委員会 前坂　尚志 氏	41名
12月17日（土）		南葛城の低地の集落と 高地性集落	御所市教育委員会 木許　守 氏	57名
２日間	２講演			98名

【チャレンジ子ども弥生探検隊】

実施日	内容		会場	参加者数
８月24日（水）	体験講座	勾玉をつくろう	陶芸室・工作室	親子97名

前坂　尚志 氏　講演

木許　守 氏　講演

勾玉をつくろう①

勾玉をつくろう②

4．学校教育等への支援

（1）小学校出前授業・教材貸出

町内小学校から依頼を受け、総合的学習の時間及び社会科等の授業として、以下内容の出前授業をおこなった。これらの児童の作品や学習成果は、２月に開催した「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」にて公開し、306名が観覧した。

【出前授業】

実　施　日	学校・学年	児　童　数	内　　容
4月26日（火）	北小学校　6年	1クラス（33名）	ミュージアム見学
5月23日（月）			勾玉づくり
6月3日（金）			火熾し・赤米炊飯
10月3日（月）			土器づくり
1月20日（金）			土器の野焼き
6月30日（木）	**東小学校　6年**	**1クラス（23名）**	火熾し・赤米炊飯
9月6日（火）			土器づくり
10月4日（火）			土器の野焼き
11月24日（木）			勾玉づくり
9月30日（金）	**南小学校　6年**	**3クラス（69名）**	土器づくり
11月10日（木）			土器の野焼き・火熾し
6月17日（金）	**平野小学校　6年**	**2クラス（47名）**	土器づくり
10月21日（金）			土器の野焼き・火熾し・赤米炊飯
4月14日（木）	田原本小学校　6年	5クラス（125名）	ミュージアム見学
5月31日（火）			**火熾し・赤米炊飯**
6月8・9日（水・木）			土器づくり
7月8日（金）			土器の野焼き
18日間	12クラス（延べ1,114名）		**メニュー延べ23**

小学校出前授業（北小学校）

小学校出前授業（平野小学校）

（２）中学校職場体験学習

中学生の職場体験学習として、田原本中学校・北中学校の生徒を受け入れ、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムで体験学習を実施した。

【体験学習】

期　　間	学　校　名	内　　容	人　数
11月８・９・10日	北中学校	土器洗浄・遺物選別・石器の整理・土器拓本・ミュージアム受付	４名
11月15・16・17日	田原本中学校		４名
６日間	２学校	延べ10メニュー	延べ24名

（３）大学の学外授業

奈良大学の通信教育の課外授業として、４回受け入れ、下記内容の授業をおこなった。

【学外授業】

実　施　日	内　　容	人　数
７月17日（日）	奈良大学　通信教育課程「文化財学購読Ⅱ」 唐古・鍵遺跡の現地説明 唐古・鍵考古学ミュージアムの概要説明・展示品解説	115名
８月27日（土）		46名
２月11日（土）		37名
３月10日（土）		38名
４日間		計236名

中学校職場体験学習（北中学校）

奈良大学通信教育

（4）講師の派遣

前記以外に、教育委員会等の事業として下記のとおり職員を派遣した。

実施日	講座名等	演題	講師
平成23年 7月14日（木）	歴史教養研修　香芝市教頭会	弥生文化と唐古・鍵遺跡	藤田
平成24年 2月12日（日）	特別陳列「末永雅雄―末永考古学の軌跡―」研究講座 橿原考古学研究所附属博物館	末永雅雄と唐古遺跡の調査	藤田

（5）技能講習の受入

公益社団法人奈良県シルバー人材センター協会から文化財保存管理（遺跡発掘等）講習について協力依頼があり、受託した。これは、55歳以上の高齢求職者等を対象に就職・就業の機会が得られるように技能講習を実施するもので、当文化財保存課では、下記のカリキュラムにより年2回、各5名を受入、実施した。

具体的な内容としては、唐古・鍵遺跡の出土品の洗浄等作業の講習、唐古・鍵遺跡第109次・111次の発掘調査の現地講習を実施した。

【講習内容一覧】

日程		時間	講習内容	会場
6月27日（月）	11月28日（月）	10：00～10：30	開講式・オリエンテーション	田原本町文化財保存課事務所
		10：30～12：00	（講義）遺跡の発掘調査と整理	
		13：00～16：00	（講義）遺跡の発掘調査と整理	
6月28日（火）	11月29日（火）	10：00～12：00	（見学）唐古・鍵考古学ミュージアム	田原本青垣生涯学習センター 唐古・鍵遺跡
		13：00～16：00	（見学）唐古・鍵遺跡の調査現場	
6月29日（水）	11月30日（火）	10：00～12：00	（実習）出土品整理作業体験	田原本町文化財保存課事務所
		13：00～16：00	（実習）出土品整理作業体験	
6月30日（木）	12月1日（木）	10：00～12：00	（実習）出土品整理作業体験	田原本町文化財保存課事務所
		13：00～16：00	（実習）出土品整理作業体験	
7月1日（金）	12月2日（金）	10：00～12：00	（実習）出土品整理作業体験	田原本町文化財保存課事務所
		13：00～16：00	（実習）出土品整理作業体験	
7月4日（月）	12月5日（月）	10：00～12：00	（実習）遺跡発掘作業体験	唐古・鍵遺跡　現場
		13：00～16：00	（実習）遺跡発掘作業体験	
7月5日（火）	12月6日（火）	10：00～12：00	（実習）遺跡発掘作業体験	唐古・鍵遺跡　現場
		13：00～16：00	（実習）遺跡発掘作業体験	
7月6日（水）	12月7日（水）	10：00～12：00	（実習）出土品整理作業体験	田原本町文化財保存課事務所
		13：00～16：00	アンケート・終了式・職業相談	

出土品整理作業

発掘作業

5．刊行物一覧

本年度は、下記３点の書物を印刷した。

【刊行物名】

書　　籍　　名	発行日	部　数	内　　容
唐古・鍵考古学ミュージアム 春季企画展図録『消えた古墳』	2010年４月	2,500部	奈良盆地の開平された古墳をとりあげ、その推移と性格を探る。
唐古・鍵考古学ミュージアム 秋季企画展図録『弥生エッセンス』	2010年10月	2,500部	ヤマト地域で展開された華やかな弥生文化を、遺物を通して紹介。
『田原本町文化財調査年報20　2010年度』	2011年３月	700部	平成22年度の文化財事業の報告。

6．資料の活用

（1）資料の貸出

平成23年度は、13機関に延べ20遺跡381点の遺物等を貸出した。貸出内容は、唐古・鍵遺跡の出土品が大半である。また、田原本町立南小学校へ児童の教材用に保津・宮古遺跡出土の縄文土器を貸出した。

【資料貸出一覧】

貸出先／展覧会名／期間	遺　跡　名	資　　料　　名	点数
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『弥生の里～くらしといのり～』 平成23年４月５日～６月21日	唐古・鍵遺跡	銅鐸形土製品４・石棒１・小型臼２・竪杵１・男根状木製品１・卜骨２・加工痕のある鹿角１・切断痕のある骨１・イヌ骨５・イノシシ骨47・イノシシ？骨１・イノシシまたはシカ骨４・ウサギ骨１・エイ骨１・エイ尾棘１・カエル骨１・カモ骨２・ギギ鰭３・キジ骨１・キジ？骨１・クジラ１・クマまたはネズミ骨１・コイ属骨１・コウノトリ骨１・サンショウウオ？骨２・シカ骨３・シカ？骨10・スッポン骨３・タヌキ骨１・タヌキ？骨２・フグミ骨１・ナマズ骨１・ネズミ骨４・ネズミ？骨１・フクロウ骨１・フナ骨１・ヘビ骨３・ムササビ骨２・モグラ骨１・ワタカ骨１・鳥嘴１・アカニシ１・カワニナ１・シジミ１・マツカサ貝１・種子26・炭化米１・炭化籾１・穂束１・褐鉄鉱容器（レプリカ）１・翡翠製勾玉（レプリカ）２・褐鉄鉱容器蓋（レプリカ）１・復顔模型１	161点
兵庫県立博物館／『きのうつわ　六千年の技』 平成23年４月13日～６月29日	唐古・鍵遺跡	合子１・合子蓋１・木製四脚容器１・耳付高杯１・鳥形容器１・合子（復元品）１・合子蓋（復元品）１・柱状片刃石斧（復元品）１・柱状片刃石斧柄（復元品）１・ヤリガンナ（復元品）１	10点
大阪府立近つ飛鳥博物館／『倭人と文字の出会い―有銘刀剣の語る文字と王権―』 平成23年４月13日～６月29日	唐古・鍵遺跡	絵画土器２・記号土器４・弧帯文土器２	15点
	清水風遺跡	絵画土器７	
出雲弥生の森博物館／『弥生人の姿～倭人伝の人々～』 平成23年７月５日～９月26日	唐古・鍵遺跡	人形土製品１	８点
	清水風遺跡	絵画土器７	
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『大和を掘る29―2010年度発掘調査速報展―』 平成23年７月６日～９月８日	保津・宮古遺跡	青磁小皿１・青磁碗１・土師器小皿９・瓦器塊９・土師質羽釜２	36点
	小阪畑長遺跡	古墳時代土器13・鳥形土器１	
奈良文化財研究所飛鳥資料館／『鋳造技術の考古学』 平成23年７月22日～９月16日	唐古・鍵遺跡	石製銅鐸鋳型１・土製銅鐸鋳型外枠２・土製武器鋳型外枠５・土製不明鋳型外枠１・高坏形土製品６・送風管５・鋼塊１・銅鐸片１・鋳造用砥石１・土製銅鐸鋳型（復元品）１・高坏形土製品（復元品）１・送風管（復元品）２・鋳造残滓１	28点

香芝市二上山博物館／『サヌカイト―元始の鉄―』 平成23年９月６日～12月12日	唐古・鍵遺跡	石鏃10・石錐５・石匙１・スクレイパー10・石小刀４・尖頭器４・打製石剣８・サヌカイト原石５	47点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・中国陝西歴史博物館／『日本考古展―古都奈良考古文物精華展―』 平成23年９月29日～12月27日	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた絵画土器（レプリカ）１・卜骨１・翡翠製勾玉２・掲鉄鉱容器（レプリカ）１	５点
桜井市教育委員会／『ヤマトの王と居館』 平成23年９月29日～12月６日	唐古・鍵遺跡	絵画土器１・絵画土器（レプリカ）４・石鋼１	７点
	清水風遺跡	絵画土器１	
尾崎市立田能資料館／『土器の一生―弥生時代の日常の道具―』 平成23年10月19日～12月６日	唐古・鍵遺跡	弥生時代土器１・タタキ板１	２点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『十二支の考古学―辰―』 平成23年11月30日～平成24年１月20日	唐古・鍵遺跡	絵画土器１・記号土器２	３点
下関市立考古博物館／弥生時代の拠点集落―その構造と機能―』 平成24年１月24日～３月21日	唐古・鍵遺跡	絵画土器１・打製石剣２・石庖丁３・太型蛤刃石斧１・柱状片刃石斧１・扁平片刃石斧２・砥石２・管玉未成品１・銅鐸形土製品１・細形銅矛転用鑿１・石製銅鐸鋳型２・土製銅鐸鋳型外枠１・送風管１・糸巻具１・卜骨１	21点
奈良県立美術館／「やまとの地宝―遺物が語る奈良の歴史―」 平成24年１月24日～３月23日	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた絵画土器（レプリカ）１・翡翠製勾玉２・掲鉄鉱容器１・掲鉄鉱容器蓋１・卜骨１	６点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『末永雅雄―末永考古学の軌跡―』 平成24年１月25日～３月28日	－	末永雅雄氏遺愛のカメラ１	１点
島根県立古代出雲歴史博物館／「弥生青銅器に魅せられた人々　その製作技術と祭祀の世界」 平成24年２月22日～５月25日	唐古・鍵遺跡	土製銅鐸鋳型外枠２・土製武器鋳型外枠３・高坏形土製品４・送風管７・鋳造用砥石４・銅鐸片１・真土・鉱滓３・銅塊１・銅滴１	26点
田原本町立南小学校／教材用 平成23年４月19日～４月27日	保津・宮古遺跡	縄文土器５	５点
13機関／延べ会期期間日数　1,097日	延べ20遺跡		381点

【種別による貸出点数】

土器	埴輪	土製品 焼土	石器	木器	金属器	骨角器	ガラス	骨・貝	種・穀物	レプリカ 模型	その他	総点数
69点	０点	46点	74点	11点	６点	８点	０点	113点	29点	24点	１点	381点

【資料の継続貸出】

貸出先／展示名／期間	遺跡名	資料名	点数
香芝市二上山博物館　常設展示 【貸出期間】平成23年４月１日～平成24年３月31日	唐古・鍵遺跡	弥生土器壺・甕・ 高坏・槍先形石器	５点
大阪府立弥生文化博物館　常設展示 【貸出期間】平成23年４月１日～平成24年３月31日	唐古・鍵遺跡	土弾	２点
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　常設展示 【貸出期間】平成23年４月１日～平成24年３月31日	唐古・鍵遺跡	石製銅鐸鋳型・土製銅鐸鋳型外枠・土製武器鋳型外枠・土製不明鋳型外枠・高坏形土製品・送風管	13点
３件	延べ３遺跡		19点

（２）写真掲載・撮影

写真の貸出及び掲載（転載含む）は43件219点であった。写真掲載の内容は、唐古・鍵遺跡の出土遺物や復元楼閣の利用度が高い。

【写真掲載・撮影一覧】

貸出先	掲載書籍	名称（遺跡名）	資料名	点数
㈱エヌ・アイ・ブランニング	タウン情報誌『ぱーぷる』	唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアムエントランス	1
東京法令出版㈱	『アクティブ社会』中学生向け学習塾用教材	唐古・鍵遺跡	石庖丁	1
㈱洋泉社	歴史REAL　vol.3　ムックスペシャル特集『邪馬台国論争再考（仮）』	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	1
出雲弥生の森博物館	図録『弥生人の姿―倭人伝の人々―』	唐古・鍵遺跡	絵画土器・人形土製品・機織りの風景模型・盾と戈を持つ人物模型・鳥装のシャーマン模型	6
		清水風遺跡	絵画土器	
㈲アート・エフ	『2012センター過去問題集日本史Ｂ』	笹鉾山２号墳	馬形埴輪	1 （転載）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館	図録『鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物師のわざ―』	唐古・鍵遺跡	炉跡状遺構・土製鋳型の構造図・復元鋳型と鋳放し銅鐸・鋳造実験に使った道具・鋳造実験に使った炉・銅鐸鋳型製作風景・鋳造実験風景・青銅器鋳造関連遺物	13 （転載1）

地域情報ネットワーク㈱	「月刊大和路　ならら」平成23年7月号	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片・大型建物の柱・様々な土器の文様・弥生時代中期土器集合・壺の変遷・石製銅鐸鋳型と復元品・土製鋳型の構造図	13
		唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアムエントランス・マツリを再現した模型	
奈良県立橿原考古学研究所	図録『日本考古展―古都奈良考古文物精華展』	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片・卜骨・翡翠製勾玉・褐鉄鉱容器	4
㈱PHP研究所	『図解　邪馬台国の謎を解く』（電子版）	唐古・鍵遺跡	褐鉄鉱容器	1（転載）
香芝市二上山博物館	図録『サヌカイト―元始の鉄―』	唐古・鍵遺跡	打製石器・サヌカイト原石・集積されたサヌカイト原石出土状況	3
㈱増進堂受験研究社	学習用問題集『小学社会　日本歴史まとめノート』	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	2
			体験学習風景	
鈴鹿市	図録『河曲の考古学―各地との交流―』	唐古・鍵遺跡	男根状木製品	1
桜井市教育委員会	図録『ヤマトの王と居館』	唐古・鍵遺跡	区画溝・楼閣が描かれた土器片・石鋤・唐古・鍵遺跡変遷図	6
		清水風遺跡	絵画土器	
尼崎市教育委員会	図録『土器の一生―弥生時代の日常の道具―』	唐古・鍵遺跡	雑穀を炊いた壺・タタキ板	2
Ellen Jane Oksbjerg	「Religious Imagery of Middle Yayoi Settlements」	唐古・鍵遺跡	絵画土器	61
		清水風遺跡	絵画土器	
		八尾九原遺跡	絵画土器	
		羽子田遺跡	絵画土器	
下関市立考古博物館	図録『弥生時代の拠点集落―その構造と機能―』	唐古・鍵遺跡	唐古・鍵遺跡変遷図・木器貯蔵穴・大型建物跡・井跡状遺構・サヌカイト片廃棄坑・木戈出土状況・磨製石器類集合・絵画土器・銅鐸形土製品・細形銅矛転用鑿・木庖丁・糸巻具・石戈柄・木製盾・打製石剣・砥石・管玉未成品・石製銅鐸鋳型・土製鋳型外枠・送風管・卜骨集合	27
糸島市立伊都国歴史博物館	図録『邪馬台国を支えた国々』	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	1

國學院大學伝統文化リサーチセンター	『まつりの継承』	唐古・鍵遺跡	刈りとられた穂束と稲穂	1
㈱吉川弘文館	『秦　河勝』（人物叢書267）	秦楽寺	秦河勝像	1
㈱帝国書院	『アドバンス中学校歴史資料』	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	1
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	図録『十二支の考古学―辰―』	唐古・鍵遺跡	絵画土器	2
日本文教出版㈱	『中学社会歴史的分野　教師用指導書』添付CD-ROM　指導用デジタル教科書（平成24～27年度使用予定）	唐古・鍵遺跡	絵画土器	1 （転載）
㈱新人物往来社	月刊『歴史読本』２月号	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	2
㈱秀学社	『中学社会　研究ノート歴史』	唐古・鍵遺跡	絵画土器	1 （転載）
㈱風詠社	『銅鐸絵画　雷神の光り輝く日々』	唐古・鍵遺跡	土器絵画実測図	2
島根県立古代出雲歴史博物館	図録『弥生青銅器に魅せられた人々』	唐古・鍵遺跡	様々な青銅製品集合・銅鐸片・鋳造砥石集合・土製銅鐸鋳型外枠集合・土製武器鋳型外枠集合・高坏形土製品集合・送風管集合・青銅器鋳造関連遺物	8
尼崎市教育委員会	図録『高坏～食べ物を盛る器～』	唐古・鍵遺跡	耳付高杯	1
中西秀和	『街並保存と活用について』		新町　竹村邸写真	15
東京書籍㈱	平成24年度中学校デジタル教科書『新しい社会　歴史』	唐古・鍵遺跡	弥生土器	2 （転載）
奈良県立橿原考古学研究所	図録『やまとの地宝―遺物が語る奈良の歴史』	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片・卜骨・翡翠製勾玉・褐鉄鉱容器・褐鉄鉱容器蓋	7 （転載）
奈良県立橿原考古学研究所	『青陵』第133号		戸田秀典氏	2
㈱新泉社	石野博信討論集『吉野ヶ里遺跡と纒向遺跡』	唐古・鍵遺跡	翡翠製勾玉を納めた褐鉄鉱容器	1 （転載）
奈良県立橿原考古学研究所	図録『末永雅雄―末永考古学の軌跡―』		末永雅雄氏愛用のカメラ	1

東京書籍㈱	教科書『新選日本史Ｂ』高等教育用	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片・平鍬・大型臼・弥生土器・石庖丁・復元楼閣・航空写真	9（転載）
東京書籍㈱	『新しい社会　歴史』教師用指導書　評価問題編	唐古・鍵遺跡	弥生土器	1（転載）
㈱風詠社	『雷神ノート　雷神の光り輝く』	唐古・鍵遺跡	土器絵画実測図	2
		清水風遺跡	土器絵画実測図	
奈良交通㈱	奈良検定体験プログラム・HP掲載	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	1
実教出版㈱	『日本史Ｂ』	唐古・鍵遺跡	弥生土器集合	1（転載）
石橋源一郎	『歴史地理教育』７月増刊号	唐古・鍵遺跡	絵画土器	3
		唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアムエントランス・マツリを再現した模型	
広狩拓也	近鉄HP「K's PLAZA」掲載	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	1（転載）
田原本町文化団体連絡協議会	文化祭参加賞		楼閣くんキャラクター	1
田原本町観光協会	観光ボランティアガイド案内・説明用パネル	千万院	十一面観音立像	7
		宮古薬師堂	木造薬師如来坐像	
		多遺跡	有舌尖頭器	
		笹鉾山古墳	馬形・馬曳き人物埴輪・航空写真	
		黒田大塚古墳	蓋形埴輪・航空写真	
㈱テーク・ワン	K-CAT eo光テレビ「街角トレジャーハンター」田原本町紹介VTR	唐古・鍵考古学ミュージアム	館内展示風景	1
43件		延べ56遺跡等		219点

（3）資料調査

本町所有・保管遺物について、下記の者による資料調査があった。

【資料調査】

調　査　日	調　査　者	資　料　名
4月27日（水）	出雲弥生の森博物館　須賀照隆	唐古・鍵遺跡　人形土製品
5月6日（金）	澤澤芳樹	唐古・鍵遺跡　鞘入り石剣
5月20日（金）	國學院大学　柳田康雄（他学生3名）	唐古・鍵遺跡　矛形石製品・銅鐸形土製品・石戈柄・絵画土器（銅戈）・銅矛転用盤
8月8日（月）	春成秀爾	唐古・鍵遺跡　弧帯文土器
9月16日（金）	小松市教育委員会　4名	唐古・鍵遺跡　大型臼
9月22日（木）	香川市埋蔵文化センター　信里芳紀	唐古・鍵遺跡　土製武器鋳型外枠・銅鏃・弥生時代前期壺
10月25日（火）	龍谷大学　泉森皎（他学生2名）	唐古・鍵遺跡　絵画土器・石器・木器・獣骨・種子
11月9日（水）	藤沢市教育委員会　斎藤あや	秦楽寺遺跡　玉類・砥石

7．ボランティア組織

（1）ボランティア組織の概要

唐古・鍵遺跡を総合的に支援する任意ボランティア組織として、平成16年4月10日、「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」（愛称：唐古・鍵支援隊）が設立された。今年度の会員は、44名である。

主な活動は、唐古・鍵考古学ミュージアムの展示説明ガイドや小学校の総合的学習の支援や子ども会等を対象として考古学体験、ミュージアムへの勧誘活動、文化財保存課〈ミュージアム〉主催事業への支援等がある。活動については、4月の総会を経て、月例の運営委員会で検討され実施されている。また、「ものづくり教室」の部会を基本的に月2回おこない、新しい体験学習メニューの開発や体験学習教材の整備など、延べ26日221人が参加した。

唐古・鍵遺跡においては団体向けに現地ガイドを実施し、4日間で延べ208人に対応した。また、磯城郡が主催した参加者1,200名のウォークに際し、現地ガイドをおこなった。

また、唐古・鍵遺跡の清掃活動を実施し、遺跡の美化にも努めている。

今年度より、歴史・考古学の知識を深めるため「弥生勉強会」を開始した。本町文化財保存課の藤田をアドバイザーに迎え、天理市において平等坊・岩室遺跡を中心にウォーキングをおこない、遺跡の現地見学を実施した。この弥生勉強会については会員のみではなく、一般からの参加者も募っている。

【唐古・鍵支援隊の支援活動】

活　動　日	内　容	主　催	支援内容	活動人数
4月16日・5月7日・10月26日 11月13日・　計4日間	春季企画展 報告会・講演会・秋季企画展講演会・ガイド研修会	文化財保存課	受付	7人
10月15日・12月17日　計2日間	考古学実践講座			5人
8月24日	チャレンジ子ども弥生探検隊 （勾玉をつくろう）		支援	9人
4月14日・4月26日・5月23日・ 5月31日・6月3日・6月8日・ 6月9日・6月17日・6月30日・ 7月8日・9月6日・9月30日・ 10月3日・10月4日・10月21日・ 11月10日・11月24日・1月20日 計18日間	総合的学習（土器づくり・野焼き・火熾し・炊飯・脱穀・勾玉づくり）	北小学校 平野小学校 田原本小学校 東小学校 南小学校	支援	121人
2月10～15日　計5日間	田原本町内小学校の総合的な学習展示会	文化財保存課 支援隊 町内5小学校	受付 支援	24人
11月5日	文化祭（スタンプづくり）	生涯教育課	支援	10人
1月21日	親子ふれあい教室「はにわづくり」			6人
延べ32日		14団体		182人

Ⅲ．唐古・鍵考古学ミュージアム

１．常設展示

（１）田原本ギャラリー　今回の逸品

第３室の展示内容を一部変更し、新たに「田原本ギャラリー」のコーナーを設けた。田原本町内の遺跡から出土した埋蔵文化財や、古文書等の有形文化財を不定期に入れ替えながら展示公開するものである。また、解説パネルを併置し、展示品の特徴や意義などを説明している。

第１回は平成24年の干支が辰であることから、「龍を描いた弥生土器」と題し、龍が描かれた広口壺を展示した。

龍は中国に起源をもち、日本文化の中にも定着した空想上の生き物である。日本で確認できる最古の龍には、弥生時代後期の北部九州に伝播した中国・後漢時代の鏡に描かれている精緻な龍があげられる。また、近畿地方では倭人自らが弥生土器に描いた龍が存在しており、今回の展示品もそのような龍のひとつである。

この龍は弥生時代後期後半の広口壺に描かれた絵画である。壺には煮沸による煤の付着がみられることから、日常生活に使われた一般的な土器と思われる。絵画としては、池上曽根遺跡（大阪府和泉市・泉大津市）の長頸壺に描かれた龍のように写実的ではなく、退化した描き方をしており、Ｓ字状の胴部に鉤状の脚の表現がみられる。

唐古・鍵遺跡では、このような描き方の龍の他、記号や文様になった龍も多く確認されている。また、唐古・鍵遺跡を含め近畿地方中央部に、このような土器に描かれた龍が複数存在することから、弥生時代後期の倭人社会に龍神信仰が定着していた可能性が考えられる。

「龍を描いた弥生土器」の展示期間は、平成23年11月からである。

田原本ギャラリー　展示風景

【第１回「龍を描いた絵画土器」詳細】

器　種	広口壺
登録番号	MP－絵画－0120
出土遺跡	唐古・鍵遺跡
調査次数	第48次調査
法　量	器高 24.0cm
	胴幅 19.7cm
時　期	大和第Ⅵ－３様式

「龍を描いた弥生土器」

絵画部分

（2）展示内容の変更

常設展示において、一部の展示品を撤去するとともに未展示ケース（引き出しケース）に新たな展示品を追加し、展示内容の充実を図った。これらを加え、常設展示点数は968点になった。

撤去、及び入れ替え・追加した展示品は以下の通りである。

【常設展示品　撤去一覧】

展示室	コーナー	展示品名	遺跡名等	調査次数等	点数
第１室	まつりといのり	各地でみられる動物デザインの絵皿	（現代の品）	－	５点

【常設展示品　入れ替え・追加一覧】

展示室	コーナー	展示品名	遺跡名等	調査次数等	点数
第１室	まつりといのり	絵画土器（建物、梯子と鳥、建物とシカ、シカ、魚、スッポン）	唐古・鍵遺跡	第59・61・65・69・92次	６点
第２室	木器をつくる	木製品（穂摘具、匙、木鍬、木製盾、武器形木製品、用途不明品）	唐古・鍵遺跡	第19・23・33・61・65・78・90次	９点
	青銅器をつくる	青銅器鋳造関連遺物（土製銅鐸鋳型外枠、土製武器鋳型外枠、高坏形土製品、送風管）	唐古・鍵遺跡	第３・47・61・65次	10点

第１室　絵画土器

絵画土器（梯子と鳥）

第２室　木製品

第２室　青銅器鋳造関連遺物

２．企画展・ミニ展示

（１）春季企画展「消えた古墳」

内　容：４～６世紀、大和王権を支えた一部の豪族たちの墓は盆地中央の低地部に築かれたが、様々なかたちで消滅していった。これらの中小古墳にスポットを当て、その実態を探る展示をおこなった。また、新規町指定文化財となった「寶陀山補巌禅寺納帳」を同時に公開した。

期　間：４月16日（土）～５月22日（日）

入館者：490名（企画展のみ）

春季企画展チラシ

【展示構成と主要展示品】（展示総数128点）

（Ⅰ）弥生時代の墓域とその消滅（ケース④）
弥生土器・杭（阪手東遺跡）

（Ⅱ）田原本町の古墳（ケース④～⑩）
土師器・須恵器・渡来系土器・円筒埴輪・馬形埴輪・巫女形埴輪・木製埴輪・埴輪棺・木棺・木製品・石製品・金属製品（羽子田遺跡、小阪里中１号墳、笹鉾山２号墳、黒田大塚古墳ほか）

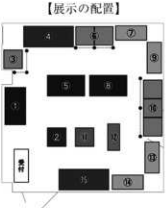
（Ⅲ）古墳の終焉と消えていく古墳（ケース②⑪～⑬）
須恵器・石製品・盾形埴輪・甲冑形埴輪・家形埴輪・人物埴輪・鳥形埴輪・鶏形埴輪・夾紵棺・八稜鏡（四条１号墳、猫塚１号墳、水晶塚古墳、牽牛子塚古墳ほか）

（Ⅴ）削られなかった古墳（ケース③）
須恵器大甕（笹鉾山１号墳）

（Ⅴ）発掘速報展・再整理事業（ケース⑭⑮）
弥生土器・絵画土器・搬入土器・庄内甕・土師器・瓦器・鳥形土器・羽釜・青磁・渡来系陶器・徳利・茶道具・蝋燭立？・燈火具？・灯明皿（保津環濠遺跡、唐古・鍵遺跡ほか）

（Ⅵ）新規町指定文化財（ケース①）
寶陀山補巌禅寺納帳・附 補巌禅寺開山支派（補巌寺）

【展示の配置】



展示風景

【借用遺物】

遺　跡　名（遺物名・点数）	点　数	所　蔵　者
平城京朝集殿下層（盾形埴輪１、蕨形埴輪１）／平城京東突出部（家形埴輪１）／市庭古墳（鳥形埴輪１）	4点	奈良文化財研究所
十六面・薬王寺遺跡（用途不明木製品１、木製鞍２、刀剣装具１、一本矢５、連歯下駄１、箱１）／四条７号墳（甲冑形埴輪１）／水晶塚古墳（須恵器坏身２、須恵器長頸壺１、須恵器平瓶１、灰釉陶器瓶１、八稜鏡１）	18点	奈良県立橿原考古学研究所
唐古・鍵遺跡（人形埴輪１）／四条１号墳（笠形埴輪１、人形埴輪１）／猫塚北１号墳（石釧１、車輪石１、石製合子１、管玉２、勾玉１）	9点	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
牽牛子塚古墳（夾紵棺１）	1点	明日香村教育委員会
補厳寺（實陀山補厳禅寺納帳４、附 補厳禅寺開山支派１）	5点	補厳寺
11遺跡等（26製品）	37点	5機関等

【田原本町保管遺物】

	遺　跡　名	遺　物　名	点　数
企画展	阪手東遺跡	広口長頸壺(1)、鉢(1)、弥生土器片(1)、杭(1)	4点
	唐古・鍵遺跡・唐古・鍵古墳群	陶質土器(1)、石釧(1)、巫女形埴輪(1)、人物埴輪(1)、笠形木製品(1)	5点
	羽子田遺跡・羽子田古墳群	土師器坏(1)、須恵器瓶(1)、木製容器(1)、箱(1)、円筒埴輪(2)、金環(2)	8点
	笹鉾山２号墳	笠形木製品(1)	1点
	黒田大塚古墳	鳥形木製品(1)	1点
	小阪里中１号墳	馬形埴輪(1)、巫女形埴輪(1)	2点
	保津・宮古遺跡	土師器短頸壺(1)、土師器坏(1)、土師器瓶(1)、須恵器瓶(1)、把手付坏(1)、管玉(7)、滑石製品(5)、埴輪棺(1)	18点
	十六面・薬王寺遺跡	弥生土器(壺1、甕2、高坏1、手焙形土器1)、弧帯文土器(1)、不明土製品(1)、竪櫛(1)、玉(6)、割竹形木棺(1)	15点
速報展	保津環濠遺跡	懸利(1)、湯呑(1)、茶瓶(1)、茶碗(1)、蝋燭立？(1)、燈火具(1)、灯明皿(1)	7点
	保津・宮古遺跡	土師器小皿(5)、瓦器塊(4)、羽釜(1)、青磁(1)	11点
	小阪細長遺跡	弥生土器(壺1、甕3、高坏3)、庄内甕(1)、鳥形土器(1)	9点
再整理	唐古・鍵遺跡 第19・20・22・51次調査 唐古・鍵４・８号墳	弥生土器(壺2、高坏2)、絵画土器(1)、搬入土器（瀬戸内系1、東海系1)、朝鮮製粉青沙器(1)、木晶玉(1)、分銅形土製品(1)	10点
13遺跡		61製品	91点

【関連イベント】

イベント名	内　　容	日 時 ・ 場 所	参加人数
報告会	清水　琢哉 （田原本町教育委員会事務局文化財保存課　調査係長） 「平成22年度の発掘調査成果」	4 月16日（土） 午後 2 時～ 3 時30分 公民館視聴覚室	35人
講演会	坂　靖 氏（橿原考古学研究所附属博物館　総括学芸員） 「倭屯倉と古墳」	5 月 7 日（日） 午後 1 時～ 4 時30分 公民館研修室	202人
	和田　萃 氏（京都教育大学　名誉教授） 「秦氏と田原本」		

展示風景

展示ケース①

展示ケース⑦

報告会（清水琢哉）

講演会（坂靖 氏）

講演会（和田萃 氏）

（２）秋季企画展「弥生エッセンス」

内　容：のちに大和王権が誕生することとなるヤマト地域で弥生時代の文化は華々しく発展し、個性ある地域性がみられるようになった。今回の展示では、県内の弥生遺跡やそれら遺跡から発掘された様々な遺物から、絢爛たるヤマトの弥生時代文化を紹介した。

期　間：10月15日（土）～11月20日（日）

入館者：564名（企画展のみ）

秋季企画展チラシ

【展示構成と主要展示品】（展示総数191点）

（Ⅰ）縄文から弥生時代の土器（ケース①③～⑤）
縄文晩期土器・弥生前期土器・大和型甕・芝型甕・四分型甕・流水文土器・波状文土器・水差形土器・井戸枠転用甕（曲川遺跡、前栽遺跡、四条シナノ遺跡、芝遺跡、原遺跡、平等坊・岩室遺跡など）

（Ⅱ）絵画・記号土器（ケース②⑥～⑧）
絵画土器・記号土器（法貴寺斎宮前遺跡、羽子田遺跡、平尾東遺跡、坪井・大福遺跡、中曽司遺跡など）

（Ⅲ）奈良に運ばれてきた土器（ケース⑨）
台形土器・搬入土器・円窓付土器（坪井・大福遺跡、坪井遺跡、平等坊・岩室遺跡、長寺遺跡、芝遺跡ほか）

（Ⅴ）工具と農具（ケース⑩～⑫）
石剣・石戈・石小刀・石鏃・石槌・石鍬・環状石斧・多頭石斧・石庖丁・石庖丁未成品・ミニチュア石庖丁・大型石庖丁・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・両刃石斧・太型蛤刃石斧（大福遺跡、唐古・鍵遺跡、纒向遺跡、鴨都波遺跡、和爾森本遺跡、中遺跡、坪井遺跡、芝遺跡など）

（Ⅴ）弥生人の装飾（ケース⑬）
管玉・勾玉・小玉・鹿角製柄・牙製腕輪・朱塗り鉢・擦石・石臼・広片口鉢（坪井・大福遺跡、唐古・鍵遺跡、平等坊・岩室遺跡、清水風遺跡、芝遺跡）

（Ⅵ）まつりに使われた土製品（ケース⑭）
銅鐸形土製品・舌形土製品・鳥形土製品・分銅形土製品（唐古・鍵遺跡、坪井・大福遺跡、芝遺跡、鴨都波遺跡、清水風遺跡、芝遺跡、大福遺跡、四分遺跡）

【展示の配置】

展示風景

【借用遺物】

遺　跡　名（遺物名・点数）	点　数	所　蔵　者
四分遺跡（絵画土器6、銅鐸形土製品2）	8点	奈良文化財研究所
四条シナノ遺跡（広口壺1）／坪井遺跡（水差形土器1、絵画土器1、搬入土器2、環状石斧1）／法貴寺斎宮前遺跡（絵画土器2）／芝遺跡（絵画土器1、記号土器1、円窓付土器1、石庖丁未成品1、柱状片刃石斧1、石臼1、搬石1、銅鐸形土製品2）／平尾東遺跡（絵画土器1）／坪井・大福遺跡（絵画土器2、記号土器4、台形土器1、管玉1、舌形土製品1、銅鐸形土製品1）／和爾森本遺跡（石剣1）／四条シナノ遺跡（石庖丁未成品2、石庖丁1）	32点	奈良県立橿原考古学研究所
大福遺跡（石鏃2、石剣1、大型石庖丁2、石庖丁未成品2、太型蛤刃石斧1、両刃石斧1、石錘1、銅鐸形土製品1）／坪井・大福遺跡（牙製腕輪1、鹿角製柄1）／清水風遺跡（絵画土器2、銅鐸形土製品3）／鴨都波遺跡（大型石庖丁1、石戈1）／唐古・鍵遺跡（打製石剣1）	21点	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
前栽遺跡（凸帯文深鉢1）／長寺遺跡（搬入土器1）／平等坊・岩室遺跡（絵画土器4、記号土器1、大形甕2、搬入土器1、石庖丁6、銅鐸形土製品1、牙製腕輪1、分銅形土製品2）	20点	天理市教育委員会
芝遺跡（絵画土器1、芝形甕1、銅鐸形土製品2）／吉備遺跡（記号土器2）／細向遺跡（石剣1）	7点	桜井市教育委員会
鴨都波遺跡（石剣2、大型石庖丁1、両刃石斧1、石小刀1、環状石斧1、銅鐸形土製品1）	7点	御所市教育委員会
原遺跡（細頸壺1、甕1）／中遺跡（石鏃5）	7点	五條市教育委員会
曲川遺跡（凸帯文深鉢1）／坪井・大福遺跡（流水文土器1）、坪井遺跡（絵画土器1、大型石庖丁1）／中曽司遺跡（絵画土器1）	5点	橿原市教育委員会
21遺跡等（70製品）	107点	8機関等

【田原本町保管遺物】

遺　跡　名	遺　　物　　名	点　数
唐古・鍵遺跡	縄文深鉢8、壺1、蓋1、長頸壺1、甕1、水差形土器1、大和型甕1、絵画土器10、円窓付土器2、朱塗鉢1、広片口鉢1、石剣3、石小刀2、石鏃5、環状石斧2、多頭石斧1、石庖丁1、石庖丁未成品2、ミニチュア石庖丁2、柱状片刃石斧4、扁平片刃石斧2、両刃石斧1、太型蛤刃石斧1、勾玉2、小玉1、銅鐸形土製品12、鳥形土製品3、分銅形土製品2	74点
羽子田遺跡	絵画土器1	1点
八尾九原遺跡	絵画土器2	2点
清水風遺跡	絵画土器5、台形土器1、搬石1	7点
4遺跡	33製品	84点

【関連イベント】

イベント名	内　　容	日 時 ・ 場 所	参加人数
講演会	深澤　芳樹 氏（奈良文化財研究所　部長） 「大和に花開いた中期弥生文化」	11月13日（日） 午後２時～３時30分 公民館研修室	34人

展示風景

展示ケース⑤

展示ケース⑧

展示ケース⑩

展示ケース⑭

講演会（深澤芳樹 氏）

（３）特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」

内　容：田原本町内の各小学校において、総合的な学習の時間を利用した土器づくりや赤米炊飯をはじめとする体験学習を実施している。今年度の学習成果である土器や勾玉をはじめ、児童らの感想文等を展示陳列した。

期　間：２月10日（金）～15日（水）

観覧者：306名（特別展示のみ）

特別展示チラシ

【展示構成と内容】（展示期間：５日間／展示点数427点）

（Ⅰ）北小学校
　土器・勾玉・感想文

（Ⅱ）平野小学校
　土器・感想文

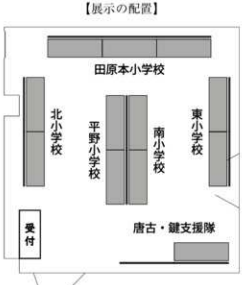
（Ⅲ）田原本小学校
　土器・感想文

（Ⅳ）南小学校
　土器・感想文

（Ⅴ）東小学校
　土器・勾玉・感想文

（Ⅵ）唐古・鍵支援隊
　体験学習感想文集・活動掲載新聞記事・火熾しの道具（火鑽杵・火鑽臼・着火材・火吹き竹）・土器炊飯の道具（炊飯用土器・五徳・木製匙）・脱穀の道具（竪杵・臼）・勾玉づくりの道具（高麗石・サンドペーパー・紐・タッパー・ボウル）

【展示の配置】



展示風景

3．入館者・ホームページ

（1）入館者数

平成23年度の入館者数は、8,899人である。前年度に比べると約１％増加した。

近年では観光ツアーや歴史ウォークのコースに組み込まれるケースが増え、当ミュージアムが奈良観光や歴史観光において存在感を大きくしていることが見受けられる。しかし、一般個人での来館者数が増加していることは、個々で歴史散策をする方々へも周知が広まっているといえるだろう。

月別の入館者数をみると、企画展の開催された４・５月と10・11月に集中していることがわかる。７・８月に微増がみられるのは、夏休みに伴う家族連れや勉強のために学生が来館するためであろう。

また、全体に対する団体の割合は、約20％で昨年度からあまり変動はない。

無料入館日の入館者は、５月５日（木・祝）のこどもの日（親子・保護者を対象）88名、関西文化の日の11月19日（土）181名・20日（日）321名の総計590名であった。

また11月21日には第35回（平成23年度）全国育樹祭で御来県中の皇太子徳仁親王殿下が唐古・鍵考古学ミュージアムを御視察され、本町教育委員会事務局 文化財保存課主幹の藤田三郎が館内を御説明した。

【年度別入館者推移】

年　度	開館日数	有料入館者		無料入館者				合　計	
		一　般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他		
16年度	103	1,744　(209)	131　(0)	1,345　(65)	42	251	1,083	4,596	(274)
17年度	306	4,988　(1,423)	401　(20)	3,060　(229)	174	357	3,040	12,020	(1,672)
18年度	306	2,962　(785)	911　(650)	3,138　(333)	105	233	3,879	11,228	(1,768)
19年度	306	3,760　(932)	483　(174)	2,933　(531)	102	186	4,963	12,427	(1,637)
20年度	307	3,473　(1,148)	567　(253)	2,790　(359)	92	216	2,079	9,217	(1,760)
21年度	307	4,204　(1,599)	585　(311)	2,123　(258)	111	264	2,347	9,634	(2,168)
22年度	306	3,621　(1,151)	744　(430)	1,584　(213)	74	71	2,681	8,775	(1,794)
23年度	307	3,999　(1,245)	400　(236)	1,873　(300)	87	53	2,487	8,899	(1,781)
累　計	2,248	28,751　(8,492)	4,222　(2,074)	18,846　(2,288)	787	1,631	22,559	76,796	(12,854)

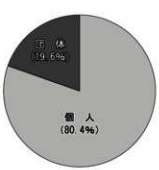
※　16年度は、11月24日から３月31日まで延べ103日間の入館者数。

【月別入館者数】

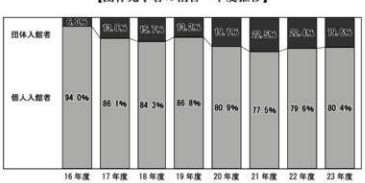
月	開館日数	有料入館者		無料入館者				合　計
		一　般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他	
4月	26	583　(264)	14　(0)	298 (191)	18	4	199	1,116　(455)
5月	26	657　(59)	17　(0)	255　(19)	13	19	144	1,105　(78)
6月	26	220　(88)	13　(0)	110　(0)	6	0	75	424　(88)
7月	27	187　(40)	137 (115)	178　(0)	6	1	131	640　(155)
8月	26	168　(0)	68　(46)	185　(0)	2	0	175	598　(46)
9月	26	196　(29)	16　(0)	103　(0)	4	0	159	478　(29)
10月	26	788　(499)	14　(0)	76　(0)	15	19	397	1,309　(499)
11月	26	536　(109)	10　(0)	345　(90)	10	10	695	1,606　(199)
12月	23	142　(21)	5　(0)	53　(0)	3	0	95	298　(21)
1月	23	231　(88)	5　(0)	49　(0)	4	0	124	413　(88)
2月	25	138　(20)	49　(37)	148　(0)	5	0	148	488　(57)
3月	27	153　(28)	52　(38)	73　(0)	1	0	145	424　(66)
合　計	307	3,999 (1,245)	400 (236)	1,873 (300)	87	53	2,487	8,899 (1,781)

※1　（　）は団体入館者の人数（内数）
※2　その他は、研修での利用（減免）・ボランティア研修等の来館者

【団体見学者の割合】



【団体見学者の割合　年度推移】

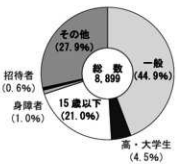


【企画展　入館者数】

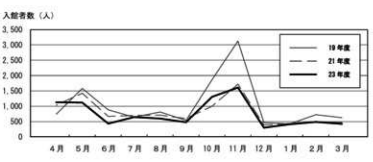
		開館日数	有料入館者		無料入館者				合　計
			一　般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他	
17年度	春季	32	733　(211)	43　(0)	222　(0)	15	77	298	1,388　(211)
	秋季	32	349　(25)	31　(0)	104　(0)	5	42	449	980　(25)
18年度	春季	32	340　(52)	65　(41)	205　(32)	10	30	140	790　(125)
	秋季	32	0　(0)	0　(0)	217　(0)	0	0	1,628	1,845　(0)
19年度	春季	32	332　(54)	21　(0)	331 (223)	9	15	140	848　(277)
	秋季	32	0　(0)	0　(0)	169　(0)	0	47	2,373	2,589　(0)
20年度	春季	32	303　(28)	15　(0)	163　(63)	7	38	178	704　(91)
	秋季	32	231　(0)	44　(0)	93　(0)	5	33	265	671　(0)
21年度	春季	32	442　(186)	20　(0)	142　(46)	9	46	132	791　(232)
	秋季	32	388　(147)	16　(0)	105　(0)	21	21	430	981　(147)
22年度	秋季	44	485　(86)	164　(92)	95　(0)	11	10	542	1,362　(178)
23年度	春季	32	478　(50)	12　(0)	150　(33)	16	15	118	789　(83)
	秋季	32	557　(276)	7　(0)	165　(45)	8	10	391	1,138　(321)
合　計		428	4,638 (1,115)	438 (133)	2,148 (442)	116	384	7,084	14,808 (1,690)

※1　（　）は団体入館者の数（内数）。18年度・19年度の秋季企画展は無料の為、団体人数はカウントしていない。
※2　本表「無料入館者　その他」は、「親子無料入館日」・「関西文化の日」の無料入館者を含む。また、18年度・19年度の秋季企画展は、文化庁の「埋蔵文化財保存活用整備事業」の為、無料とし、本項に含めた。

【入館者の内訳】



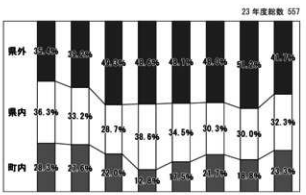
【入館者の月別推移】



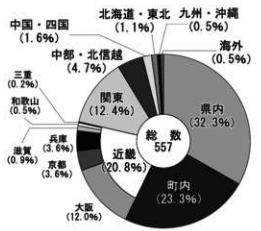
（２）入館者アンケート

入館者アンケート（常設展示）を実施した。回答総数560件、回答率は約６％である。

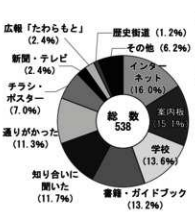
【入館者居住地別　年度推移】



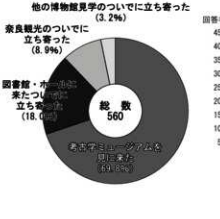
【入館者の居住地内訳】



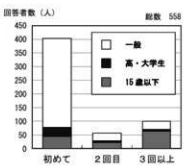
【ミュージアムを知った理由】



【来館目的】



【来館回数】



（３）視察・研修・学校等からの来館

平成23年度は、下記のとおり視察・研修１件６名、学校の利用３校394名、海外からの研究者５名の来館があった。

視察・研修　宮城県栗原市議会（10月26日／６名）

学校利用　田原本小学校６年生（４月16日／125名）・北小学校６年生（４月26日／33名）・奈良大学通信教育（７月17日／115名、８月27日／46名、２月11日／37名、３月10日／38名）

海外研究者　王仁文化研究所（４月19日／５名）

（4）ホームページ

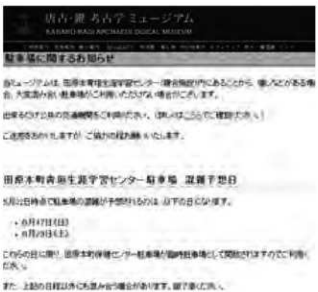
駐車場に関するお知らせとして、田原本青垣生涯学習センター駐車場の混雑が予想される日を掲載するページを作成した。また、唐古・鍵遺跡マスコットキャラクター「楼閣くん」の画像を数種類ダウンロードできるようにした。

平成23年度のアクセス数は14,385件で、前年度より約14%増加した。

【ホームページのアクセス数】

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
アクセス数	2,518	8,324	8,183	10,291	9,391	11,303	12,665	14,385
累　計	2,518	10,842	19,025	29,316	38,707	50,010	62,655	77,040

【混雑予想日　掲載ページ（平成24年５月22日現在）】



【ダウンロードできる「楼閣くん」画像】

4．ボランティアガイド

（1）ボランティアガイドの実績

ミュージアムの展示品解説ボランティアは、開館以来実施している。ガイドは年度単位とし、継続更新は可としている。平成23年度のガイド登録は37名で、23年度の新規登録者は1名である。基本的に月2回の午前10時から午後4時（冬季の12月～2月は午前10時30分から午後3時30分）までとし、常駐2人体制で実施した。また、団体客等多数の来館の場合に備えて、応援ガイド体制を作りその時間帯のみ臨時に対応している。このような体制で、下表実績に示すとおり約4割の来館者に対応した。ガイドの研修は、10月26日に「展示品の主な出土状況について」を実施した。

【展示ボランティアガイド実績】

月	開館日数	稼動人数	ガイド人数※1	入館者数（常設展のみ）
4月	26日	44人	503人	821人
5月	26日	40人	232人	645人
6月	26日	46人	198人	432人
7月	27日	47人	296人	646人
8月	26日	43人	230人	598人
9月	26日	39人	158人	478人
10月	26日	40人	239人	816人
11月	26日	46人	251人	961人
12月	23日	37人	91人	299人
1月	23日	41人	168人	412人
2月	25日	41人	143人	488人
3月	27日	42人	160人	424人
合　計	307日	506人	2,669人（38%）※2	7,020人

※1　ガイド人数は概数

※2　ガイド人数／入館者の割合

Ⅳ．資料の報告

唐古・鍵遺跡出土の絵画・記号土器と特殊土器

藤田　三郎

1．はじめに

本町では、平成21年度から採択された緊急雇用創出事業の１つとして「町内遺跡出土遺物整理事業」を実施している。平成23年度では、唐古・鍵遺跡の第23～33次調査について実施し、その一部については唐古・鍵考古学ミュージアムの春期企画展[1]において公開してきた。

唐古・鍵遺跡の調査については、概報や年報においてそのごく一部であるが報告しているが、田原本町での調査が初期であった1980年代では応急的な整理作業を実施したのみであった。このため、遺物の取り扱いについては、その基準が曖昧なまま収納しているものが多くあり、資料のデータ化・数量化ができないまま今日に至っているのが現状である。また、唐古・鍵遺跡の出土遺物は約12,000箱（W34cm×D54cm×H15cm）を保管しており、収納スペースの課題もかかえている。このような状況のため、遺物内容の圧縮も兼ねて実施している。

再整理を実施した唐古・鍵遺跡第23～33次調査は既に応急整理をおこない、その概要を６冊にわたって報告しているので主要な遺構遺物のことはそれらを参照してもらいたい[2]。今回の再整理事業では、土器を収納しているコンテナを整理したため、土器類や土製品の選別が中心であった。土器類では搬入土器や特殊土器（ミニチュア土器・異形土器・赤色塗彩土器・転用土器・被熱土器）、絵画土器を、土製品では焼土塊等の抽出をおこなった。

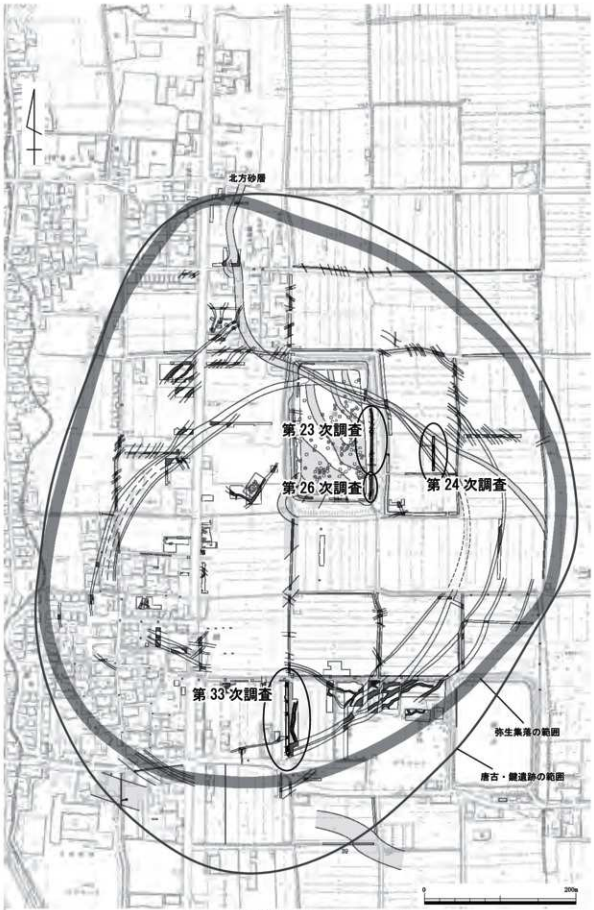
これらの再整理事業を実施した中で注目される遺物が多くみられたが、今回、特に重要と思われる絵画土器と異形土器について紹介する。絵画土器は、応急整理段階で発見し既に報告したものもあるが、今回の再整理時に接合する破片を見つけることができたものや見落としで新たに発見したものも多くあったので、改めて集成し報告することとする。

2．唐古・鍵遺跡第23～33次調査の概要

今回、資料紹介する遺物が出土した調査次数は、第23・24・26・33次調査である（第１図）。第23・26次調査は唐古池の内部である東側堤防下の調査で、池中央部分が第23次調査、池の南半から南東隅にかかる部分が第26次調査地である。この２つの調査区は、南北延長約150mに及び唐古・鍵ムラを囲む大環濠から内部の居住区にあたる。弥生時代前期から古墳時代前期までの遺構と中世の２時期の遺構遺物を検出している。特に第23次調査の第２トレンチでは、第１次調査（唐古池の調査）で検出された北方砂層の延長の砂層（ＳＲ－1101）を確認している。第１次調査の北方砂層では絵画土器が11点出土し、第23次調査のＳＲ－1101でも小規模な面積であったが３点の絵画土器がみつかっていることから、絵画土器が濃密に分布する遺構といえよう。

第24次調査地は遺跡北東部に位置し、大環濠（ＳＤ－201）から内側の居住区にかかる場所を調査した。大環濠の内側には後期（大和第Ⅵ－２様式）に掘削された大溝が併行して掘削されており、多量の土器が出土した。これらの土器の中に、今回紹介する記号土器が含まれていた。

第33次調査地は、唐古・鍵遺跡の南端に位置し、集落南側を囲む環濠から居住区にかけての部分



第１図　各調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）

を調査した。弥生時代前期から古墳時代前期までの土坑や溝、柱穴などを多数検出した。前期末から中期・後期の遺構遺物が特に多い。第33次調査では、13点の絵画土器が出土したが、これらの多くは破片であり特別な出土状況を呈するものでない。ただし第２図－１に示した建物絵画の短頸壺はほぼ全容の把握できるものとして重要である。出土地点は大和第Ⅳ－１様式の井戸（ＳＫ－120）上部から出土しており、井戸との関係も考慮する必要があるかもしれない。他の絵画土器も大和第Ⅳ様式の遺構から多数出土しており、この時期の遺構は、絵画土器との関連も推測できる渦文タタキも含めてかなりの頻度で含まれている。さて、第33次調査地の東側隣接地の第69次調査では絵画土器28点が出土しており[3]、第33次調査地と合わせると計41点になり、唐古・鍵遺跡の他の調査地と比較して絵画土器の出土密度が高い地点といえよう。第33次調査地を含む南地区では、銅鐸形や人形、鳥形の土製品、銅鋤や銅鏃などの青銅製品など重要遺物が多数出土しており、絵画土器もその一連の遺物とみなすことができよう。

3．遺物の紹介

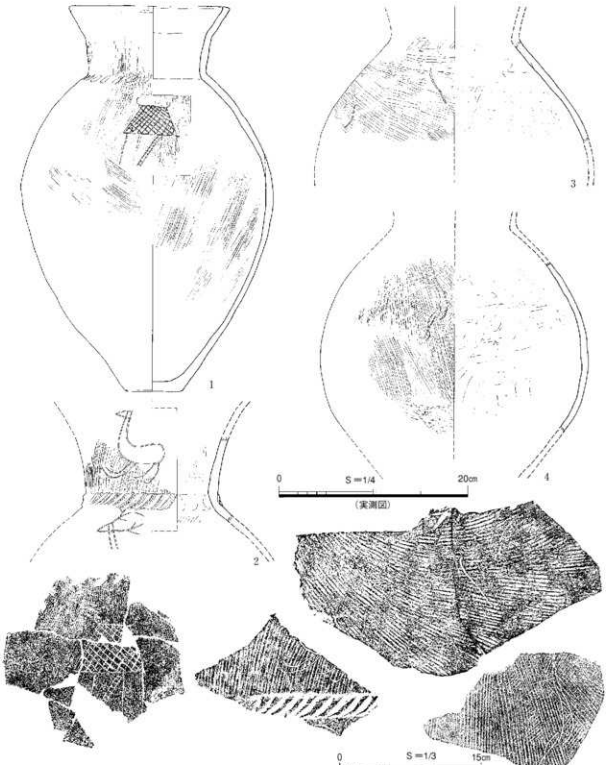
（１）絵画土器

建物　第２図－１は、短頸壺の胴部上半に描かれた建物である。本絵画土器は、既に第33次調査の概要報告[4]で第39図－１として掲載したが、その後の整理作業において同一個体の破片が多数見つかるとともに接合しほぼ半完形の状態まで復元することができたものである。縦長の球形の胴部にやや外反ぎみに直口する口頸部がつくもので、絵画土器としてはほぼ全景のわかる貴重な資料である。ＳＫ－120とＳＤ－115の上部である黒褐色土層を中心に出土したものであるが、鉄分を含んだ土層であったため、保存状態は極めて悪く土器の調整痕跡や絵画は見えにくい。内外面ともハケ調整で仕上げるが、胴部下半はケズリをおこなう。頸胴部界は、ヘラによる刺突文をめぐらす。口縁端部は面をもち内傾に肥厚する。

建物絵画は、柱４本と台形の屋根で構成されるいわゆる「屋根倉式建物」である。４本の柱の中央には、右上がりの梯子が屋根下辺と右側から２本目の柱の交点にとりつくように架けられている。梯子は、平行する２本線で輪郭をとりその間を直行する短線で充填するもので刻み梯子を表現しているとみられる。屋根は縦長の台形であることから寄棟づくりの建物で、その内部は斜格文で充填し、両端の棟先には渦ではないが半円形の棟飾りが描かれている。建物絵画としては、整った建物を表現している。

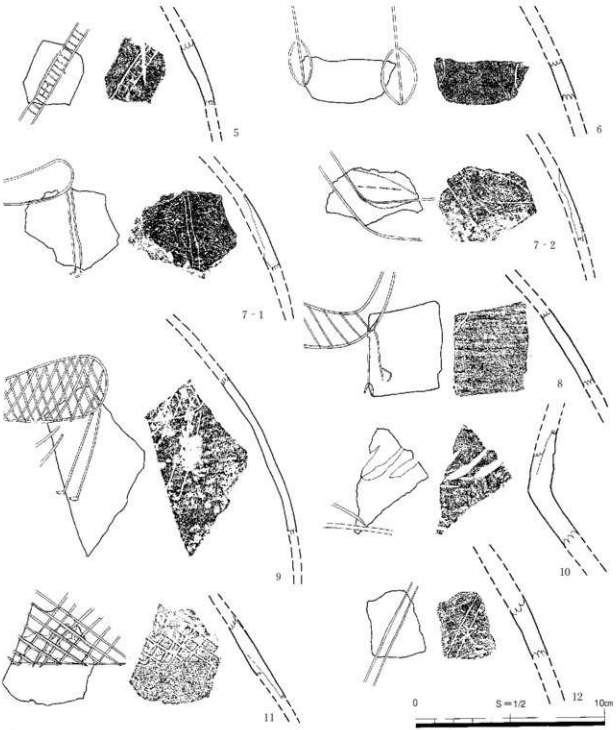
第３図－５は、建物の梯子を描いた壺の小片である。前述建物絵画の梯子と同様、平行する２本線で輪郭をとりその間を直行する短線で充填していることから梯子で良かろう。梯子の規模がこちらの方が大きいので、建物も前者より大きい建物が描かれていたと思われる。

鹿　第２図－２・第３図－７～９は、鹿を描いたと考えられる破片である。２は、短頸壺の頸部と胴部上半の２つの部位に絵画が存在するもので例は少ない。頸部はハケ調整で仕上げ、頸胴部界には平坦にした粘土紐を貼り付け、その上にハケ状工具で列点をめぐらせている。頸部の絵画は、逆「し」の字状の曲線が２本単位で２組描かれたもので、左側の曲線の上端は横線でとまっている。以上のことから、左向きの鹿を表現したものであろう。脚先は跳ねるような表現方法で、清水風遺跡第１次調査に例がある[5]。胴部上半の絵画は、残存率が悪く不明であるが曲線の方向や位置関係



遺物番号	器種	調査次数	遺構	層位／土色	意匠	備考	共伴時期（大和様式）
1	短頸壺	33	SK-120・SD-115	第0（上）層	寄棟建物	残存状況不良（鉄分付着）	Ⅳ-1
		33		第Ⅲ層			
2	短頸壺	23	SR-1101	第1層	頸部に左向きの鹿（脚4本）・胴部上端に不明線画		Ⅳ-1
3	短頸壺	23	SR-1101	第1層	不明（線描2）	内面に炭化物付着	Ⅳ-1
4	短頸壺	33	SK-120	第2層	左向きの鳥		Ⅳ-1
				第2層			
				第2（下）層			

第2図　絵画土器1



遺物番号	器種	調査次数	遺構	層位／土色	器匠	備考	共伴時期（大和様式）
5	壺	33		第Ⅰ（上）層	建物（格子）		Ⅳ-1？
6	壺	33	SK-120	第４層	船（櫂２本）		Ⅳ-1
7-1	壺	33	SK-120	第０層	左向きの鹿（後脚２本）		Ⅳ-1
7-2	壺	33	SD-115	第１層	左向きの鹿（頸部）		
8	壺	23	SR-1101	第１層	右向きの鹿（前脚２本）		Ⅳ-1
9	短頸壺	33	SD-109	第７層	左向きの鹿（胴部・後脚２本）	残存状況不良（摩滅）	Ⅳ
10	短頸壺	33	SK-105	第３層	不明（斜線２本）		Ⅳ-1
11	壺	23	SD-1101	第２層	不明（斜格文）		Ⅳ
12	壺	33		第Ⅲ層	不明（鹿の脚か）		Ⅳ？

第３図　絵画土器２

から左向きの鹿角が描かれている可能性がある。第23次調査ＳＲ－1101出土である。

7は、壺と推定される2つの胴部破片に絵画が描かれている。いずれも左向きの鹿を描いたと推定されるものであるが、被熱のためか残存状況は悪い。線刻は細く弱々しく、やや稚拙な表現にみえるものである。7－1は鹿胴部の下辺と後脚2本、7－2は胴部から頸部にかけて描いたものであるが、同一の鹿の部分かどうかは判断できない。7－2では、頸部から胴部に至る背中側の線刻が描き直しされている。また、頸部から細く浅い斜線の線刻が2本みえているが、これが何を表現したものか、鹿と一連のものなのか不明である。これらの2片の鹿胴部の内側には、斜格文はみられない。第33次調査ＳＫ－120とそれに隣接するＳＤ－115から出土している。

8も壺と推定される破片に描かれた鹿である。壺の外面には、やや太めのタタキが施されている。右向きの鹿で、前脚2本と胴部から頸部にかかる部分の線刻がみられる。足先は二股に分かれており、偶蹄類をよく観察した結果であろう。この足先の二股表現は、唐古・鍵遺跡第1次調査の北砂資料[1]や第69次調査例・戸田秀典氏採集資料[2]にみられるが、数多く描かれた鹿の足先表現としては、ごくわずかな資料である。これら資料では4例中3例が右向きの鹿であり、数少ない右向きの鹿表現のなかで足先の二股表現がとられていることが注目される。胴部は斜格文を充填している。第23次調査ＳＲ－1101出土である。

9は左向きの鹿を描いた短頸壺胴部の破片である。保存状態は悪く全体に摩耗している。外面にはタタキが施されている。後脚2本と斜格文を充填した胴部の一部が残存している。足先は少し前方に跳ねることによって足先を形作っている。全体的には少し突っ張るような動作表現で、唐古・鍵遺跡特有の鹿姿態である。この後足の少し左側にも平行する2本線がみられるが、後脚にちかいことから前脚でなくこの鹿の下側に描かれた別の意匠の部分であろう。

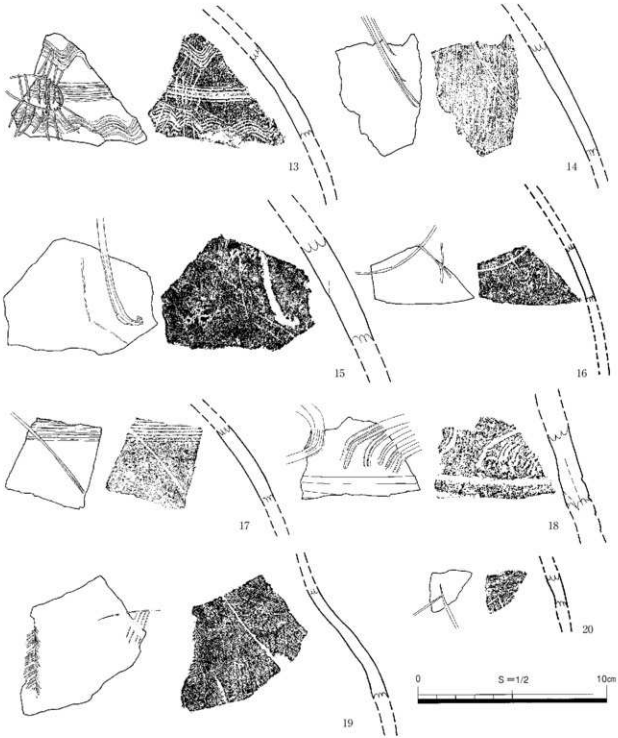
鳥　第2図－4は、短頸壺胴部上半に描かれた鳥である。胴部上半はハケ、下半は横方向のケズリがみられる。絵画は、細長の瓜状の部分を胴部とし下端に2本の脚、上端に1本の横線で頭部（嘴）を表現していると推定される。2本の脚は途中で交差している。かなり稚拙な表現である。第33次調査ＳＫ－120出土。

船　第3図－6は、壺の小片で胴部に船の櫂を表現したものと推定される。外面は、丁寧なナデ調整で仕上げている。下向きの木の葉状の線刻があり、櫂とすれば2つの間隔がかなりあいており、また櫂ひとつの表現が大きいことから船全体はかなり大きな船が描かれたと考えられる。第33次調査ＳＫ－120出土。

不明意匠　第2図－3、第3図－10～12、第4図－13～20、第5図－21～27、第6図－28は、いずれも断片資料のため、絵画意匠を特定することができない。

13は、櫛描文様の壺胴部に描かれた絵画である。胴部には櫛描きの波状文と直線文が描かれており、それら文様に重なるように意匠不明の絵画が描かれている。絵画は、楕円を描いた後、その内部を縦線で充填するとともに楕円形の上と下に縦線を不揃いに線刻したものである。スッポンにちかい形態であるが特定できない。何らかの動物を表した可能性がある。第33次調査ＳＤ－108から出土した土器片で、大和第Ⅲ－3様式の可能性があり、唐古・鍵遺跡でも古い絵画の1つである。

18は、器台に描かれた絵画である。弧線が重なるような線刻である。線刻は、工具の先端が二股に分かれていたと思われるもので、太線と細線が一対になった工具である。



遺物番号	器種	調査次数	遺構	層位／土色	意匠	備考	共伴時期（大和様式）
13	壺	33	SD-108	第１層	不明（楕円に放射線）	帯描文様上に範囲	Ⅲ-３？
14	壺	23	SD-151	第１層	不明（３本の右下がりの斜線）		Ⅲ-３？
15	壺	33	落ち込みⅢ	第２層	不明（「し」字状）	大形壺	Ⅴ
16	壺	33	落ち込みⅣ	第０層	不明（曲線３本）	工具先端は２本（太・細）に分岐	Ⅴ？
17	壺	23	SD-106	第１層	不明（右下がり斜線）	帯描文様上に範囲	Ⅲ-２？
18	器台	24		第Ⅳ-c（下）層	不明（曲線６本）	工具先端は２本（太・細）に分岐	Ⅳ？
19	壺	33	SK-159	第２層	不明（右上がりの綾杉状・斜線４本）	ヘラミガキで斜線部を消去	Ⅳ-１
20	壺？	33	落ち込みⅣ	第１層	不明（交差）		不明

第４図　絵画土器３

19は、壺胴部上半に描かれた絵画で、外面はナデ調整後に２つの絵画が描かれていたと推定されるものである。左側の絵画は、縦方向の綾杉文風のもので線刻は細く繊細に描いている。左部分が欠失しているため、判断できないが、建物等の一部の可能性もあるだろう。綾杉文風の表現は、唐古・鍵遺跡第98次調査出土の建物絵画の「縁」あるいは「露台」の先に表現している例がある[8]。右側の絵画は左下がりの斜線４本と横線１本が確認できるが、ミガキによって線刻が消されている。この両絵画の空白部分の下半には、軽くケズリをおこなっている部分があり、胴部上半でのケズリ調整はまず存在しないことから絵画が消された可能性がある。したがって、右側の一部残存する線刻とケズリ部分が一連となる絵画があった可能性もある。

21は、斜格文を内部に充填した絵画であるが、輪郭線が欠損しているため、意匠は不明である。横線を境に上下に斜格文を充填する。下側の斜格文の右端には、爪先と思われる刺突文が縦列につけられている。また、その刺突文の右側の斜格文はミガキによって消されている。全体的にみれば、建物絵画の可能性があるだろう。

22は、壺胴部の上半に描かれた絵画である。ハケ後のナデ調整の上に細線の線刻で描いている。下向きの三日月状の輪郭の内部に斜線を充填したものである。輪郭の下辺の左方には下方へのびる線がわずかに残っている。この部分だけの輪郭では意匠判断は困難であるが、第76次調査の鹿の臀部表現にちかいものが存在する[9]。

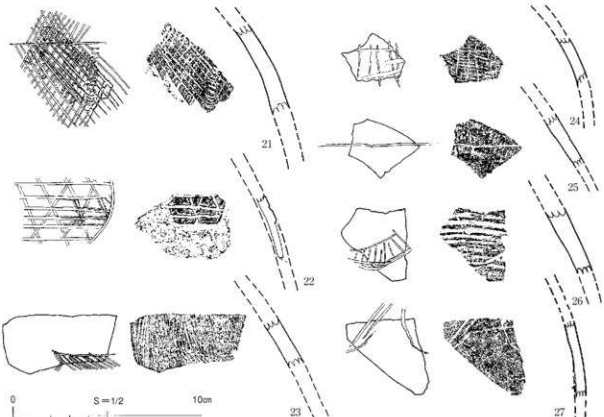
26は、外面にタタキを施した小片である。タタキの上にやや湾曲する長方形状の輪郭をもつ線刻が描かれている。その下辺の線刻は太く、足し描きあるいは描き直しの線とみられる部分がわずかに残っており、２重になっている。この輪郭線の内部は縦線を充填している。小片のため、全体像の類推は難しいが、船の舳先のようにもみえる。

28は、大和第Ⅵ－１様式の壺胴部に描かれた絵画あるいは記号的なもので、絵画とすれば新しい部類のものである。３つの破片しか残存していないので全体は不明である。線刻は、胴部上端部に横方向のジグザグ線を、その下に縦方向の斜線を逆扇形に描いている。線刻は基本的に２条が１単位になっているが、２条の線刻の幅は一定で無く、また、１つの線刻幅も太細があることから、工具は先端が平たくフレキシブルな動きをするヘラ状のものであったと考えられる。

上記以外の線刻は、小片でその一部のみが残存している程度である。斜線や輪郭不明なものも多く意匠が特定できないが、絵画として掲載しておく。

（２）記号土器

第７図－１は、第24次調査地の南端で検出した後期の環濠（ＳＤ－107）の中層から出土した広口壺である。破片で散在して出土したが、ほぼ完形に復元できた。球形の胴部に直立ぎみの口頸部がつき、口縁部は内湾する。全体的に丁寧なつくりで、胴部上半には細条のハケ調整を施した後、ナデ調整で仕上げる。口縁部はヨコナデを施す。本土器の特徴は、胴部上半に並列的な記号をめぐらすことである。記号は胴部の約半分を占めており、右から２条の円弧線（ａ）・やや左に傾斜した６本の縦線（ｂ）・壺の胴部中央に渦状の線刻（ｃ）とその右側に４本の横線（ｄ）・渦状の線刻の左側（ｅ）とその上部（ｆ）に不明記号が描かれている。ａの円弧線は、右端が収束する。線刻は細く部分的にナデによって消えている。ｂの縦線は、ａよりやや太く鮮明な線刻である。ｂの縦線と

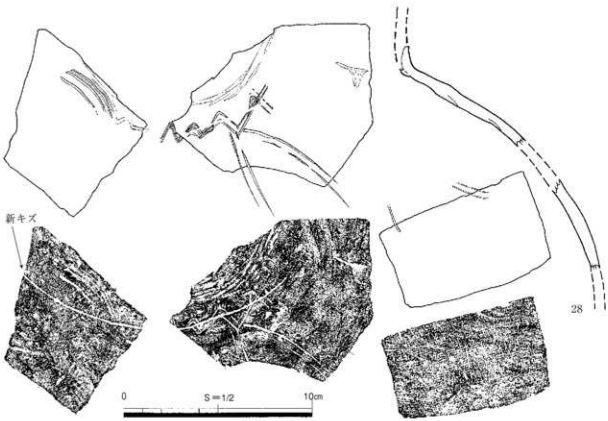


遺物番号	器種	調査次数	遺構	層位／土色	意匠	備考	共伴時期（大和様式）
21	壺	24	SD-201	第７層	不明（斜格文に縦位の爪圧痕）		Ⅲ－４？
22	壺	26	SD-2101	第１層	不明（斜線に囲み）		Ⅲ－３？
23	壺	26		第Ⅱ層	不明（斜格文に横線）		Ⅳ？
24	壺？	24	SD-107	第４層	不明（縦線５本）	ヘラミガキで縦線の一部を消去	Ⅳ？
25	壺？	24		第Ⅳ－ｃ層	不明（横線１本）		Ⅳ？
26	壺	26		第１層	不明（斜線に囲み）		Ⅳ？
27	壺	26	SD-2010	第１層	不明（斜線３本）		中期

第５図　絵画土器４

その左側のｄ・ｆの線刻との間は少し空間があり、記号としてはａ・ｂとｃ～ｆの２つの群にわけてみることができる。ｃの渦状の線刻とその右側にとりつくｄの横線、その上部の不明記号ｆの線刻は、深くて明瞭であるが、渦状線刻の左下には消された線刻らしきものも存在する。この渦状の線刻の中央部は欠損しているが、内面側にひろがる剥離痕がみられ、穿孔の可能性が高い。

今回の記号土器は、大和第Ⅵ－３様式に所属するもので、記号土器として唐古・鍵遺跡で盛行した時期のものである。唐古・鍵遺跡では、単独の記号も多くみうけられるが、今回のように並列的な記号を配するものも量的にはある程度を占めている。並列的な記号を読み解くことは困難であるが、並列的に配することに重要な意味があることを示しており、記号体系として高く評価する必要がある。今回の記号がどのようなものを示しているのかは判断できないが、胴部中央に描かれたメインと考えられる渦状の線刻は、その形態から龍あるいは弧帯文的なものの変形として推定することができよう。また、不明記号ｆは唐古・鍵遺跡第３次調査の短頸壺例に類似する形態の記号が認められ[10]、これも龍の鰭を表現している可能性があるだろう。



遺物番号	器種	調査次数	遺構	層位／土色	意匠	備考	共伴時期（大和様式）
28	壺	24	SD-201	第１層	不明（ジグザグ線と弧線）	工具は先端が２本に分岐	Ⅵ-１

第６図　絵画土器５

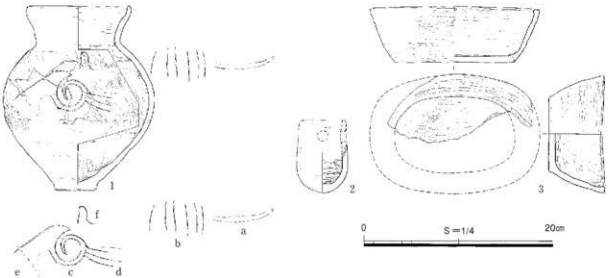
（３）特殊土器

第７図－２は、飯蛸壺と推定される底部片である。丸底の底部に直立ぎみに立ち上がる胴部をもつ。胴部の径は、5.5cmほどに復元できる。外面はナデ調整で仕上げられているが、全体に器面が摩耗しており、使用痕跡の可能性がある。内面は、底部をヘラで掻き取り成形した後、胴部にかけてナデ調整を施す。色調は淡乳褐色を呈する。本土器も第23次調査ＳＤ－151の第１層から出土したもので、大和第Ⅲ－２様式に所属する可能性が高い。

第７図－３は楕円形の鉢で、約1/4が残存している。復元すれば、長軸18cm・短軸12.5cmほどの口縁部を有し、高さ6.2cmの浅い鉢になる。口縁部は、わずかに内方へ肥厚する。内外面は丁寧なミガキ調整をおこなう。内面の口縁部下は、わずかに指頭圧痕のくぼみが残るが、全体に丁寧なつくりの鉢といえよう。このような形態の鉢は、唐古・鍵遺跡第13次調査で出土した楕円形の坏部を有する異形高坏を除き、例がないものである。木製品を模したものであろうか。第23次調査ＳＤ－151の第１層から出土したもので、大和第Ⅲ－２様式に所属する可能性が高い。

4．まとめ

今回紹介した絵画は、大半が弥生時代中期後半の大和第Ⅳ様式に所属すると考えられるもので、唐古・鍵遺跡で最も盛行した時期のものである。大和第Ⅳ様式以前の絵画土器としては、第４図－



第７図　記号・特殊土器

13・14・17、第５図－21・22の絵画土器があり、第Ⅲ様式に所属すると思われるものである。特に13・17の土器は櫛描文をめぐらせた「飾られた壷」で、その櫛描文様に重なるように不明絵画を描いたものである。大和第Ⅳ様式になって、短頸壷のように飾られない壷に絵画を描くことが主流になる以前、飾られた土器にも絵画を描くことが存在したことは注目される。これは唐古・鍵遺跡だけでなく、橿原市四分遺跡や宇陀市平尾東遺跡など大和の他地域の遺跡[1]でも時期と器種が連動して存在しており、大和での絵画を土器に描くという行為の初期様相として捉えることができよう。これら資料は、本遺跡でも古い時期に位置づけられる絵画資料として重要であろう。

一方、第Ⅴ・Ⅵ様式の絵画もわずかに存在する。いずれも具体的な絵画意匠を示すものではない。特に第６図－28は、絵画というよりは記号的になったもので退化傾向が読み取れる資料となろう。その延長の資料として、第７図－１の記号土器が位置づけられる。この記号土器は、かなり抽象化が進んだものと理解できそうで、龍・弧帯文との関係も想定できる資料となろう。また、並列的な配置を有する点も重要である。

特殊土器として、楕円形の鉢と飯蛸壷を紹介したが、いずれも唐古・鍵遺跡では類例の少ないものである。特に前述資料が飯蛸壷として認められるならば、唐古・鍵遺跡では２例目になり、時期的には弥生時代中期中葉の古い時期に位置づけることができるものとなる。唐古・鍵遺跡の食材流通を含めた交流を考える上で重要な資料となろう。

註

1）　田原本町教育委員会　2012「唐古・鍵遺跡再整理事業」『村を守る』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録　Vol.14

2）　a．田原本町教育委員会　1986『唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要４』

b．田原本町教育委員会　1987『唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要７』

c．田原本町教育委員会　1987「唐古・鍵遺跡第27・28次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要８』

d．田原本町教育委員会　1987「唐古・鍵遺跡第29・30次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要９』

e．田原本町教育委員会　1988「唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要６』

f．田原本町教育委員会　1989「唐古・鍵遺跡第32・33次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要11』

3）田原本町教育委員会　2009『絵画土器・土器文様・特殊タタキ文様』『唐古・鍵遺跡Ⅰ　特殊遺物・考察編』

4）註２-fに同じ。

5）奈良県立橿原考古学研究所編　1987「清水風遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1986年度』第28図－15・17

6）末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎　1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊　第62図－７

7）藤田三郎　2006「唐古・鍵遺跡出土の鹿を描いた土器」『田原本町文化財調査年報14　2004年度』田原本町教育委員会

8）註３、遺物図版１－Ｐ5005

9）田原本町教育委員会　2006「弥生の絵画」『田原本の遺跡４』48．稚拙な表現の鹿

10）田原本町教育委員会　2009『弥生グラフィティー』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録　Vol.10

11）藤田三郎　2003「絵画土器・特殊土器」『奈良県の弥生土器集成』大和弥生文化の会　第57図－178・第58図－179

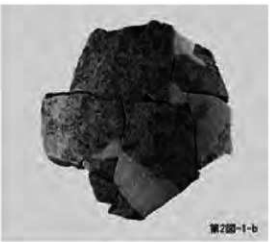


写真１　絵画土器・記号土器

田原本町文化財調査年報21
2011年度

平成25年３月29日

編集発行　田原本町教育委員会
印　　刷　株式会社　明新社